

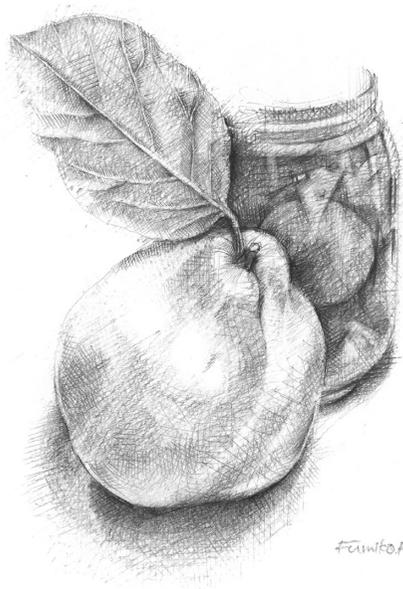
A scenic landscape photograph showing a dense forest of tall evergreen trees and some deciduous trees with vibrant autumn foliage in shades of red, orange, and yellow. The forest is reflected in a calm body of water in the foreground. In the immediate foreground, there are green, leafy plants. The overall scene is peaceful and natural.

あきたの文芸第54集



「あきたの文芸」

第五十四集



fumiko.F

あきたの文芸 第54集 目次

● 小説・評論

奨励賞  
入選  
グリーン賞

東っ  
禍か  
流る  
鈴木利良  
蜜木きいち

坂本愛子

● 詩

奨励賞  
奨励賞  
奨励賞  
奨励賞  
入選  
グリーン賞

種を蒔く  
夜明け前  
ノー・タイトル  
フィクションが救い得る世界について  
人生の栄養  
鈴木修一  
空音樹 奏  
白石 眞奈子  
佐藤清助  
高橋美咲子  
佐藤叶実  
高橋岑夫  
工藤美咲  
田口夏音  
霜月楓  
浅利駿斗  
安宅キサ子  
皐月真美

● 短歌

最優秀賞  
奨励賞  
奨励賞  
奨励賞  
入選

集団移転  
赤の他人  
農に生かさる  
おかげに生かさる  
佐々木ヨリ子  
館下昇悦  
井上乙穂  
鈴木修一  
森野津  
加藤一弥  
工藤美咲  
浅利繁雄  
箕浦宮子  
賞野津



● 最優秀賞受賞のごとば

● 選

評

工 ツ セ イ	川 柳	俳 句	短 歌	詩	小説・評論
------------------	--------	--------	--------	---	-------

澤 高 斎 打 堀 渡  
井 橋 藤 矢 江 辺  
範 三 淳 京 沙  
夫 鳩 子 子 才 修  
枝

中 宮 片 福 佐 大  
尾 腰 倉 岡 々 原  
信 流 俊 勢 久 か  
一 木 秀 子 春 おり

柴 柴 佐 伊 成 山  
山 田 々 藤 田 崎  
芳 政 公 寛 豊 義  
隆 幸 平 雄 人 光

● 「あきたの文芸」第54集応募状況

● あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說・評論

# 小説・評論

## 奨励賞 東 禍 流

由利本莊市 坂 本 愛 子

梢にしがみついていた名残りの葉を、容赦なく吹き散らして荒れた風雨は、鳥海山では雪になつたらしく、ひと晩で山裾までを覆いました。昨日まで藍色が勝っていた山肌は、ほほ白一色に覆われていますが、目を凝らせば淡い陰影が地模様のようにいろどっているのがわかります。

長く裾野を引いた独立峰は、白い打掛の裾をさばいた女人のように見えます。打掛はこの春、婚礼写真を撮るときに着付けてもらいましたが、綾織の絹の厚みに加えて、襷たすまという裾まわりに真綿が入っているので、身動きが取れないほど重いものでした。「先生」と呼ばれる年配の美容師さんは、棒のように突つ立った私に、裾さばきや大振袖の扱いを教えてくれました。その打掛の襷たすまを取って大きく振り向いた、衿あぐみから衽あぐみの曲線が、ここから見る鳥海山の谷筋

によく似ています。

そしてこの打掛の主は、懐深く木や草や獣や虫や、あらゆる命を包み込み、眠らせて、ともに春を待つのです。

子どもこのころから見慣れた山ですが、嫁いで初めて、この地の人びとの暮らしが鳥海山とともにあることを実感しています。

数万年前の大噴火で日本海に飛び散った噴石は、芭蕉が「憾あやむがごとし」と嘆息した象潟の「九十九島」を形成しましたが、江戸時代後期の地盤隆起により、一夜にして海底が干上がったといえます。春、田んぼに水が張られるいつときだけ、往時がしのばれるのですが、鳥海山まで遮るものなく広がる水田と、水面に映る逆さ鳥海を見ると、この家の人たちの大らかさを育んだ風土というものを思わずにはいられません。

標高二千二百メートルあまりの高山は豊かな水の恵みをもたらしてくれませんが、その水の清冽さは、ともすれば稲の生育を阻害する冷たさにもなりました。先人は、水路をあえて蛇行させ、階段状にすることにより、太陽の力により水を温める方法を編み出したのです。まさに、

鳥海山とともにある暮らし、というものでしょう。

先月、夕食のあとに、夫の祖母が冊子になった暦を見えていました。この暦も、暮れに回覧で注文を取るので、たまたま外にいた私に隣家のおばあさんが、「暦と大麻の注文だす」と回覧板を差し出したので、私はあいさつを返すのも忘れるほど驚きました。「大麻」という言葉が、お日さまのもとで堂々と発せられるのを、初めて聞いたからです。傍にいた夫が、果然としている私の代わりに回覧板を受け取って、神社のお札ふだのことだと耳打ちしなければ、私はそこで石になつたままだったかもしれない。昔は大麻草で作った縄なわだったと聞いて、肩の力が抜けたのを覚えています。

ばばちゃん、鼻の上にはずらした老眼鏡越しに、夫に問いかけます。

「今年の霜月満月は二十日の土曜日だな。淳は今年も『泊り』だが」

「オレは『泊り』だな。夜中に出勤入ると大変だし」

家族が口ぐちに言うには、十一月の満月の夜は「ツカルさま」といって、日が落ちたら外に

出てはいけない、一切の物音をたててはいけないのだそうです。消防士の夫には緊急無線が入ることがありますし、なによりも、身体も地声も並はずれて大きい夫に、そんな仏道修行のよくな真似ができると思えません。それで、毎年その日は宿直勤務をかって出るのでそうです。

「智ちゃん、ひとりで徒然なければ、ひと晩実家サ泊めてもらってもいいんだよ」

と姑さん。このあたりで「徒然ない」とは、『徒然草』にいう「手持ち無沙汰」というよりは、「心細い」とか「寂しい」とかいう意味です。

「大丈夫だよな。リアル『クアイエット・プレイス』だもんな」

と夫がにやにやしながら言いました。異星人が聴覚だけを頼りに地球人を襲う映画を、渋る夫を引つ張って観に行ったのは、初夏のころです。「音をたてたら、即死」というキャッチコピーの、ホラー映画でした。その後しばらく夫とは、クアイエット・プレイスごっこで遊んだものです。片方が急に振り向いたら、もう一方は動きを止めなければならないという遊びです。昔の「だるまさんがころんだ」のような、

他愛のないものでしたが。

舅さんとかあさんは米の出荷に、ばばちゃんは秋野菜の収穫にと、気ぜわしいひと月が過ぎ、ツカルさまの日がやってきました。

空は紺色に澄みわたり、「高い」というより「深い」と言いたいほど。葉を落としたケヤキの枝は、空に透かした繊細な切り絵のようです。

小春日を惜しんで、今日二度目の洗濯物を干している、かあさんの車が買い物に出ていきました。ばばちゃんは縁側に座布団を持ち出し、小豆選りを始めるようです。古い塗りのお盆に小豆をひとつかみ放ち、眼鏡もかけずに虫食いや未熟な粒を選びわけています。仕事が休みの私も、今日は家事に一日費やすつもりでした。万が一にも、出かけて帰りが遅くなりなどしたら、家族がどれほど気を揉むことでしょう。それに、「ツカルさま」とはいつたいなにか、怖いもの見たさの血が騒ぐのです。私も小豆選りの支度をして、ばばちゃんの隣りに座りました。

「ツカルさま」か。

「ツカル」は東から禍いが流れてくる、そう、「東禍流」と書くのよ。はるか昔のご先祖さまから伝えられた、恐ろしい話よ。

ご藩政の時代だば、日本中どこでもたびたび飢饉があつたというべ。その飢饉の、ひとつの話だ。

田植えのころは温くて、男連中は下帯ひとつで苗採りした。ところが入梅の雨がいつまでたつても止まねえ。それどころか日ましに寒くなって、六月というのに雨に白いものが混じる始末だ。植えたばかりのヒヨヒヨてえ苗っことは、成長るどころか日ましにうなだれるありさまだ。

梅雨明けの印もないまま長雨は上がったども、お日さまは低い空を力なく横切るばかり。これだば半作どころか一粒も実らねえかも、とご先祖さまはすぐに村じゅうに触れを回した。この家は「親方」といつてな、今でいえば村長みてえなものだった。

「大根種をあるだけ蒔け。芋を植えろ。」芋って言っても、じゃが芋やさつま芋でねえ。今でいえば里芋だな。ここいらでは「からとり芋」と言つて、芋はもとより、茎も干して非常食にした。芋がらを取るから「柄取り芋」だ

な。大根も芋も、遅く蒔いても採れ時はおんなじだと言つて、重宝されたもんだ。

実らねえ田んぼは水を抜いて、大急ぎで大根を蒔いた。田の畔には豆、小豆。秋には村じゅう総出で山栗拾い。栗ばかりでねえ、どんぐり、トチの実、ブナの実。どんぐりもトチの実も、そのままではアクが強くて食べられたもんでねえ。木灰でゆでて、何日も流れ水にさらして、石臼で挽いて粉にする。

百合根、自然薯、クズやワラビの根っこは滋養のあるものといわれてな、乳を出すから産婦さんに食わせたもんだ。

親方衆から小作までそうやって備えたから、この村では餓えた者はいなかった。まあ、冬になれば浜にハタハタが上がるし、な。そういう点では、ここは安気な土地だと言えるべし。

「飢餓三年」という。

今で言えば、「冷夏」は一年こっきりでは終わらない、つていうことだ。一年目はなんとかしのいでも、二年目の春に食い物が底をついて、とうとう種もみに手を付けてしまう。そうになったら秋には「ちようさん」しかねえ。

んだ、「逃散」つて言えば、百姓が田畑を捨

てることだ。田畑を捨てて逃げて、行くあてはねえ。大手を振つて関所を抜けられるわけはねえから、杣道や獣道をよろばい歩く。子を捨て、親を見殺しにして、さまよい歩く。

そんな飢餓二年目の、霜月十五日のことだ。初雪は降つたものの、名残りの小春が続いて、軒下や日陰に薄白く残るばかり。こんなときは、ふだん草むらや笹やぶに隠れている山道が、まるで黒生地に白糸で縫い取つたみてえに、はつきりと見えるものよ。

村の東を、中山が屏風みてえに閉ざしている。あの山を越える道が、稲妻のように林の中に刻まれているのが、初雪の後だけ見える。山の木がすっかり葉を落とした後でねえと見えねえんだ。ああ、あの山を越えたところにも村があつて、人が住んでいるのだな、つて思ったもんよ。

その夜は満月も凍るような寒さだったから、みな大扉も雨戸も締め切つて早寝したもんだ。月が空のいちばん高いところから、冷てえ光をまき散らしていた。

村の東、中山の方角から、大勢の足音が乱れ、近づいてきた。

大きな物を打ち壊す音。祈るような、呪うような声。泣き叫び、荒れ狂う悲鳴。それを打ち消す怒声と地を這う唸り。

戸の隙間からのぞく勇氣はだれも無かつた。親子、夫婦ひと抱き合い、布団をかぶつて念仏を唱えるばかり。障子の破れ目に目を寄せた者があつたら、冷てえ月の光の中で、手当たり次第に打ち壊し、襲い、奪う亡者の一団を、この世のものとも思えねえと見たことだろうな。

夜明けを待つて、鍬や鉞を持った男衆が恐るおそる集まつてきた。

東の村はずれには、忠平という小作の家があつたはずだが、壁も柱も打ち壊されなぎ倒され、茅屋根と柱が残るばかりで、奥の林が見渡せた。家の中は大風でも吹き抜けたみてえなありさまで、食い物はおろか、壁土に塗り込んだ稲わらさえ掘り出そうとした爪跡があつたと。箆箆長持の中まで漁つたと見えて、手拭い一筋残つていねかつた。忠平の家族も、足萎えの婆から子どもらまで、神隠しにでもあつたように、なんの跡も残さねえで消えてしまつたと。連れ去られたあとどうなつたか、恐ろしくてだれも口に出せたもんでねえ。

だれ言うともなしに、「あれはツカルに襲われたんだ」ってことになってな、忠平の屋敷跡に「ツカル神社」っていうお社を作って、霜月満月の日には施餓鬼のお祭りをするのよ。

あの世で腹いっぱい飯食えるように、この世の誰ひとり飢えねえように、って、破れ蓮だの露の葉だのサ白い飯盛ってな。「ツカルさまには白い飯」って、搗きたて炊きたての新米をてんこ盛りするのが決まりだ。

ん、「ツカル」ったあ、津軽のことよ。津軽だの南部だのの衆が飢餓に貧窮ひんくわうしているちゅう噂は前からあった。

津軽の衆なら北の方角、秋田のご城下のほうから来るはずだってか。んだな、ご藩政のころだもの、佐竹さまのご領地に飢えて逃散した者がいるとは、口が裂けても言えるめえ。んだから、津軽さまには悪いけんども、「津軽の衆」っていうことにしたんだべな。お社に、「東のほうから流れてくる禍」と大書した扁額を掲げたのは、いつの時代の神主さんだったやら。

ツカルさまの日には、日の高いうちに飯も風

呂も済ませてしまう。日が落ちたら大扉も雨戸も締め切って、コトリとも音立ててはならねえ。ろうそく一本の明かりもつけてはならねえ。それが決まりだ。

夜更けに郷社の祢宜ねぎさんが見回りに来る。年が明けて、みなが初詣に集まると、祢宜さんが重々しく言う。

ツカルさまの夜、誰その家で明かりが見えただ。火事が起きねばいいども。どこそこの辻で話し声が聞こえたと。流行り病に気をつけるべし。

だれもその夜に祢宜さんの姿を見たことはねえども、そのご託宣はおろそかにできねえもんだ。

名指しされた家は、一年じゅうびくびくって暮らさねばねえ。下手すると、火事も病も長雨も日照りも、みんな自分のせいってことにされてしまう。

んだから長い間、村には犬がいねかった。今だば飼ってる人もいりども、それだってツカルさまの夜にはペットホテルに預けたり、嫁さん

が犬っこ連れて実家に泊まったりしていると思うよ。

牛馬も「ツカルさま」の夜は鳴かないもんだ。物音といえば、川のせせらぎと森の梟すうの鳴きかわす声ぐれえのもんで、それすら遠慮がちに聞こえたもんだ。

私の同級生で、ツカルさまの夜に産まれた子オがいる。

予定日はずっと先だったはずだども、昼過ぎに急に産気づいてな。家の者も産婆さんも大慌てよ。だども産婆さんが肝の座った人でな、赤ん坊が生まれるほどめでてえことはなし、産声上げたら悪いなんぞという神さまがいたらここサ連れて来い、ちちゅうてな、無事にお産を済ませたんだと。そして、産婆さんに喧嘩を売られたと思っただか、ゴロゴロピカピカ、大雷の大雨よ。

さすがの祢宜さんも、こりゃ一步も出られん、と早寝を決め込んでしまった。赤ん坊の祖父さまは、雷さまに助けられた、って喜んでな、「雷子らいこ」って名付けたもんだ。あとで親父さんが、「なんぼなんでも、女の子に『雷』は」って、「頼子」って直したどもな。

んだよ、ツカルさまはそれはおつかねえもんだ。

私の父親が若エころだから、明治の終わりから大正の初めの話だ。

父親より少し歳上の、佐々木安治っていう若い者がいた。安治は村相撲の横綱を張るほどの体格で、米かつぎをすれば両肩に一俵ずつ載せて走る、木出しをすれば馬より早いという強者でな、しかもめっぽう肝が太い。

その安治と子分っつが霜月満月の日に、「ツカルだかなんだか知らねえが、何を恐れることがある」ってな、まわりが止めるのも聞かねえで、ツカルさまのお社で酒盛りをしたんだと。あかあかと灯ともしこ点けて、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎよ。

満月が山の端から離れ、そろそろ祢宜さんが来るころと、近所の衆がはらはらしていたら、ウォーッとともワーッとともつかねえ獣のような声が出てな、言い伝えのように物を打ち壊す大騒動の音のあと、シーンと静まったんだと。さあ、みんな生き心地しねえ。お定まりの布団被って、念仏唱えて、ひたすら朝を待った。

それから先は前と同じ、お社は踏み荒らされ

たようになって、安治と子分っつこの姿は見えねえ。ただ言い伝えと違うのは、辛うじて残った板壁に、鬼の手形のような血の跡が付いてたんだと。

帰ってきたかあさんが、買い物で冷蔵庫にしまいながら、少し強い口調で言いました。「ばばちゃん、智ちゃんとおおつか怖がらせれば駄目だよ。智ちゃんも、ばばちゃんは講談師と同じで、見てきたような嘘をつくから、本気にするんでないよ」

「智ちゃん、ごめんごめん、ただの話っこだ。私の父親が無類の講談好きでな。ムジナに騙されて法事の油揚げを取られた話だの、月の明かりで田植えをしているあねさんに、『そろそろ上がらねすか』と声をかけたら、『はいな』って振り向いたあねさんがのっぺらぼうだった話とか、さんざん聞かされたもんだから」

「ばばちゃんってば、もう。言ってるそばかとかあさんの口調が強くなり、ばばちゃんはいたづらがみつかったように首をすくめました。」

かあさんが物置から一升炊きという大きなガス釜を出してきて、新米を研ぎ始めました。

農家だけれど、というべきか、あるいは米農家だからこそなのか、去年の米を食べ終わるまでは新米に手を付けられないのがこの家の流儀です。サラリーマン家庭に育った私は、時期になれば新米が食卓に上るのが当たり前と思っりましたが、それはすべてを金銭で購うことに慣れた者のみの贅沢なのだと、この家に来て初めて知りました。

ガス釜がふつふつ煮立ち、新米の甘い匂いが家じゅうに漂います。ツカルさまには白飯と決まっていますが、わが家の夕飯はお稲荷さんです。夜中に小腹が空いても、暗闇でつまんで食べられるというので選ばれたようです。

かあさんは大鍋に煮含めた油揚げを半切りにして、手際よくザルに並べていきます。ばばちゃんはそれを一枚ずつ袋状に開きます。私も見習って切り口を開いてみましたが、柔らかいお揚げはなんと心もとなく、今にも破れそうで指が進みません。見かねたらしいばばちゃんがすりこ木を出してきて、油揚げの上を二、三度転がして見せました。魔法のように油揚げが

口を開け、ばばちゃんはさっきの詫び、とでもいうように、また肩をすくめて見せました。

ツカルさまの話の陰惨さは、それが夢幻ではなく、現実にあったことを基にしているから、ひとしお胸に沁みるのでしょう。けれど、その救いのなさをも飲み込んで、人びとは暮らしをつないできました。飢えた人たちの魂を鎮めるとともに、今日食べられることに感謝する。そして、この飽食に馴れてはいけない、いつまた飢餓の日が来ないとも限らない、との警告と畏怖の意味を込め、綿々と伝えられてきたのではないのでしょうか。

初めてのツカルさまの夜は、こともなく過ぎました。

枕もとの電気スタンドに覆いをかけて本を読んでいるうちに、いつの間にか眠ってしまったようです。早起きのとうさんが雨戸をあける音が、いつもより大きく晴れやかに聞こえたのは、私だけではないかもしれません。

空は今日もまぶしく晴れあがって、空気がピンと張りつめています。日が高くなるにつれ、固く凝ったものがゆるゆると解けるような、の

どかな空気が満ちてきます。

ばばちゃんは今日も日なたで、小豆仕事を続けるようです。

初夏には梅仕事、秋には豆仕事、小豆仕事、という言い方も、私がこの家で知ったことばのひとつです。確かに、収穫から食卓に上るまでは、「仕事」といふべき作業の連続なのでした。昨日、縁の外に選り出した小豆殻やくず小豆は、朝早くスズメたちが片付けたらしく、掃いたようにきれいになっていました。私はまたばばちゃんの傍に座布団を寄せました。

智ちゃん、昨日の話にはな、まだ続きがあるんだ。安治っちゅう若いもんが、ツカルさまの夜にいなくなった話な。

私の父親は尋常小学校の代用教員だったけど、どうしても東京サ行きてえ、東京サ行つて医者になりてえ、つて言つてな。親戚寄せして、談議して、田んぼ三枚売って金を作つたと。中山超えて、直根、笹子を通つて雄勝サ出て、院内から汽車サ乗つた。当時の院内は鉱山で大繁栄していたから、院内から本荘湊までの街道筋も栄えていたという。鉱山のおかげで、奥羽本線は羽越本線より早く開通したのだろう

な。

無事に医専（医学専門学校）サ入つたものの、三年生の秋にあのスペイン風邪よ。

大正七年、春先からじわじわと広がっていた「流行性感冒」が、寒くなるにつれ、爆発的に流行した。病院も足りない、医者も看護婦も足りない。病院に入りきれない患者が、玄関にも軒下にもあふれる始末だ。医専の学生も勉強どころでねえ。現場サ駆り出されたども、薬があるわけでねえし、安静にさせて見守るしかない。それでもあっちこちから「先生」、「先生」と声がかかる。苦しがる患者に、してやれることは何もない。ただ、気休めのように胸に聴診器をあて、「がんばれ、がんばれ」と声をかけるのが精いっぱいだ。

患者は少しも減らないまま、年が変つた。命の灯が燃え尽きるみてえにはかなくなる人もいる。この世に強く思いを残したまま、苦しみぬいて目を落とす人もいる。だども、その死を悼む暇もなく、次の患者が運ばれてくる。普段は話好きなお父さんが、その話になると「地獄のようだった」としか言わねかったのも無理ねえわなあ。

風に梅の香が混じって、少し日脚が伸びたかと思う頃だったと。

長いこと廊下で待たされ、昨夜遅くやっと入院できた患者の検温に行った。カルテには村田安治、二十八歳、とある。看護婦が言うには、一代で身を興した木場の材木屋の旦那で、女房と幼い娘が先に患<sup>か</sup>つて死んでしまった、その葬式が終わったところで自分も倒れたんだと。

病院の薄い掛布団を通してわかる立派な体格と、意思の強そうな張った顎、熱で赤らんだその顔は間違えようもない、ツカルさまの夜にいなくなった、佐々木安治その人だったんだと。

医専の学生にはろくに休みもねえ。その夜も氷のうを替えたり苦しがる背中をさすったり、寝もやらず空が白んだ。

寮に帰る前に安治の病室をのぞいてみると、病人は目を覚ましていた。熱が下がったらしく、唇がかさついてひび割れている。

「安さんだよな」

「おお、政か。こんなところで逢うとは思わなかったな」。

苦笑いした顔は昔のままだ。若いころのワル

ぶりは男らしさが変わって、恰幅のいい姿はやり手の商人らしく堂々としている。身体を起して、背中にたたんだ布団を入れてやると、息がしやすくなったのか、日に灼けた頬がゆるんで、問はず語りが始まった。

俺ア、あの狭い村で一生を終えるなんてまっぴらだと思つたのよ。毎日まいにち山仕事と田んばばかりで、一年先も十年先も、死ぬまで見通せるような暮らしは、二十年で飽き飽きした。親父も爺さまもひい爺さまもみんな同じ、生まれて、働いて、死んでいくだけだ。俺はだれに決められたのでもない、自分の生き方をしたいと思つた。けど、家にはお袋と弟妹しかいねえ。東京に行きてえなんぞ、口に出せるもんか。で、考えた。ツカルさまの夜に、神罰が当たつたように見せかけて姿をくらまそう、神罰ならお袋も諦めがつくだろう、と。

それからは稼ぎに稼いだ。炭焼きの荷駄運び、木出し、薪拵<sup>こしら</sup>え。ゼンマイ採りは手がかかるが、いい銭になった。汽車賃が貯まるまで二年かかったぞ。やっぱり東京に出たがっていた子分に声をかけ、ツカルさまの夜を待ったというわけだ。

家いえが寝静まったのを待って、用意の太い丸太であちこちぶつたいてな、あらげほうだいあらげまわって、さすがの俺も息が上がったよ。

月あかりを頼りに村は出たものの、街道は人目に付く。鳥海山のマタギ道が山形の真室川に通じているのを、山仕事のときに見つけてな。あの年の霜月満月は八日だったから、雪もまだ浅い。それでも真室川に降りたときには、わらじは藁くず同然になっていてほとんど足袋裸足、着物の裾は凍っていたわ。そこからは政も通つたとおり、汽車を乗り継いでの旅よ。

俺にあるのは力と度胸だけだからな。上野駅からあてもなく歩いて、眼についた木場で人足になった。山と木のことなら知らねえことはねえ。人足頭になるのに時間はかからなかった。そのうち、木の買付けに連れて行かれることになり、眼が効くというので遠出を任される。あつという間に親方の娘婿に請われて、小さいながら一軒の店を預かる主<sup>あ</sup>よ。

だけどな、自分の店に女房と娘、欲しいもんがみんな手に入ってみると、それはそれでおつかねえもんだ。

木場の敵は火事よ。ジャンと半鐘がなつてみろ。火元はどこだ、風向きはどっちだ、と生きた心地もねえ。おとなしい女房だが、俺ア学問がないから、どこかで気遅れがある。娘の扱いかたもわからねえから、むやみに甘やかしたり、口やかましくしたり、われながらちぐはぐだ。

そんなとき、眼に浮かぶのは鳥海山の姿よ。東京から見る富士山みてえに小さくねえ、眼の前をさえぎるようにそびえたつ鳥海山だ。いじけてどうする、遠くの富士山より近くの鳥海山のほうが大きいぞ、つてな。屋根の間から親指くれエに見える富士山に、勝手に毒づいたもんよ。

いっしょに村を出た子分ツコとは、上野駅で別れた。それつきり会つてねえ。どこでどうしているか、浮浪者なんぞに身を落としていないといいが。芸者を揚げたり、芝居小屋を借り切ったり、羽振りのいい真似もした。食い詰めたヤツが、評判を耳にして訪ねて来やしねえか、と思つてな。

ん、ツカルさまの壁の、あの手形か。兎ワナを仕掛けてな、その血を塗りたくつたんだ。兎

肉は道中の糧秣にした。残りは真室川の町で、結構な値で売れたもんだ。

政よ、俺アゆうべ鳥海山の夢を見た。女房も娘もいない東京に、俺の居場所はあるだろうか。鳥海山が帰つて来い、つて言っているみてえだった。帰つてえなあ。妹は嫁に行つたらうか、お袋はびつくりするだろうな。

んだな、雪が解けたら、一緒に帰つてえなあ。

政よ、頼みがある。

ここに郵便貯金の通帳がある。これは店のものではなく、俺が少しずつ貯めたものだ。一緒に遊山に行く女房も、欲しがるならなんでも買ってやる娘も、もういない。政よ、お前が医者になって田舎に帰るときに、お袋に持つて行つてやつてくれ。村に郵便局がないなら、金を引き出せるように、なんとか力になつてやつてくれ。

私の父親はもろん、「早く快くなつて、一緒に帰ろうや」と言った。安治の容態は快方に向かっているように見えたとし、声にも張りが

あつて力強かつたから。だども安治は首を縦に振らなかつた。通帳の入つた布袋を無理やり押し付けて、「ならば退院まで預かつてくれ」と聞かなかつた。父親は仕方なく、その袋を持ち帰つた。

翌朝、出勤した父親は、安治が昨夜遅く息を引き取つたことを知つた。

一見回復したかに見えて、そのあと急に容態が変わることはある。この辺では「中治り」といつてな、言い残したこと、やり残したことを済ませて、悔いなく眼を落とすためにあるのかも知れねえ。安治は心残りを全部吐き出して、名前どおりに安んじて逝つたんだべな。

私の父親は結局、医専を一年残して退学し、村に帰つて来た。はやり病に医学がいかに無力かを思い知つたんだべな。しばらくは腑抜けたみてえになつて、家サ閉じこもつていたども、勉強し直して中学校の先生になつた。で、世話する人がいて婿になつた。そして生まれたのが、この私よ。

しかし、スペイン風邪の巣窟みてえなところで働いていて、感染らなかつたのは命冥加としか言いようがねえ。父親も、一度は失つた命と

見定めたものか、どんなことも慌てず騒がず、黙って受け入れる、懐の深い人だったと思う。

安治の貯金通帳は、こっそりおつ母さんに渡したと。おつ母さんは私の父親の手を取って、嘆くやら拝むやら。それはそうだな。死んだと思っていた倅せがれが実は生きていて、と思つたら大金を残して死んだ、と聞かされたのだからな。そして、父親がそのまま懐ふところサ入れて口を拭つてもわがんねのに、真つ正直に届けてくれたと知れば、伏し拝むのもわかるわな。

安治の件があつてから、もともと肩身狭く暮らしていた家族は、そのあと少しばかりの田んぼを本家に返して、村を出ていったという。どこサ行つたかは知らねえが、家族が小さな家ツコ買つて、ひっそり暮らせるだけのものを残したとすれば、安治も本望だったべ。

去年が父親の五十回忌でな。こんなご時世だから、お寺で読経してもらうだけにした。

お寺には、その年に年忌法要が当たつている仏さまと、施主さんの名前が貼りだしてある。

お寺の奥さんの言うには、おとしは百回忌が書ききれないほど多かつたんだと。数日で家

族全員が、とか同じ命日の人が何人も、とか。「百年前（正しくは九十九年前だわな）に何があつたんでしょねえ」

って、奥さんは首をかしげていたども、私はスペイン風邪だつてわかつた。この村で大流行したという話は伝わつてねえども、都会に出た二、三男やその家族がやられて、実家だの本家だのの墓に入ったということは、あるだろうなあ。

ばばちゃんの見てきたような長い話が終わりました。

冬の初めとしては強い日差しが、高い空から、金の針のように降り注いでいます。そろそろ宿直明けの夫が帰る時刻です。

百年前と同様の感染症によつて、外に出られない、人にも会えないという逼塞した日々が続いていて、収束の見通しもありません。でも人間は昔から、自らの力ではどうしようもないことを、あるときは神と恐れ、あるときはたかに神をも出し抜いて、なんとか命脈をつないできたのではないのでしょうか。

大陸からの乾いた風が、鳥海山の頂わだかまきに蟠わだかまつたひとひらの雲を吹き流しています。この無窮

の空の下、澄明な空気と清浄な水さえあれば、怖いものはないような気がします。それはもしかしたら、どこにいても視界から外れることのない鳥海山が、命あるものすべてをいつくしみ、守つていてくれると信じられるからなのかもしれません。

# 入選 「雪ん子」ノート

横手市 鈴木利良

秋田、横手盆地。十二月上旬。まだ積雪はない。六十六歳の冬だ。

西の低いなだらかな稜線が、暗い灰色に塗りつぶされていく。冬空と山並みを侵食しているのは、薄墨などではない。わずかの白に、ぶりぶり絞りだした黒の絵の具を、力任せに混ぜた代物だ。見る見る内に、西の大地に真っ黒い帳が下りた。それが夕暮れの濃紺をむさぼりながら、ずんずんとこちらに覆いかぶさってくる。まもなく、凍てつく激しい風が、雪を引き連れて襲来する。

私の家は田中の一軒家。十二戸の集落を串刺す市道から、北に折れて約二百坪。アスファルトの一本道が、農作業小屋に招く。三十坪の古い小屋だ。外壁は、私ごとび色に塗った波トタン。隣が母屋で、築七十年超の入母屋造り。図体の大きいあばら家だ。

鉛色の空はいよいよ黒をまとい、凄味を増してきた。私は小屋の入口の軒下に身をすくめ、

じつと道路の奥に目を凝らしている。

こんな日には、きつとあいつが来る。厚手の黒マントを翻して、大男が大腿でやって来る。ぼさぼさの髪と黒髭に埋もれた赤ら顔。ぎょうり目。にんにく臭がきつい酒息。右手に鉋をかざし、左手に大きな麻袋を引きずっている。私をさらいに来るのだ。それが誰なのか知らない。毎年、雪を迎える頃に、同じ不安に襲われる。

ついに、猛烈な吹雪の直撃を受けた。乾いた細かい雪が、道路に鋭角に切り込んでくる。吹きすすぶ雪が、冷えたアスファルトの上を波立って走る。ゴーゴー、ビュンビュン、寒風がうなる。道端の枯草が渦巻く。粉雪が煙る。

やがて、荒れ狂った吹雪は止んだ。幸いあいつは来なかった。いつも全くの思い過ごしだと分かっている。だが、この歳になっても、怖いものは怖い。雪が訪れるこの季節、日暮れ時は恐ろしい。

私は現役の米農家である。年季の入ったトラクターで田を起こし、中古品のコンバインで稲を刈る。真ん丸い顔で、残念ながら頭髮はない。でも、膚つやはすこぶる良い。だから、あだなが、つまようじを刺すとつるりんとむける

「玉羊かん」。妻の命名だ。

その同い年の妻と二人暮らしだ。私がお返しに付けたあだ名は、「マトリョーシカ婆さん」。あのロシア人形に体型が似てきた。口うるさい婆さんが次々と出てくるのも同じだ。もちろん面と向かつては呼ばない。息子は首都圏で所帯を持っている。

小説家もどき

自称「小説家もどき」。ちょっと始末に悪い部類に入る。若い時分に書いた小説が、宝くじの当選より高い確率で活字になった。その過去の栄光が忘れられず、未だにペンを握っている。

毎年、種籾を播きながら、作品の構想を練る。草刈機を横目に、畦に座ったまま浮かんだ文言をメモに取る。原稿用紙に向うのは、刈取りが終わってからだ。完成したら熟成させる。応募する文学賞の締め切りの真際に校正・清書して、ポストに入れる。

ずっと農村の人々の生き様を書いてきた。揺れ動く現代の農業・農村をベースにしている。

昨年は、左前の農産物直売所をスーパーに移

すか否かを、二人の女性役員の確執で描いた。自分らで再建するか、商業資本の下で生き残るかの選択を迫った。その前年は、自作の野立て看板でプロポーズした、内気な農業青年を書いた。恋心を炸裂させた一念発起の結末だった。どちらも入賞を確信した傑作であった。

しかし、両方ともボツ。ここ何年来、応募原稿はとんと帰って来ない。梨のつぶてだ。誰かの慰めが聞こえてくる。その努力は無駄ではなく、やがて血や肉になるのだと。だが、そんな物をこの老骨はもはや受け付けない。ひなびてしまつて、接着力がないのだ。

人の評価を求めず、自分の世界を描くことが大切だ。その時々々の感動を書き上げればいい。そう自分をなだめてきた。しかし、もう私も若くない。高血圧の薬を飲み始めて久しい。脳血管を患う家系だ。ペンを失う日がいづつ来てもおかしくない。

応募原稿がボツになる度に、集中力が奪われてしまう。手鍋に残っていた活力源の粥がどんどん減っていく。慌てて米を足して味噌を溶く。だが、前の量までには至らない。黒い鍋底が見えてくるのも時間の問題だ。

だが、焦りは禁物だ。むしろ、集中力が消え

ていくのは、歓迎すべきことかもしれない。長年巣食ってきた「小説家もどき」のやるせないモヤモヤ感。それを老いの忘却が吸い取ってくれるならありがたい。もはや気張って書き続ける歳でもあるまい。

そうだ。この冬、中世の文人みたいに隠遁しよう。人里離れた山寺や草庵でなくていい。この豪雪の村、このぼろ家で充分だ。そして、気楽にちまちまと書いて、終局を迎えよう。まだ、それくらいの余力は残っている。あんまり気負わず、身近にあるちっぽけな感動を、掃き溜めてみるのだ。

おせちの黒豆が丸々と稔った。今年は、しわがないツルツル、テカテカに仕上げる秘策がある。

ピンクの小さなスコップを買った。孫娘が今年の正月には来られないというのに。一緒に大きな雪だるまを作りたかった。

そんなたわいもない事をとめどなく書いていく。書き溜めるノートを「雪ん子」にする。

「雪ん子」はこの辺りの雪の妖精たちだ。牡丹雪に乗って空からやってくる。雪国の人々を励まし、いやし、元気づけて、厳冬の寒さと暗さを乗り越えさせてくれる。そして、雪解けの陽

炎に乗って天に帰るといふ。

幼い頃、私は家の北のガラス窓から見た。藁ボッチを被ったりんごみたいな妖精たちが、大勢集まっていた。月影が凍る雪原に整列して、冬の歌を楽しげに合唱していた。渡り雪が輝く晩には、輪になって陽気にフォークダンスをしていた。

この種の妖精は、昔から大人には見えないお約束になっている。でも、ひたすら書き続ければ、きっと見えてくる。一緒に遊べるはずだ。共に歌う曲は、ヘオリオン舞い立ち／スバルはさざめく／の『冬の星座』がいい。『オクラホマミキサー』まだ踊れるかな？

#### 大判焼き

根雪五十<sup>センチ</sup>の年の瀬。「大判焼き」を食べた。

冬場の定番の和菓子だ。卵を溶いた小麦粉の生地で小豆あんを包み、金属の型で焼く。直径八<sup>センチ</sup>、厚さ四<sup>センチ</sup>の平たい円盤形で、名前のとおりでかい。雪の日が続くと、無性に食べたくなる。焼き上がった香ばしさ。しっとりとした温かい厚皮。びっしりと詰まった粒あんがたまた

ない。口に広がる至福感は、なぜか懐かしい。

あんまり甘くないのが好き。猫も杓子もそう言う。だが、小豆あんはどっしりと重量感のある甘味がなければ、意味がない。

ここ秋田県南の食文化は、甘さが特徴だ。赤飯はこつてりと甘いし、巻き寿司、茶碗蒸し、ポテトサラダ、漬物の果てまで、大量の砂糖を投入する。幼い頃、朝食の納豆にも砂糖をかけた。

なぜ、雪深いこの地に甘い食文化が根付いたのだろうか？ もっともらしいのが、「甘味ごちそう説」である。

その昔、農村では砂糖は特別で、贅沢なものであった。村の節目の行事食や祝いの膳でしか、口にできなかった。それで、甘さイコールごちそうとなり、何の料理にも砂糖を入れるようになったのだそうだ。

そんなしみつたれた説は心に響かない。むしろ、貧しかった先祖が蔑まされている気がして、こちらから願ひ下げだ。

雪国と甘味の相関性を考える時、「寒締めホウレンソウ」や「雪下にんじん」を思う。当地でも、寒気や積雪にさらして、糖度の高い冬野菜に作り上げている。野菜たちは凍らないよう

に、体内に糖分を増やして寒さをしのぐのだ。

つまりは、雪国の生き物たちは、糖分で体を守って、越冬するように進化してきたのだ。人も例外ではない。糖質を多めに摂って脂肪で蓄え、冬を乗り切ってきたのだ。

しかしながら、確証は全くない。たぶん間違いであろう。だが、この自説は結構気に入っている。「甘味ごちそう説」より、こちらの方がずっと科学的だ。まさしく雪国にふさわしい説なのだ。

調子に乗ってがつがつと「大判焼き」を二個も食べてしまった。これで、私も今年の冬を乗り越えられる。だが、きつとこの後、ひどい胸焼けに襲われるに違いない。

#### 農協理事選挙

まさに青天の霹靂。この私がM農協の理事（役員）選挙に立候補することになった。本家の隆太郎さんと、高齢で引退する隣村の現理事が話を持ってきた。私が若い頃に農協青年部に入っていて、部長もやったのが決め手だったらしい。農協青年部は農協の協力組織で、農家の若者達の集りだ。

こりゃ、隠遁どころじゃない。悠長にものを書いてなんかいられない。生涯一百姓。名もなしい一握りの土塊で終わって本望。ええ格好しいの大嘘つき。簡単にべろりと名誉欲にたらしこまれてしまった。浅ましい限りだ。

『農家の生産と販売の力を高め、豊かな暮らしを築く』

この理念を農協は掲げる。農家が出資する相互扶助の団体だ。法による設立が昭和二十二年だから、古希を超えた老体である。米の集荷や金融を中心に、ずっと農村に根を張ってきた組織だ。

私が組合員になっているのはM農協である。二十年前に近隣の十一農協が合併してきた。組合員は一万七千人を超える。運営には三十二人の理事が当たる。理事は組合員の立候補制で、組合員の代表の総代が投票する。選挙は合併前の旧農協単位の小選挙区制だ。

先日、農協から春ひよこの予約注文書が回覧されてきた。今時、申込みなどあるまい。庭先の養鶏を見なくなって久しい。おそらく産足の時代から、漫然と受注業務を続けてきたのだろう。この牧歌的で惰性的な組織が、タブレットを活用して会議のペーパーレス化を図っている

という。不思議な団体だ。

俺は農協の理事だと、肩で風を切っていたのは大昔のことだ。農協理事になるのは村では出世だった。野心家には登竜門で、やがて市や県議会議員になる踏み台となった。また、地域の権力者たちの棲み分けの役職でもあった。お前は農協理事、俺は市議会議員、あいつは某の役員といった具合だ。

理事のなり手がいない。もともと、農業だけで飯を食っている人が少ないのだ。選挙への関心は低く、他の小選挙区はほとんどが無競争だ。私のところも、過去二回、無風の改選であった。前回、ぼつと出の若者と農協を否定する変わり者が、手を挙げた。それぞれわずかの田んぼを持っている組合員だったから、立候補の資格はあった。しかし、地域内で、論ざれり、丸め込まれたりして消えてしまった。

一人はUターンしたばかりの青年で、ともかく目立ちたい一心だった。若さを売り文句にして、役職ほしさに目をきらきらさせていた。地場産の農産物をインターネットで都会に売り込むと、ありふれたことをまくし立てていた。理屈は達者でも足が地についておらず、ただ騒ぎまくっている様子だった。

反農協の旗を掲げる老いた農機具屋も、理事選に色気を出していた。農協は長年の商売仇だ。協同精神をかざす農協は、農家個々の創意と活力を奪っていると、偏屈な持論をぶち上げていた。堂々と農協の解体を掲げて、選挙に立つとうとしていた。

結局、二人ともただ一つの立候補条件である、自分の集落の推薦をもらえなかった。地域の自浄作用はまだ働いているのだ。どこの農村でも、若年であれ政治信条であれ、極端を嫌う。だから、私のような者にお鉢が回ってきたのだと思っている。ただ糞真面目で、無味、無害な農家の親父だからである。

#### ノビエ男

私の選挙区では、七名の理事を九十六名の総代で選ぶ。立候補者は八名。ひとりだけ落選する。当落線上にいるのが新人の三人だと、もっぱらの噂だ。私と農協職員OBと女性農家である。

元農協職員は佐山敬一という巨漢だ。大きな平べったい丸顔で、二重顎。年に似合わぬ豊かな黒髪をオールバックになでている。昨年に地

元の支店長で定年退職した。知名度は抜群だし、当然、農協の経営にも明るいと評判だ。でも、柔らかな物腰がどうもうさん臭い。ていねいな言葉使いと一重まぶたの鋭い眼光が同居している。苦手なタイプだ。

理事に職員OBが多すぎる。理事会の五分の一にもなっている。

「あいつらは、理事会を天下り先にしてしまったな」

「現役の時やばいものを隠すために居座るようで、気色悪いな」

「長年の使用者から経営者への逆転は、最高の快感だろう」

手加減なしの皮肉も聞こえてくる。

M農協には大小八つの支店がある。それぞれの店舗で、銀行とホームセンターのような業務を行っている。地区内の米倉庫や野菜集出荷所などの施設管理も掌握する。支店長がトップで、三十から五十名の職員がいる。現場を仕切る支店長は、農協では上級管理職である。

彼については、あまりいい話が聞こえてこない。

支店の店舗で販売していた地元野菜に、青虫が付いていたクレームがこじれていた。佐山支

店長の初期対応がまずかった。

「青虫が食べるくらい新鮮で安全な白菜ですよ」

「本当にこの青虫がついていたのかな？ 虫の住所、氏名は？」

からかい半分の不ざけた弁明に、クレームをつけた主婦は激怒した。支店長の謝罪と嚴重な処分を求めた。

しかし、数日後、クレームは簡単に取り下げられた。彼女は夫から、きつく幕引きを言い渡されたそうである。夫は会社で上司に、妻の青虫のクレームは営業に迷惑だと、撤回の命令を受けたのだ。主婦の夫の会社が農協の取引先であることを突き止め、裏から手を回したのが誰かは、容易に察しがつく。

また、支店の米倉庫の屋根補修工事をした時の話である。支店長として監督の立場にあるのに、同じ工務店に自宅の外壁のリフォームを発注した。すぐに、値引きの便宜を図ってもらつつもりだと噂が立った。だが、そんな周りの疑いを尻目に、平然と改装を完成させてしまった。自分によましいことはない、潔白を証明したようにも見えた。堂々と季下に冠を正したのである。真相は闇の中に葬られた。

彼の性格はノビエに似ている。田んぼの雑草だ。姿形は稲にそっくりだ。小さい頃は稲の陰に潜んで、人に抜き取られないように隠れている。だが、稲が穂を出すと、ぐんぐん草丈を伸ばして、稲の穂波の上に顔を出す。そして、太陽を独り占めできる空間で、清々と穂を出して稔る。

ずるい。ただ、合理的というか、洗練されたずるさである。化かす狸のたんすには、ひきだしが多い。

「これがずる賢いということだ」  
ノビエ男の高笑いが聞こえてくる。

フラスコ婆さん

立候補した女性は村瀬恵子だ。真珠のピアスをした茶髪の婆さんだ。もう還暦を過ぎている。現役の農協女性部の役員だ。農協女性部は農協の協力組織で、農家の女性達の自主的な集まりだ。

大きな米農家の婿取り娘である。アスパラガスや枝豆も作っている。時たま農協の直売所で見かける。顔見知りで挨拶はするが、親しく話をしたことはない。

長身で細い背中がずっと伸びているが、尻回りがでんと異様に大きい。体型が理科の実験器具に似ている。丸底フラスコ。小顔で、グリーンアイシャドウに映える薄い眉と大きな目が、やや中央に寄っている。ていねいに化粧をしているが、目尻のしわとほうれい線の深さは隠せない。

M農協の女性部の部員は三千人を超え、各支店に支部を置く。彼女は一番大きな当支部の副部長を務める。女性部は農協の発足とともに、農家の暮らしを守る活動をしてきた。そして、今の最大の活動はこれだ。

「農協に女性の声を反映させるために、女性理事を送り出そう」

彼女には女性総代の堅い八票がある。さらに、総代の奥さん方は、ほとんどが女性部員だ。

「お父さん、誰に入れるか分っているよね。村瀬恵子さんよ。言う事を聞かないと、老後の面倒なんかみてやらないよ」

そのきつい一言が、集票に有効な決め手になるはずである。

フラスコ婆さんとは若い頃、一度激しく対立したことがある。合併前の「農協秋祭り」は、

青年部と女性部で実行委員会を作っていた。私は青年部長だった。彼女は女性部の代表で来ていた。

メインの催し物で対立した。女性部は恒例になっている部員の芸能発表会を当然のように推した。私達青年部は、江戸のお笑いを皆に届けようと、新たに「出前寄席」の誘致を提案した。

女性部の猛烈な反対を受けた。農作業を終え、夕飯をかみかみ集まって練習したのに、発表の場を奪うとは何事だと、すごい剣幕だった。青年部も負けていない。毎年同じような歌や踊りは飽きられているから、マンネリ化を打破する必要があると訴えた。

女性部との協議は難しい。青年部員が応戦に熱くなって、ひよいと感情的な失言をしてしまう。女のくせに、女だてらになどと女性蔑視の匂いを、彼女らが嗅ぐと大変なことになる。同世代にはむろん、親や息子の年代にも容赦しない。猛然と攻撃し、決して、安易な妥協はしない。

結局、その時も女性部の賛同はもらえず、青年部の単独開催となった。

「江戸のお笑いなんて、ちゃんちゃらおかしい

わ。秋祭りの予算じゃ、二流はおろか三流だつて呼べないよ」

「お昼の接待なんかやらないよ。せいぜい美味しいおにぎりでも自分たちで握りなさい」

それが彼女の捨て台詞だった。嫌味たっぷりのかん高い声だった。

「出前寄席」は彼女の予言どおり、散々な結果に終わった。会場に大群で押し寄せたのは、閑古鳥という名前の鳥。私達農協青年部は、その冷やかな鳴き声を黙って聞くしかなかった。

毒まんじゅう

誠に唐突だが、これから選挙の買収に行くところだ。居間のテーブルに投げ出している黒のセカンドバック。現金を詰めた茶封筒を三通忍ばせている。

農協の選挙は公選法の適用外である。違反がみつかったても、罰せられない。それでも、金で票を買うのは、胸を張れることではない。

私の立候補の公約は、付け焼刃だ。でも、誰にも負けない自信がある。少なくとも、定年後の暇つぶしの旦那さんや、女性参画のお飾り婆さんよりは、生の声を農協に届けられる。だ

が、この選挙は、然るべき論戦などない低次元で行われている。

さて、票読みの方だ。単純平均による当確は十四票だ。私は十五票を確保したと思っっている。参謀役の本家の隆太郎さんと、引退する隣の理事が、大半を固めてくれた。

彼らが紹介してくれた十一名には、菓子折りを手土産に挨拶に行ってきた。皆、地元の小学校区内の総代で、顔見知りも多い。これに長年の飲み友達と同級生が三名。激励の酒席を設けてくれた。更には、妹の夫も総代に名を連ねていた。

ただ、手土産を配った総代たちが、地元という括りで確実に投票してくれるとは限らない。義弟のように、他の候補の親類縁者がいるだろうし、地元代表の意識で選ばない人もいるはずだ。必ずしも固い票ではない。

たぶん大丈夫だと思っている人が、あと三名いる。でも、確信がない。背に腹は替えられない。悩んだ末、彼らに現金を渡して、完全な味方になってもらうことにした。本来なら敵の堅い票を転ばしにかかるのだろうが、算段がつかない。守りを固めるのだ。

私が青年部をやっていた頃は、地域のボスタ

ちが理事になって、農協を牛耳っていた。皆、金をばら撒いて買った理事の肩書をかざして、名誉欲を満たしていた。己の人徳のなさを肩書で隠す。最も稚拙なやり方だった。

ただ威張り返るための役職だった。当時、米の生産調整が強化されても、彼らは形だけ反対を一言叫んで終わりだった。この地の米作りを拓くビジョンを示す理事など、一人もいなかった。当たり前だ。金で買った虚栄には、そんな力はない。

私もあの連中と同類項だ。あれから何年たった？ 三十年以上だ。三分の一世紀だ。進歩がない。何も変わっていない。悪しき習慣はそのままだ。悲しいな。私もあんな俗物に成り果ててしまった。

現金は農協の金融窓口で虎の子の定期貯金を崩してきた。ものすごい後ろめたさがあった。解約伝票を渡した若い女性職員はじめ、店舗の皆に、使い道を見透かされている気分だった。小さく身を縮めていた。自分の金をどう使おうと勝手だろう、と大声で叫びたくなる衝動を懸命に押さえていた。

いわゆる「毒まんじゅう」の配達だ。自分でまるめて蒸かした饅頭だけに、一段と気がとが

める。ただ、その分、実効性はすこぶる高い。「毒まんじゅう」を他人に届けてもらいうりスクは大きい。先食いやつまみ食いの話はよく聞く。

今さらなのだが、不道德な選挙をしていると、後ろ指を指されたくない。秘密裡に済ませたい。名声も名誉もないが、正直に生きてきた自分を惜しむ。格好よく言えば、清濁併せのむ大物新人。いや、いや、落選を恐れるただの小心者なのである。いっそのこと、この潔癖そうな紳士面をぬぐえば、楽になると思う。

#### 猿爺

早朝、白鳥の北帰行を見送った。大編隊だった。二十三羽までしか数えられなかった。おそらく最終便なのだろう。

午前中、種籾の小分け作業をしていると、農協の野田専務理事から電話があった。至急に話したいことがあるから、支店まで来て欲しいというのだ。

専務理事は理事会で互選される執行役員で、組合長、副組合長に次ぐポストである。彼は私より一回り上の年代だ。私が青年部長の時はず

でに理事だった。合併前の農協の組合長だ。合併後もトップになると思っていたが、好々爺の調整役に回っている。

支店の二階会議室。二百人収容の大ホールだ。廊下側に三つの押し扉。南側に続く窓のブラインドは、全て開け放っている。早春の明るい光が一杯に差し込んでいく。

がらんとした室内の正面に「共存共栄」の扁額。その下に、会議用の長机四脚とパイプ椅子が口の字に組まれている。上座に野田専務。窓側に、ダークグレーの背広のノビエ男。左手に、藤色のワンピースに杏色のカーデガンを羽織ったフラスコ婆さん。そして、入り口側に紺のつなぎ服の私。

「それでだ。今回、選挙に出ている八名の内、私を含めた現役五名の理事が昨日集まった。皆で色々と情勢を分析したが、いずれ落ちるのはあなた方三人の内だということになった。長年、理事選挙をうってきた面々だ。大きな間違いはないだろう。一番分が悪いのが誰かは言わないでおこう」

野田専務が三人を見回した。私とも目が合った。にらみ返した。彼がちょっと小声になった。

「それでだ。どうだろう。三人の内、誰か一人が降りて、無競争にしてはどうだろう。いずれ、降りた人には応分のお礼はする。昨日の連中からも了解を得ている。経費はかかるが、選挙運動で駆けずり回らなくても済む。全員賛成だった」

「面長の乾びた老人だ。焦げ茶のダブルのスーツに、濃紺の無地のネクタイを締めている。外に開いた大きな福耳。随分と後退した剃り込みと薄毛。大きな両目をぐりぐりさせ、低い鼻の下に、こんもりとした口元。俗にいう猿顔だ。」

「久しぶりに会ったが、人相が悪くなった気がする。肌がごわつき、目がやけに窪んで見えた。口の周りのしわも増えたようだ。顔の造作がくしゃっと縮んでしまった感じである。」

「老いたボス猿だ。古狸の理事たちの親分、猿爺だ。」

「二人は無競争で当選できるのだ。よく考えて欲しい。ただし、二人からも割当て分は出してもらおうよ」

「出してもいいですよ」

「ノビエ男の返答は早かった。」

「私も出します」

「フラスコ婆さんもすぐに続いた。」

ノビエ男が上目使いに私を見た。媚びているようで、実は高慢な視線だった。

「専務が幹旋する外に、私たちは単独で上積してもいい。村瀬さんには私が話をつける。今回は私たちに譲ってもらえませんか。なんとか頼みますよ」

「お前ら、全員、ぐるなんだ。いくら鈍感な私にも分かる。三人ともすでに気脈を通じて、打ち合わせができています。この集まりは、私を立候補から引きずり降ろす場なのだ。」

「ここでやめれば半端でない金が入るぞ。金をもらって降板した噂などすぐに消えるさ。こんなぼろい儲け話ないよ。そんなメッセージが、各々の副音声でがんがん送られてくる。」

「たぶんこの中で一番金がないのは私だろう。貧すれば鈍するか。貧乏人は皆が愚か者か。人の意思を簡単に金で動かせると思っているのか。私も随分と見くびられたものだ。」

「私は金で転ばないよ。と言って、二人を金で転ばそうとも思わない。第一、私にはそんな金なんかもないよ」

「あっけらかんと私は答えた。そして、わざと口元に不敵な笑いを浮かべて、三人を順ににらみつけた。ノビエ男とフラスコ婆さんはすぐに

目を伏せた。猿爺は大きいため息をついて、天井を仰いだ。

「前日、「毒まんじゅう」を配った男の言葉とは思えない正論だった。ぶれているのが真つ当な方向のはずなので、ちよっぴり安心もした。」

「長い沈黙が続いた。窓辺から春の光が会議室に降り注ぐ。とろとろと穏やかに、正午に近い時間が流れていく。」

「どうも降りる人はいないようだな。仕方ないな。どうだろう。恨みっこなして、ジャンケンで決めたらどうだ。三分の二の確率で勝てる。どっちみち、三分の一の確率で落選するのだからな」

「猿爺からの新たな提案だった。ノビエ男もフラスコ婆さんもきょんとしている。事前の打ち合わせにはない展開になったらしい。」

「それもいいなと、一瞬、思った。ジャンケンに勝てば、農協理事の肩書と毎月の報酬が得られる。負けても結構な金額が手に入る。夫婦で豪華な温泉旅行を楽しんでも、ゆっくりお釣りがくる。」

「だが、それをやれるしたたかさが、私にはない。あつたらもう少し楽に生きてこられたと思う。やはり、根性なしのわか「毒まんじゅう」

う」屋だ。

人が壁に当たった時、三つの対処法があるという。まずは、壊すこと。次に乗り越えるのだ。そうだ。第三の、迂回して壁をやり過ぐす術を、私はよく知らない。その代り、逃げるという選択肢を常備している。

私は黙って席を立ち、会議室の押し扉に向かって歩き出した。背後で複数のため息がしたようだった。猿爺がほえた。

「おい、怖気づいたか。この野郎。俺達の読みでは、お前が新人の中で一番危ないんだよ。せいぜい頑張ることだな」

どすのきいた饞別を、背中に頂いた。私は振り返りたかった。猿爺に舌を出してあかんべをしてやりたかった。いや、やはり、こんな時は早く逃げるに限る。

### 頑張れご飯

今朝、流しに立っていた妻が、起き掛けの私に笑顔で言った。

「夜明け前に起きて、包丁を三本も砥いだ。鬼婆も真っ青よ」

汗で毛先が濡れている前髪を掻き上げた。白

い割烹着の姿だった。

今日は農協の理事選挙の日だ。抱負発表会の後で、投票・開票である。天気はよさそうだ。朝九時、私は会場の農協支店に向かう。

朝の食卓には、妻の手作りの勝負飯が並んだ。

「巻き寿司は、我が家の頑張れご飯よ。子供の運動会には必ず作ったし、高校受験の弁当にも入れたわ」

甘い太巻きだ。酢飯の芯の具材は、ずっと変わらない四種類。卵焼き、茹でたホウレンソウ、甘辛く煮たカンピョウ、桜でんぶ。黄、

緑、茶、ピンクの四色が、酢飯の白に映える。暁から砥いだ包丁だけに、さすがに鮮やかな切り口だ。異なった四種類の甘味が、白い大空に大輪の花火を開く。

二人で巻き寿司を頬張っていて、去年の夏のシーソーを思い出した。一緒の買い物帰りに、城山公園の夕焼けを見たいと、妻が言い出した。東山の山裾の高台にある、出城跡だ。

何年かぶりに森の中の公園に来た。きれいに草が刈られた広場が、西に開けている。村々が浮かぶ青田の海が見渡せる。彼方に大きな夕陽が傾いている。二両編成の小さな電車がコトコ

トと横切っていった。

夕焼けが始まった。人もまばらな茜色の森の公園。私たちはブランコの脇のベンチに腰を掛けていた。

突然、妻が、一緒にあれに乗ろうと、私を誘った。

「あれ、あれよ。ギッタンバッコンよ」  
「ギッタンバッコン？ あれはギッタンバッタンだ」

「違います。昔からギッタンバッコンよ」  
「いや、ギッタンバッタンだ」

妻の実家は川向うの町。それでも、幼い頃の言葉が微妙に違う。シーソーもその一つなのだ。思えば、妻は生まれ育った年月の倍近くを、私と過ごしたことになる。ギッタンバッコンよりはるかに多く、ギッタンバッタンを暮らしてきた。

〈ギッタンバッコン、ギッタンバッタン〉

暮れゆく森の香りに包まれている。ヒグラシの共鳴が響く。妻はキャッキヤ歓声を上げて楽しそうだ。数回やると、すぐコツをつかめた。上がる時は、小さく膝を曲げて、自らもひよつと土を蹴って跳ぶ。妻を上げる時には、膝にくつと力を入れて、地面を踏ん張る。

（ギッタンバツタン、ギッタンバツコン）

軽やかな上下運動は、遠い日に切った風の感触を届けてくれる。少し汗ばんできた。なんか息も荒くなってきた気がする。森の広場では、ゆったりと夕映えが深まっていく。

頑張れご飯には、「ひろっこ（アサツキの若芽）の酢味噌和え」が添えてあった。早春の定番の小鉢だ。根雪の下の地で萌えた黄白色の新芽だ。シャキシャキした食感で、葱類特有の辛さと甘みがある。春の息吹を味わった。厳寒の土中でたくましく芽吹いた、野菜の生命力も頂いた。

いざ、出陣である。

### 『サピエンス全史』

冴え返る日。遅まきながら、世界的ベストセラーになった『サピエンス全史』を読んだ。正確には、あらすじ本の漫画版を読んだ。単行本は上下巻五百ページ超。その活字を読破する集中力は、もう私にはない。漫画と要約のコラムがちょうどいい。

人間が穀物を栽培してきたのではない。穀物が人間に栽培させてきたのだ。著者の歴史学者

はそう言い放つ。常識とは全く逆の視点だ。麦や米が、人間を善良な奉仕者に仕立てたと言うのか。それが農家だということか。

生物にとって、種の継続が第一義だ。たとえば、虫媒花は受粉するために、花に蝶や蜂を呼ぶ。稲は人間を利用して、ある意味、酷使して、種を継続させている。農家は暖かくなれば種籾を播いてくれるし、水を張り、肥料や農薬を与えてくれる。競合する雑草も黙って取り除く。まさに負んぶに抱っこだ。稔りの大半を提供しても、種としての存続は保障される。稲は完全に人間を手なずけている。それが自然の摂理だという。

確かに、稲に使われているという実感はある。田植えや稲刈りの時期には、少しばかり体調が悪くても田んぼに出る。作業道具の農業機械が壊れれば、借金をしてまで買い替える。それらが、どれだけ農家を苦しめてきたか、計り知れない。

しかし、これを読んで、すごく気持ちが悪くなった。稲を育てることに躍起になっている自分がおかしかった。あれこれ気忙しく働いているのが、滑稽に思えた。

種籾を播けば、まず一斉の発芽が気にかか

る。田植えが済めば、水は大丈夫か、肥料はあるか、病気にかかっていないかと、あれこれと心配する。大風や豪雨を恐れ、日照りを憂い、ひたすら豊作を祈る。すべて稲のためだ。自分の生活のためというのは、二次的なことになってしまう。

稲を植えてあくせく働くのも、自然界の摂理。生きとし生けるものの久遠の大河に、自分も流れている。大自然と共に悠久の時間を生きている。なぜか嬉しくもあった。

巡りくる春。また今年も、稲の忠実な奉仕者として働かされてもらうか。一つ悟った感じで、ちよつと乙な農家になった気分だ。

\*

秋田、横手盆地。四月下旬。桜花が満開。六十七歳の春だ。

薄曇り。東山の稜線が緩やかに北に上る。

御嶽山 七五一㍎

黒森山 七六三㍎

真昼岳 一〇五九㍎

谷間にかすかに残雪。裸木で覆われる灰色の山肌が、ふつくと盛り上がってきた。薄い赤

紫色がほんのりと溶け混んで見える。芽立ちの始まりである。季節の移ろいは、急速に進んでいる。

里は春の昼下がりに。まったりとした時間の流れが横たわる。そのとろみが周りの全ての音を吸い取ってしまったている。田起こしのトラクターのエンジン音。気ぜわしい春風。野鳥のさえずり。みんな遠くに退き、消えてしまった。私は充電式噴霧器を背負って、水田の畔に除草剤を撒いている。「スーン」とかすかな電動音だけが聞こえている。無言の春と農薬を撒く私。

レイチェル・カーソン女史が『沈黙の春』を著したのは、一九六二年。半世紀以上も前のことだ。農薬などの化学物質の危険性を、近未来の鳥の鳴かない春になぞって訴えた。日本でも『生と死の妙薬』の題で発刊され、環境保護運動のバイブルとなった。

私は農薬批判派ではない。むしろ農薬の礼讃者に近い。農薬の農業への貢献度は、極めて高い。殺菌・殺虫剤が病害虫防除で増収をもたらした。そして、除草剤は草取りに費やす労力を激減させてくれた。今、米の十竹当りの除草作業時間は、一時間そこそこなはずだ。田面を這

い回った手取り除草。手押し除草機の往復作業。それらの重労働から農家を解放してくれた。

実はこの畦への除草剤散布は、今年が初めてだ。昨年までは草刈機を背負って、年三回、畦草を刈っていた。だが、草刈機が重くなってしまった。噴霧器も最初は十畝の薬剤を背負うが、短時間で終了する。何よりも、背中の重さが徐々に減っていくのが快い。

それにつけても、心が重い仕事だ。散布しているのは非選択性の接触型薬剤。葉がかかっただけ濡れた植物は、数日後には根こそぎ枯れていく。雑草とはいえ、冬を懸命に乗り越えてきた命を奪うのだ。まさしく、私は「野の死刑執行人」だ。それでは少しきついたので、「色盗人」くらいで許してほしい。

萌え出た若草の黄緑、セイヨウタンポポやイヌガラシの黄色、タネツケバナやハコベの白、ムラサキサギゴケの紫も、オオイヌノフグリの瑠璃色も。全てを枯葉色に変えてしまう。

ああ、私は何をやっているのだろうと、溜め息をつき、高曇りの空を仰ぐ。

春たけなわ。沈黙の中で、「色盗人」じいさんが黙々と農薬を撒いている。老人が突然に思

う。今日、朝食後の薬を飲んだかなと。高血圧と痛風の薬、四種類五錠だ。……忘れた。

追伸

農協理事選挙のことなら、とつくに終わっている。枯木に登って灰を撒いたじいさんは、花を咲かせられなかった。

撒き方が雑だったのか。灰がまがい物だったのか。そもそも、枯木は花を着ける気があったのか。まあ、世の中、こんなもんだ。そんなにうまくはいかない。

## グリーン賞 星のない夜空

仙北市 蜜 木 きいち

ごった返す市民会館の中で幹太を見つけたとき、無意識に胸が高鳴っていた。開け放した両開きのガラス戸から、青々とした風が爽やかに吹き込む。八月も半ば、式典会場の周りは水田が広がっていた。

少しためらってから、旧友と語らう彼にそっと近づいた。慣れないヒールは歩きにくくてふくらはぎが痛くなる。

「幹太……久しぶり」

「おお、久しぶり」

振り向いた彼を間近に見て、あ、とこぼしうになつて慌てて飲み込んだ。年を重ねて少し肥えた彼の額は、汗で少しかつていた。紺のスラックスとワイシャツに学生服の面影を重ね、今の彼の風貌に苦笑する。会わない間に垢抜けたとはとても言い難い。その場にいた同級生が、様子を察して後ろへ一歩下がった。

「おじさんになったねえ」

うるさいな、と笑う幹太の目元だけが昔と変

わらなかつた。肥えて丸くなった輪郭や、つやを失った皮膚の中で、それは余計に際立って見えた。

「元氣だった？」

「ん、まあね」

開いた年月の分だけたどたどしいやりとりの中で、懐かしさを噛みしめる。何年ぶりだろう、最後は中学の卒業式だったろうか。成人式の日程を聞いたときから、幹太のことを考えていた。嘘だ。五年間ずっと幹太が頭の隅にいた。

もう一度何か言おうとした時、背後から名前を呼ばれた。ドレスを着こなす綺麗な女性の手を振っていた。一瞬分からなかつたが、顔を見たらすぐに彩だと気づいた。

「え、彩？ すごい久しぶりだね」

「んだからー！ 後ろ姿ですぐわかつたよ。元氣してた？」

「まあまあかな。あ、髪染めたんだね。似合ってる」

「あー、うん、染めてる！ ありがと。杏は変わんないねえ」

彩は私のセットした髪をぐしゃぐしゃと撫でて笑った。私は、えーそうかなあ、と首をかし

げて笑う。幹太はいつの間にかその場を離れていた。

「杏は秋大生だっけ。まだ地元にいるの？」

「ううん、向こうにアパート借りて一人暮らし。彩は仙台だよ。どう？」

「もう超楽しいよ。課題多いのが嫌なんけど！」

そう言つて彩は整えられた眉毛をハの字に曲げた。話しながら、私は無意識に幹太を探していた。結局幹太は見つからず、ジャケットを着た男性が拡声器で大会場への移動を促した。

式は厳かに始まり、私と彩は幹太の後頭部が見える位置に座っていた。彩は反対隣の別のクラスの子と小声で何か話していた。私も長い話に段々飽きていたが、生徒会長の代表挨拶には耳が反応した。今は東京で働いています、いずれ故郷である、ここ、秋田の地に戻るつもりです。夏だというのに立派な袴を着た彼は、丸刈りだった髪を伸ばし、別人のようだった。本当にそう思っているかなあ、と彼の顔を見つめる。関東の大学に入った兄は卒業後も帰ってこなかつた。ここに残るのは、私のような変化のない人間だけ。地元国立大に入り、卒業したら実家から通える職場を選ぶのである

う、真面目で味気のない人生。

でも、今日という日が、私にチャンスを与えた。今までの全部がチャラになるくらい、幸せの清算をするための。

同窓会は古い宴会場の座敷で行われた。幹太がくるかはわからなかったが、私の後のシャトルバスで来ていたようで安心した。参加者は式の半分ほどには減っていたと思う。彩は仲の良い人だけで集まる、と式の後すぐ帰っていた。

乾杯と同卓への挨拶を終えて、周りが席を立ち始める。その流れに紛れて、私もさりげなく幹太の席に向かった。

「何飲んでるの？」

「いや、ビールに決まってるだろ。それしかないんだから」

「それもそうだね」

さっきよりは自然に会話できるようになっていた。そうだ、幹太はこんな声だったな。私が五年間恋焦がれた声だ。心があつという間に夕暮れの教室に落ちていく。それを現実に取り戻して話を続ける。

「幹太は今何してるの？ 大学生？」

「あー、今は専門学校、かな」

「前橋の大学に入ったんじゃないの？」

彼が表情が一瞬固まったので、風の噂で聞いて、と急いで付け足した。まさか高三のときに彩に頼んで聞いてもらったなんて、とてもじゃないけど言えなかった。

「入ったけどやめた。なんか違うなって思ってた」

「ふうん。専門学校はどこ？」

「さあね」

「県内？」

「んー、まあ」

曖昧に笑ってグラスを口に運んだ。幹太は中学の頃も、肝心な部分を笑って誤魔化すことが多かった。変わらない話し方が懐かしく心地いい。ほら、やっぱり彼はこの地に戻ってきた。

「休みの日何してるの？」

「んー、何だろ。カラオケとかよく行くかな」

「映画は見る？ ほら、打ち上げ花火を横から見たりするやつ。あれ一緒に行くよ」

強引すぎただろうかとも思うが、チャンスはもう今日しかなかった。逃すまい、と一歩も引かずに彼を見つめる。

「あああれね。うん、いいけど」

えっ、いいの、と漏らすともう一度、いい

よ、と答えた。今度は笑顔で。自然な流れでQRコードを見せ合い、友達欄に表示された、幹太、の字を見つめた。嘘みたいだ。酔ってないのに顔が熱くなって、下腹部の奥が苦しく縮こまった。久しぶりの感覚だった。

数日後に彼の白いフィットに乗り込むときも、まさしく夢心地だった。

「お願いしまーす」

「ん」

シートベルトを締めて、シオルダーバッグを膝に乗せた。右側を見ると当たり前のように幹太がいた。自分が助手席にいても不自然でないことが信じられなかった。エアコンに取り付けられた芳香剤に、かすかに彼のおいが混じっていた。私はそれだけを嗅ぎとろうとしたが難しかった。確かめるように、何度も何度も右を向いた。

「映画見るの、久しぶりかも。幹太は？」

「俺も最近見てないなあ」

「そっかあ、楽しみだね」

映画は全く面白くなかった。気まずさを抱えながらシネマを出て、専門店街を歩いた。手をつないで歩くカップルとすれ違った。そうか、今、私と幹太はきつとデートに見える。誰か知

りあいがないかと探した。第三者の目で見て、認めてほしかった。私にだってデートの相手くらい、彼氏くらいいるんだ、と大学の皆に広めたかった。商業施設の少ない田舎のイオンモールでは、毎回嫌でも誰かしらとすれ違うのだけど、今日に限っては誰とも会わなかった。夏休みの今、大学の友人はほとんど帰省していると思出した。

その後に入ったカフェで頼んだフラペチーノは、冷たすぎて飲むのに時間がかかった。その間幹太は黙々とスマホをいじっていた。彼が気づいていないのを良い事に、薄い唇がストローに触れるのをじっと見つめた。氷が溶けた甘い水は、味が薄まっておいしくなかった。

夕暮れの帰宅ラッシュで短いブレーキを繰り返しながら、幹太は映画について語りだした。「やっぱり声優がなー。最近の映画の、イケメン俳優を起用する流れはどうかと思うよ。棒読みだし、声と台詞が合っていないって感じ」「んだからね。でも、私はヒロインの声の方が気になったけど」

「女優は声がかわいければいいんだよ」  
私が黙っていると、あの軽トラ遅すぎ、この時間に走んなよ、と小さく舌打ちした。私は目

をそらして窓の外を見た。夕焼けが山に下りていくところだった。

幹太は実家近くのコンビニまで送ってくれた。

「車、ありがとう」

「なんもよ」

車を降りて、バックランプに手を振る。見えなくなってから、周囲を見渡した。家から直接見えない位置とはいえ、近所では誰に見られているかと気が知れない。

静まり返った路地を歩き、ただいま、と引き戸をカラカラ開ける。私を待ち構えるように廊下の電気がついて、割烹着姿の母が廊下に立っていた。

「お帰り。誰とだった？」

「彩だよ。ほら、中学の時の」

簡単に嘘をつけるようになったのはいつからだろう。靴をできるだけ端に寄せる。でないと朝、新聞を取りに行く祖母に踵をつぶされてしまう。

「あー、呉服屋の？ 元気そうだった？」

うん、と曖昧にうなずくと、ふうん、まづよかったね、いい子そうだったもんね、と台所に戻っていった。

三人暮らしには広すぎる食卓にお惣菜のパックが並べられる。この地域の住民はほとんど高齢なのに、スーパーに並ぶのは油ものばかりだ。野菜炒めと一緒に食べ終えて、コンビニのポイントで交換したマグカップにほうじ茶を注ぐ。祖母は早々に食べ終えて、もう寝室へと消えていた。母は私の食器があくのを待って皿洗いを始めた。

「どう、大学。いい人見つかった？」

「んー、まだわかんないよ。なんだかんだ忙しいし」

「前にも言ったけど、長男はやめなさいよ。うちはまあ古いけど、自由に使っていいから」

幹太は長男だった。これからも実家に住む気だと言っていた。

早く孫の顔が見たいわあ、と独り言のように母は言う。私は黙ってお茶をすする。夏でも魔法瓶には熱いお茶が淹れられている。母が飲むからだ。年金とパートの稼ぎで切り盛りする母には頭が上らない。学費を払う条件として、私に地元の大学以外を許さなかったのも母だ。その理由は考えなくてもわかる。

私の思考を遮るようにスマホが震えた。通知に表示された名前を見て、こっそり微笑む。隠

し事というスパイスが、落ちていた気持ちを持ち直してくれた。

寝る前に映画の題名をGoogleで検索した。

幹太が車の中で話していたことと、全く同じ口コミが載っていた。

幹太とカラオケに行った日は、少し雨が降っていた。窓を滑るワイパーの音で幹太の声が聞き消されて聞こえづらかった。誘ってきたのは幹太だった。

カラオケ行かない？ と届いたメッセージに、私の心は舞い上がった。幹太と連絡をとっているという事実を中学生の私に伝えたら、さぞ驚き羨ましがらるだろう。三年間同じクラスだったのに、メールアドレスを聞く勇氣もなかった。タイピングはいくらでもあった。休み時間にトイレに立ったときだとか、放課後二人で教室に残ったときだとか。過去の羨望を誇らしく受けとめながら、私は了解を表すスタンプを押した。

「おー、DAM入ってんじゃん」

タブレットを手にした彼が何にはしゃいでいるかわからなかったけれど、ほんとだ、すごいね、と笑った。予約欄はすぐに彼の曲で埋まった。

「歌わないの？」

人前で歌うのは得意ではなかったが、断るのも悪いと思って、子供の頃のアニソンを何曲か入れた。ほとんどメロディを覚えていなくて、そこを誤魔化して歌うと余計に下手さが目立つ気がして恥ずかしかった。それでも彼は、おー、懐かしー、と画面を見ていた。薄暗い部屋でその横顔が色っぽく見えて、慌てて視線を前に戻した。自分はいやらしい人間だと思った。

幹太の選ぶ曲は私の知らないものばかりだった。ドリンクバーの爽健美茶をちびちび飲みながら、気持ちよさそうに歌う彼をただ眺めていた。三時間のほとんどは彼が歌っていたけれど、会計は当然のように割り勘だった。

夕食はチェーンのファミレスで、彼はハンバーグを、私はパスタを頼んだ。彼は猫舌らしく、私と同じくらい食べるのが遅かった。つい、その口に舌を絡めるのを思い浮かべてしまっ、煩惱を振り払うように黙ってフォークを動かした。ご一緒でよろしいですか？ とレジで聞かれたときも、幹太はすぐに、別々で、と返した。

帰りの車内は静かだった。雨はあがったが、

湿度はまだ下がっておらず、車を降りた瞬間じめっとした空気が皮膚にまとわりついた。カエルの鳴き声を聞きながら歩くと、濡れたアスファルトから土の匂いがした。

いつもはつけない玄関灯が光っていて、羽虫がわやわやと集って飛んでいた。家の中に入らないよう、急いで体を滑り込ませる。

「遅かったね」

「ただいま。寝てもよかったのに」

「だって杏が心配で。お風呂あったかいうちに入らなさい」

夕食はいらなさと連絡していたが、テーブルにはまだラップのかかったおかずが残っていた。それを冷蔵庫にしまう母を見ないように、脱衣所に向かう。

温まった体で自室のベッドに横になって、幹太との思い出を振り返った。今日のことだけじゃない。もともともとの、ぶかぶかの学ランを着ていた頃の幹太を。

文化祭前の教室に、私と幹太が残っている。他のクラスメートは部活に行ってしまった。まだあだけない顔の幹太は、小動物のように愛らしかった。頼りない体つきで、塗りかけの看板の前で座っていた。窓の夕日を背負う彼が眩し

い。その景色は、こうして思い出すごとに神々しさを増している。都合のいい記憶だけを、いつでも開ける宝箱にしまい、何度も手に取って感触を確かめてきた。

これさ、思ったより時間かかるね。

あの日声をかけられる瞬間まで、私は彼が普通に話せることすら知らなかった。びっくりして顔をあげると、彼はだるそうに口を尖らせていた。今まで見たこともないような表情だった。確かに、と答えると、面倒くささ、と彼が笑った。

もし残る相手が、スカートの短いあの子だったとしたら、きつと話しかけていないだろうと信じた。彼は私だけを選んだんだと。

勉強しか取り柄のない私は、その頃人間関係をうまく築けていなかったように思う。数少ない友達にも本音を話せず、やりたくもない委員長を三回とも受けた。狭い世界で浮かないようにと、典型的でない人を演じていた。

そんな私の、唯一の特別。それが幹太だった。気づくと彼のことばかり目で追っていた。

なんか、橘さんといると落ち着くな。

あの魅力的な声を頭の中で再生しようと試みるのだけれど、いつもうまくいかない。会って

聞けば、ああこんな声だった、と思い出せるのに。記憶をもとに作り出した声色は不完全で、たちまち霧になって消えてしまう。欠けた思い出が、もう一度、もう一度と、私をひきつけてやまない。もう一度、あの頃の幹太に会いたい。

突然のノックが切ない静寂を引き裂いた。慌てて起き上がると、形相の変った母が入ってきた。

「杏、おばあちゃんが」

けして顔には出さずに、またか、と思う。

「どうしたの？」

「おばあちゃんがまた夜中に何か食べてる。この前も炊飯器が空っぽになってたし、今見たら台所の電気がつけっぱなしで、冷蔵庫も開いてた。ほら、開けっ放しだと鳴るでしょ、ピピピって。それで気づいて」

「ああ、うん、鳴るね」

「もう部屋に戻ってみたいんだけど、寝たふりだよきつと。私はパートもあるから面倒見きれんし、やめるわけにもいかないし……お兄ちゃんがいてくれたら……」

はああ、と長い溜息をついた。私は、うん、と顔を伏せる。

「杏、友達と遊ぶのもいいけど……ね。頼むからね。お母さんももう年だし、いつ死ぬかわからないよ。杏はお兄ちゃんと違うもんね。ちっちゃい頃から頭もよかったし、悪い友達もいないし……」

「うん。お母さん、疲れたでしょ。もう休みなよ」

「そうだね、寝ないとね。杏、ありがとね。おやすみ」

返事の代わりに笑ってみせる。ドアが閉まりきるのを待って、部屋の明かりを消した。暗闇の中で強く目を瞑る。カラオケの薄暗い部屋の、幹太の横顔を思い出す。ストローをはさんだ柔らかい唇を思い浮かべる。そこに触れるのを想像して、冷えた体が再び熱くなるのを感じた。熱のこもった頭で、今週の内に大学のアパートに戻ろう、と決めた。成人式を理由に休みをもらったバイトも、そろそろシフトに入らないといけなかった。

改札から見送る母は、随分と小さく見えた。私はお母さんが嫌いなわけじゃないんだよ、と、誰にともなく言い訳をする。居心地の悪い罪悪感が、電車で揺れる私の背中に重くのしかかった。ごめんなさい、お母さん。

「え、成人式で？」

杏のくせにやるじゃーん！と友人は梅酒の入ったグラスを掲げた。私は近くにあった缶チューハイをグラスにぶつけて、残りをあおった。炭酸がパチパチと喉を刺激した。

大学の同期の彼女とは、県内に残る少数民族同士で呑もうと約束していた。スーパーで買った大量の酒とつまみで、下世話な話に盛り上がっていた。さっきまでは彼女の今彼と元彼と元々彼の愚痴大会だった。そこから休憩をささむように私の恋愛事情を聞かれたので、成人式で好きな人と再会した、と答えた。

「てことは、中学のときの？」

「うん。何回かデートもした」

「もうやったの？」

「やってないってば。ご飯とかだけ」

言いながら、グラスにパツクの梅酒をたぶたぶと注いだ。

「えー、顔見たい。写真ないの？」

言われて初めて、幹太の写真が一枚もないことに気づいた。幹太といる間は、生身の彼だけを見ていたから、と苦し紛れに言い訳する。いや、違う。本当は、今の幹太を形に残すのが

怖かった。

彼の容姿が整っているとは言えないことが、今の私の一番の障害だった。声や笑ったときのくせ、何より大事に温めてきた思い出が、写真にしてみればあっけなく冷めてしまうような気がした。それは困る。この恋にまだまだ燃えてもらわなくちゃいけない。私は私の青春を取り戻したい。

彼がいかに素敵でかっこいいかをどうにかエピソードで補完しようとするが、思いつくのは昔のことばかりで、面白くない映画とか割り勘の食事とか、都合の悪いことを隠すとあとは何にも話すことがなかった。彼女の反応がだんだん薄くなるのがわかった。

私、彼のどこが好きなんだっけ。

「あ、そうだ、声がかっこいいのかも」

それには彼女も腑に落ちたようで、ああ、なるほどねー、と頷いた。この感情を、第三者に認めてもらえたことに安堵する。そうだ、彼の声だけはずっと変わっていない。

確かにうちの彼もさあ、と彼女は話題を続けた。再びグラスをあおると、十度のアルコールが私の頭をばやけさせてくれた。そうだよ、私は幹太のことが好きなんだよ。だって五年も思

い続けたんだよ。

散々話して酔いが回って、ふわふわと帰る道すがら、唐突に幹太に電話をかけてみようと思いついた。もう十二時は回っていたが、立ち並ぶアパートにはまだ灯りがついている部屋もあった。幹太が起きているかわからなかったが、出なければそれでもいいとも思っていた。幹太の存在を確かめたかった。離れていると、また、あの声が変わらなくなる。幹太への気持ちが変わらなくなる。

おぼろげな手つきで電話のマークに触れると、お馴染みのリズムが一回二回と繰り返された。ダメ元でかけたはずなのに、呼び出し音に徐々に期待を寄せる私があった。電灯の下を歩きながら、すぎるように耳をすませて、三回四回と、何度も同じ音楽を聞く。五回六回と続き、まあそうだよね、と諦めが顔を出し始めたとき、音が止んだ。その場に立ち止まる。耳元で、もしもし？と囁くような声 flowed。体が痺れるような気がした。

「あ……もしもし？ 幹太、もしもし、もしもし」

「いや何回言うねん。何？」  
通話口越しの幹太の声は、いつもより遠く反

響して聞こえた。それがまた深みを増して、  
いっそう私の耳を心地よくくすぐる。そうだ、  
女は声に恋をするというではないか。最近流  
行ったアニメの、見かけがほとんど変わらない  
六つ子の中でも、女は声だけで推しを決められ  
る。

私は間違っていなかった、と誇らしく胸を張  
り、力強く歩き出した。

「あのね、私幹太が好きだよ」

彼が息を飲むのが伝わる。酔いに任せて言っ  
ていることくらい自分でもわかっている。電話  
を掛けた時点で、私の心はすでにアルコールに  
頼り切っていたと思う。

「いきなりだね」

「うん。中学の頃から好きだったよ」

「そう」

話し方がぶっきらぼうでも、声色の変化で彼  
が照れているとわかった。

「私と」

セックス、と口にするのがためらわれて言葉  
を切った。さっきまで女友達と固さがあるの大  
きさがどうのと笑いあっていたでしょうよ、と  
自分をあざける。思春期のうぶな私ならいらな  
い。もう、子供じゃないんだから。

「私とホテルに行きませんか」

勢いよく言ったものの、やはり羞恥心が勝っ  
て、ごめん酔ってるかも、と早口で付け足し  
た。同時に足も速まる。彼が電波の向こうで、  
でしょうね、と笑った。そのまま、別にいいけ  
ど、と聞こえてきて、私は歩みを止めた。

「そう……じゃあ、またあとで連絡するね。お  
やすみ」

四肢を硬直させたまま通話を切った。呆けた  
ままに曇った夜空を見上げてみると、耳から飛  
び出すような鼓動の音と、言葉の意味と、泣き  
そうなくらい嬉しい気持ちが遅れてやってき  
た。思わず叫びだしたくなるのを我慢する。

いつだったか、仙台出身の同期が空を見て、

秋田はいつも曇っているねと馬鹿にしていた。

それでも今日のこの空は綺麗だと思った。

感情のままに走り出す。私の心は、広がった  
雲の上、瞬く星たちの下へと飛びあがる。私は  
私の初恋を、いよいよ取り戻せる。

その日、幹太は大学の方まで迎えに行く  
と言った。地元のホテルに入るつもりは、私も毛  
頭なかった。新しい下着を身に付けて、ワン  
ピースはやめて半そでのブラウスとスカート

選んだ。アパートの前で立って待つ間も、私の  
体はもじもじとうずいていた。ごはん食べた？  
と彼が聞くので首を振ると、何も言わずに安い  
井ものチェーン店に着いた。お店を決めるのは  
いつも幹太だったな、と思い返す。

お客さんは私たちだけだった。USENだけ  
が流れる店内で、二人とも黙って食べた。囁ん  
で飲み込んでも味がしなかった。

再び車に乗ったとき、彼は低い声で、行く？  
と聞いた。それだけで私は目の前がくらくらし  
てしまい、うん、とだけ言っただけで俯いた。

いつもと変わらないように見える彼の態度  
に、隣の私は期待と不安でいっぱいだった。着  
くまでずっと窓の外を見ていたかったけど、彼  
に道順を調べてほしいと言われて仕方なくマッ  
プを開いた。突然の協力作業に恥ずかしさはさ  
らに増した。一応ナビはするものの、私の出る  
幕はほとんどなかった。彼も大体の場所は調べ  
ていたらしい。むずがゆい気持ちが高まると高  
まった。ようやくついた古いビルの有人カウ  
ンターで、部屋の選び方に手間取ったのも気ま  
ずかった。部屋代はやっぱり割り勘だった。

ワンスルームの入室のようなその空間に入っ  
たとき、埃っぽいと思った。けれどすぐに鼻が慣

れて感じなくなった。上着を脱いでハンガーにかける。ベッドに腰かけ、そのまま動かなくなつた幹太の、後ろにちよこんと座つた。

五年間ずっと触れたかつた、何度も空想を重ねた本物の背中に、ぎゅっと体を寄せた。お腹に回した腕を、彼の手が払いのけるようにして振り向いた。そのまま思い切つて唇を合わせた。薄い唇は想像通りの柔らかさで、これが夢じゃなくて現実だと思つて頭の中がチカチカ弾けた。耳に舌を這わせて、首筋のにおいを強く吸い込む。こんなにおいだったんだ。

何度も想像を繰り返したせいで、実際の行為はあまりにあつてなく感じた。幹太の所作もスマートとは言えなかつた。でも、これで。征服感にも似た高揚感を、胸いっぱい吸い込む。私はようやく幹太を手に入れたんだ。私の大切な特別。

はしゃぐように再び幹太の背中に抱きついた。汗ばんだ肌は余計にお互いの皮膚を張りつけ合うようだった。脂肪で固くなつた腹部を撫でると、恥ずかしいからあまり触らないで、と彼が言った。

ふと、右のおしりの上の方に大きなほくろがあるのに気づいた。それはほくろというより血

のにじんだ染みのようで、皮膚がんじゃないの、とふざけて笑つた。冗談を言えるくらいには気が大きくなつていた。

幹太は笑うでもなく淡々と、あーそうかもね、と呟いた。

「俺の家系、父さんもじいさんもがんになつてからさ」

私はとっさに、彼は私より先に死ぬんだと思つた。

彼は死ぬ。私を置いて死ぬ。もし子供ができてもいずれば一人で育てることになるし、彼の平均より大きいであろう体型から、どのみち生活習慣病からは逃れられないだろう。一瞬の内に、彼の家と、私の家と、会つたことのない姑と、束縛の強い母親と、認知症になりかけている祖母を全部背負い込む自分を想像した。そして潰れる私の姿を。彼と一生は一緒にいられない、と確信した。

急速に血の気が引いて、頭が冷めていく。それは実感として寒気に変わり、ひんやりと冷えた肩を両手でさすつた。

「先にシャワー浴びてもいい？」  
「ああ、どうぞ」

現実感のないまま浴室へ入る。湯船で体を温

めようとするけれど、芯のところはずっと冷えたままで、鳥肌が立つていた。お母さんの言うとおり、長男はやめるべきだったんだ。体を強く洗つた。流してはまた洗淨料を手にとり、赤くなるまで何度もこすつた。消えて。全部消えてよ。触れたところも触れられたところも、全部。

車に乗っている間、私は窓の外を眺めていた。来るときも同じことをしたはずなのに、世界の見え方が百八十度違つていた。何してるんだらう、私。

大学を二年で中退して、こんな田舎に戻つてきて、かと思えば凶々しく実家の権利を主張して、安いチェーン店しか選ばない彼の、全部がださいと思つた。でも、と唇を噛みしめる。そんな男に五年間もいれあげた私は、もつと馬鹿で惨めでださかつた。

歩行者のいない赤信号に止まっている間、遠くで鳴く鈴虫に気づいた。そういえば、蝉の声はもうずいぶんと聞いていなかった。二十歳の夏が終わる。全部、たったひと夏の出来事だったとは。自分の必死さがもはやおかしかつた。

小さく笑つたら、なんだか諦めがついた。今日で最後にしよう、と決めた。大切に持ってい

た宝箱も、ここに丸ごと捨ててしまえばいい。そうして空っぽになった新しい私に、今度はおっとちゃんとした思い出を詰める。ホテルを出たときのやるせなさは、アパートに着くころには妙な安堵感に変わっていた。私の初恋は終わった。ようやく終わってくれた。

「送ってくれてありがとう。帰り気をつけてね」

シートベルトを外し、ドアハンドルに手をかけた。もう二度とここに座することもないだろう。

「杏」

驚いて手を離してしまった。信じられない。

今、幹太が、初めて私の名前を呼んだ。

とっさに振り向いたとき、唇にひんやりしたものが触れた。やわらかくて、優しい。

呆然とする私から視線を外し、右側の窓を向いて彼は言った。またね。街灯に照らされたその後ろ姿が、あの日夕日を背にした彼と完全に重なり合って見えた。

車が走り去った後も、私の心臓は落ち着かなかった。体の奥が火傷するように熱い。雷のような衝撃が、両脚の間から胃と心臓と喉を抜け

て脳天を貫いていた。指先が震える。立っている感覚がわからなくて、ふらりとコンクリートの壁にもたれかかる。

私の中を暴れまわるこの感情を、もう恋とは呼べなかった。これは毒だ。私の、心の弱い部分を刺激する劇薬。これがなくては生きていけないほどの強い執着が、私をまたここへ閉じ込める。もう一度もう一度と、私はきつと何度もあの瞬間を渴望する。この故郷に散りばめられた、思い出を糧に生きていく。

夜の澄んだ空気の向こうで、星たちは今日も雲に隠れて見えなかった。

詩

# 詩

## 奨励賞 種を蒔く

大仙市 高橋 岑 夫

ゆつくりと急がず  
ひとつぶひとつぶ  
指でつまみ  
畦に置く  
間隔をきめ  
浅めの穴へ  
風に飛ばされないように  
さっと置き  
土をかぶせる  
少しつめたい感触  
堆肥を施し  
土壌改良剤を撒き  
くりかえし耕し  
石をひろい  
さわさわになった土を  
平らにして

糸を張り

畦をつくる

毎年 かわらない手順

母がなしたように

人生

畑に種を蒔くように

ゆつくりと行動する

ことばの種を蒔き

愛情の種を蒔き

慈しみの種を蒔き

哀しみの種を蒔く

ゆつくりと歩く

そういう心を持ちとうとしても

急いでしまう

荒いことばを吐き

憎しみを散らし

ののしり

そのつど反省するが

もとにもどってしまう

そういうくりかえしの人生でも

いつか

一瞬でも

畑に種を蒔くような行動で

反省をしなくてもよい

そういうことが

もしかして

今わの際にでも

できるとすれば

幸せなのかも知れない

奨励賞 夜明け前

能代市 工藤 美咲

「だいじょうぶ」とあのこが

「ここにいるよ」とあなたが言った

ひとりじゃないって確かめて

ありがとうって目を閉じた

苦しみ泣いたあのこを前にして

どうかすこしでも楽になってほしいと思った

わたしにできるのは、ただ離さないこと

「泣かないで」とは言わない

「だいじょうぶ」と撫でていく

たくさん泣いたそのあとは

最初に笑顔を見せてほしい

静かに塞がるあなたのそばにいて

はやくいつもみたいに笑ってほしいと思った

わたしにできるのは、ただ待つこと

「こっちにきて」とは言えずに

「ここにいるね」とすこし離れる

やがて落ち着いたそのときは

待たせたねって抱きしめて

ひそかに寂しいわたしに気がついて

あのこもあなたも並んで一緒にいてくれた

わたしにできるのは、ただゆだねること

## 奨励賞 ノー・タイトル

秋田市 田口夏音

命そのものであるような

私を私に還元するような

私からこぼれ落ちたどんな私も

まるごと抱きしめてあげるような

私はきつと生きるために詩を書いている

詩を書くということ

ままならない世の中の隅の方で

今この詩を書くということ

詩を書くということ

誰の命も救えないと知りながら

今この詩を書くということ

時代や身近な出来事を

或いは流転する自然や思いの丈を

衝動のままに書き留める

世間の役に立てずとも

金に変換できずとも

言葉を取捨選択したり継ぎ合わせたり

己との戦いのその苦しさをさえ心地好い

私にとって詩を書くということ

とても心臓に似ている

私の真ん中に居て

私にとって詩を書かないということ

世界の混沌の中でいろいろな「声」を失い

身動きのとれない状況に似ている

認められるはずの私の弱さを許せないまま

陳腐な劣等感だけに苛まれ続けることであり

一期一会の感情に寄り添えずに

彩度の低い毎日を情性で過ごすことでもある

詩を書くということ

ままならない世の中の隅の方でも

誰の命も救えないと知っていても

例えば明日地球が終わるとしても

変わらず詩を書くということ

題名のないこの人生の副産物

ただどうか

どうか無意義と言ってくれるな

詩を書けなくなっても死にはしないが

## 奨励賞　フィクションが救い得る

### 世界について

秋田市　霜　月　　楓

ビルのガラスに映る自分の

鼻より上だけの顔にも慣れたいま

おとなと呼ばれる歳になったが

実感はいまだ中学や高校のころの

自意識に揺れるわたしや俺が

全能と錯覚していた幼さが残る

それを隠すだけの知識や嘘ばかりが

薄弱な外殻を成しているだけなのだ

ひとの顔の全部をまなこに映しておかないと

まるで他人を信じられなかったあの日々

誰かが呟いた予言や

前代未聞の敵襲や

脅威をうたう言説や

すぐにでも訪れそうな人類の終わりに怯え

生活を続ける力の一切を奪う鬱屈に

耐えかねていたあの春に

光を求めて目を閉じて

最低な夜から逃げ果せる術を

体現したのはスクリーンの向こう

ヒーロー　救いなのだ

あなたは拳でしか己のことを守れなかったが

それでもしなければ負けていたあの物語では

あなたが最も正しかった

ヒーロー　救いなのだ

あなたとあなたが守った魂や美しい曙光は

他の誰が貶めようと　わたしや俺のところで

永遠に輝くべき宝だ

明日終末が来るとしても

明日死を迎えるとしても

こんないけない生活がまだ続き

当たり前などに成り下がったとしても

あなたの優しい咆哮が

威嚇のような祈りが

間違いだらけのあの夜が

記憶に刻まれて再生を繰り返し返す

脳の片隅で光を放つ

それがあるからどうにか狂わず

何も呪わずに生きていられるようなのだ

ヒーロー　本当に救いなのだ

鼻より上の顔だらけの時代にわたしは

おとなで在り続けなければならぬが

あなたをよすがにしていれば

どんな長い夜にも勝てる気がしている

# 奨励賞 人生の栄養

秋田市 浅利 駿斗

天気雨

努力の結果

舞台の上で

ともに輝く

笑顔と涙

積雨

負の感情の蓄積

怪我をする、物が壊れる、生き物が死ぬ

何もかもがうまくいかない

良くない日

引きずるくらい良くない日

風雨

衝突

感情をぶつける

一方的に

歩みを遅らせる

息もできない勢い

時雨

揺れる感情

中途半端な立場

どちらにもつかないずるい位置

役に立たない存在

甘雨

数々の経験

喜びも

悲しみも

怒りも

苦しみも

私たちに降りかかる

確かな栄養

## 入選 秋を奏でる

秋田市 鈴 木 修 一

流れる川波の五線譜に止まりあぐね  
岸辺の草むらに羽を休める赤い音符  
指をふれば 羽音震わせ舞い上がり  
広がる青空 馳せゆく雲に  
口ずさんでいる あのメロディー

小阿仁川の水に心に乗せて  
流れ込む阿仁川の上流  
瀟洒な音楽館の扉を開き  
ピアノを前にした主の似姿に  
二十年ぶりの再会を果たした

主が奏でるピアノ変奏曲は  
豊かな海の象と心をドームに響かせ  
めくるめく風と浪 光と影の  
感情と表情を描き尽くし  
愛おしい昔と 今あることの幸せに  
再生の鼓動と 未来の希望を添えた

若き日の思い出の

「浜辺の歌」を唇に

戦火に焼かれた楽譜や

虐げられた楽想を復活させ

息を吹きこむ仕事のために

招かれて 欣喜雀躍

戦後間もない東京へ

再び上京を果たしたが

数日のうちに神に召され尽きた命運

カナリヤ色の秋の光は

音符となって故郷の川に降り注ぎ

奏でられなかった楽譜を鳴らす

流域を潤し 海辺を慕い 川は流れる

力強く 清らかに そして絶え間なく……

忘れた歌を思い出させるように

\* 成田為三 浜辺の歌変奏曲

## 入選 ホテルの最上階で

東京都昭島市（東成瀬村出身）

佐藤清助

コロナ禍の外出自粛

線状豪雨後の 熱波

人が消えた街

黄昏時 中空を覆いつくすムクドリの群れ

眠れぬ 長い夜の帳

鮮やかな朝焼けに 頭が垂れる

二回目のワクチン接種の帰り

奮発しホテルでコーヒーを喫する

眼下に コナラ ミズナラなど雑木が林立し

故郷の里山が偲ばれる

輝く深緑のパノラマに

五体が奪われる

地球号の乗客が呻うな吟げんしているのに

この涼しげな 素知らぬ顔の風情

遠くに 富士山まで見える

風情に酔い 話が途切れたころ

連れが 何の脈絡もなく 突然

「今まで出逢った中で一番逢いたい人は」

「それは……」

うろたえた私は 臉を閉じ黙考する

閉じた私の臉から

不覚にも 涙が堰を切って零れ落ちた

予想外の展開に 連れは 慌てた

私にもあった青春時代

あちこちで拾い集めたカバンいっぱいの知識

欲を出しポケットにも詰め込んだ知識を看に

寮の居室で 赤提灯で 喫茶店で

政治経済 国際情勢 憲法 文学について

学者や評論家になり切って 偉そうに

熱く 青い議論を闘わした

時には歌声喫茶で ロシア民謡を歌った

K君に決まっている

青春に「恐れ」という言葉はない

蛮勇こそが正義

茨の生い茂る道 荒れた砂利道を

それぞれ 別の方向に

平然と歩んでいった

音信不通後 ようやく探し当てたK君

既に 星になっていた

私は夜空を見上げ 慟哭した

三回忌の時 彼の愛唱歌を

遺族や友人と共に合唱した

そんな巷の矮小なドラマを

新型コロナは嘲笑い

今日も 感染拡大に猛威を振るっている

収束の願いを自粛と 人類の叡智に託し

沈殿した苦いコーヒーを飲み干す

## 入選 リヤカー

秋田市 安宅 キサ子

リヤカーと言えば 母の顔  
手拭いを ほっかぶり

荷台に積んだ 母の自慢の 野菜

たまな でごん ねんじん

「今日は、野菜 えがったしか……」

と お得意さま まわり

どんなに

キャベツ だいこん にんじん

と 言葉を直しても

その度に めんどくさがる 母

「えなだ…… おらが育てた 野菜は

一味 違うから……」

一回だけ ついて行ったことがある

リヤカーの中で 揺られて

歩いたのは わずか

片道15キロほどの 道のりを 歩く母

ほっかぶりの 母は

娘から 見て

みすばらしく 野暮ったかった

「今日のお野菜は なにかしら？」

と、日傘を傾ける 町の 奥様達

とても おしゃれで 上品に思えた

けれど 母は 堂々と

リヤカーの野菜を 広げて

「ほれっ！ まんず 食ってみてけれ。

うめーど！」

リヤカーの中で ナスやトマト

キュウリや 枝豆など 夏野菜が

ピカピカに光って 媚を売っている

木枯らしの 吹く頃は

近くの 池で

土のついた だいこんを

一本ずつ ていねいに洗っていた

あかぎれで 血がにじんだ 母の手

そんな 母の苦労も 知らず

必らず買ってくる 一袋の菓子

まだか……、まだか……と 待って

路地に 母の顔が 現われると

走って リヤカーに 飛びついた

呆れ顔の 母の 高笑い

「難儀したね！」

と、写真の母に 問う

ふと ありし日の 母の一言が……

「なんもだ。おらの 幸せは

ほんとうに 小ちゃいことだから」

グリーン賞 聖火の音

鹿角市 空音樹

奏

音が跳ねた

音が踊った

音が歌った

音が波打った

音が咲いた

音が広がった

心が跳ねた

心が踊った

心が歌った

心が波打った

笑顔が咲いた

笑顔が広がった

広がれ広がれ笑顔の輪

広がれ広がれ世界中に

しずまりかえった世界に

響け響け聖火の音

## グリーン賞 僕の生きる世界で

鴻上市 高橋 美咲子

この世界には一体、

どれだけの悲しみがあるのだろうか。

毎日のニュース、

心ない言葉、

むなしい現実。

今日は何を知らされるのだろうか。

寂しくて涙が止まらなくなったって、

悲しくて未来が見えなくなったって、

どんな人にも同じように

時間は通り過ぎてゆく。

地球はぐるぐる回り続けるんだ。

たとえば、

僕にとつての明日がないとしても。

小学生のにぎやかな声が

オレンジ色の地面を駆けていく。

この世界では一体、

どれだけの人を悲しみから救えるのだろうか。

ひとりぼっちにはしないよ。と

言えるものだろうか。

地球はぐるぐる回り続けるんだ。

たとえば、

僕にとつての明日が

なんて

言えない。

明日また、笑ってる君に会えますように。

僕の願い。

いま、誰かが見られなかった景色を

この夕焼けを、

僕は見ている。

## グリーン賞 待ツ者

男鹿市 皐 月 真 美

今日も貴方を待ツ

家を空ける日が多くなつた

一人では広すぎるから

紅茶がまぶさなくなつた

入れてくれていた人がいないから

口数が少なくなつた

話し相手がいないから

君は私に何も言わない

私は隠し事が上手いから

でももしかしたら気づいているのかも

君は優しいから 何も言ってくれない

今日も貴方を待ツ

室内に雨の音が鳴り響いている

# グリーン賞 お気に入り

北秋田市 明石 眞奈子

我々はこれがいい

きれいな海に

きれいなゴンドラ

私はこれがいい

かわいい鏡に

かわいいリボン

みんな

みんな

好きなものが

たくさんだ！

ぼくはこれがいい

かっこいい車に

かっこいいロボット

あたしはこれがいい

イケてるかばんに

イケてるシューズ

おいらはこれがいい

よく飛ぶ飛行機に

よく飛ぶトランポリン

わたしはこれがいい

ばあさんの手作り手袋に

ばあさんの手作りマフラー

## グリーン賞 思い出

能代市 佐藤 叶実

もしかして

大人になったら

好きだったものを忘れて

ちっぽけなことばかり覚えていくかもしれない

もしかして

たぐさんのちっぽけなものたちを抱えて

私は大人になるのか

蛍光灯が1つ切れたままの教室  
チャイムが鳴る前の小さな砂嵐  
やたらがたがたする机  
守備範囲のせまいクーラー

思い出は？

と聞かれて

ぱっと思い浮かぶものだ

梅雨にびちゃびちゃする廊下

クリップがとれたシャーペン

後ろがしわくちゃな制服のスカート

無機質な検温器の声

大好きな思い出も大嫌いな思い出もたくさん  
あるのに

ふと思いつくのは

こんなちっぽけなことばかりだ

短  
歌

## 短歌

### 最優秀賞 集団移転

秋田市 加藤 一 弥

いく度も洪水浴びし柿の木を形見の如く名残を惜しむ  
水漬く田をはいずり廻る母ありて戦死公報受けし集落  
死に代り生れ代りを重ねつつしがみつきたる田畑見渡す  
盤石の土台を残す屋敷跡一つ一つに父祖の魂あり  
百姓を継ぐ人なきを嘆きつつ新たな地に思いを馳せる  
雄物川時に怒りてあふるるも穏やかなりし日々永きよ  
高台に集団移転の二十余戸うぶすがみに心託して

### 奨励賞 赤の他人

能代市 工藤 美 咲

待ち合わせしていないのに待っているみたいな恋だよいっそ笑って  
その小指わたしにちょうだい赤い糸結んでわたしと繋ぐからほら  
どれほどのうそをついたら泥棒になれる？あのこのきみを盗める？  
傷口をひろげてみればみるほどに愛されちゃうからまだ傷だらけ  
くちびるにうその色のせてわらってもわたしはわたしにしかなれないね  
関係に名前はなくとそれを望めば切れるほどのつながり  
憎くって仕方ないよまだ嫌わせてくれないほらまたその笑い方

### 奨励賞 農にいそしむ

大仙市 浅利 繁 雄

トラクターゆっくり耕土ほり返し小鳥さえずる春も呑みゆく  
われの身と共に老いゆくトラクター心をこめて泥を洗えり  
活着し緑の色を深ぶかと稲の若苗ひごと勇みたつ  
汗に濡れ泥田の雑草ぬきとればほころぶ稲の輝きの見ゆ  
真夏日の畦に佇み見渡せば稲田は出穂の盛んなひびき  
作物の生きる力に励まされ農にいそしむ英気わくなり  
「元気よい爺ちゃん好き」とちゃかされて稲刈る機械の運転担う

### 奨励賞 おかげに生かさる

横手市 箕浦 宮 子

「外に出るな」子に言はれても雪除けるわれに落ちくる堂の屋根雪  
助けてと叫ぶわが声雪に埋れ帰る子判るやわれの立つ位置  
落雪の山に誰もがわれの死を確信せしまま捜しくれしか  
車椅子にICUを出るわれの髪梳きくれるナースは笑顔に  
「生きて帰る」信じられぬと走り寄る迎への吾子と涙のハグする  
退院し子に見守られ入る風呂日に日に薄らぐ肩の紫  
奇跡にも必死の救助を被りておかげに生かさる雪の底より

## 入選 背戸の栗の木

横手市 佐々木 ヨリ子

遠く住む息子にさらり告げ終活の始めに背戸の栗の木を伐る  
止り木を失ひ惑ふ鴉ならむ二声鳴くに「ごめん」と返す  
年輪を百余り数へ腰下ろし栗の取り持つ絆を思ふ  
森深く出口は見えず焦る夢伐りたる栗の木の報復や  
降りながら消えゆく雪が年輪を程よく濡らす今日花まつり  
甘酢ゆき栗の花穂のにはひ起ち伐りたる理由曖昧となる  
ひこばえの栗の葉裏に鈍色の空蟬のぞく風やはらぎぬ

## 入選 忘れえぬシーン

秋田市 鈴木 修 一

ベッドから海想ふ子は人魚姫に生れ変はりの夢を託せり  
夏の雲わき立つ道を海原へ親子のひと日あすを待たず  
「海の果てまで行きたし」と願ふ子の訣別の語のごとき響きや  
背にすがる少女のいのち支へつつ水平線に目を凝らす医師  
脳の指令狂へるゆゑに生ずといふ痛みははげし身の歪むまで  
持ち直す父を看取れるまどろみの夢にまじらふ白鳥の声  
薄明を白鳥七羽飛来して看取りしいのちのごとく灯れる

## 入選 母の引越し

秋田市 森 野 奈 津

真夜中の地震に思ふ高齢の母をいつまで一人暮らさず  
高齢者施設に入る心決めバサツと家計簿捨てたもう母  
入所日の決まりし母は連れて行く身のまわりの物ドライに選ぶ  
飼ひ猫は引き取られるもこの家のかしこに残す甘いおもかげ  
介護士が毎朝寄こす温タオル最高なりと母場に慣れる  
おしゃれめの服を選びて施設での暮らし楽しむ母頼もしき  
床とこの間の軸ゆかも外して床ゆか縁わき一人見ている母居ぬ実家

## 入選 集落の山 大丹波

大館市 館 下 昇 悦

我が村のうしろにそびえる大丹波ふもと巡りて独活の芽を掘る  
春一番芽出し始める「コゴミ」採りリュックいっぱい今日の収穫  
うぐいすの声背なに聞き今日も又手頃にくらむタラの芽を採る  
ウド、アイコ、ホンナの採れる大丹波この宝山大切にせん  
老いたなあミズ採りに行きつまずきて転げ痩せもしたたかに打つ  
青山もいつしか紅葉もみぢの時期なれば茸はそろそろ顔出し始む  
こう茸とう高価な茸の生える場所我が老いたれば子に教えたり

入選 父祖の地に生き禱り継ぎ、本海獅子舞番楽  
の伝統を伝える、13郷村を訪ねて――

秋田市 井上乙穂

霊峰の恵み厳しき明け暮れを獅子舞語る玄義ます郷

霊峯の深き恵みに十三の郷の明け暮れ浄き鎮守社朽たさぬ

百宅ゆ直根―笹子を漲り流れ二階―提鍋へ瀬々らかの子吉川

父祖の子のその父の子の子の我に享け継がる笛夕波に吹く

鳥海の『夜明かし番楽祭り』の夜の東嶺に光る丸ごこの月

一世の家建て祭礼ると神宮獅子丹の太柱囁み絡み達ち

鳥舞の雌鳥舞ふ二子篠笛の長子八十路の父太鼓打つ

俳  
句

# 俳句

## 最優秀賞 宝蔵寺にて

秋田市 石郷岡 由紀

禅寺に揃ふ閑伽桶あかさるすべり  
奥つ城につづく小径や草茂る  
丈低き十葉にしてにほひたる  
炎昼や飢渴知りたる大櫓  
供養碑の彫りの深さや蟬のこゑ  
涼風や靈獣彫られたる柱  
本堂にゆかしき灯り盃蘭盆会

## 奨励賞 菩提寺

由利本荘市 佐々木 成

島一つ占めて菩提寺冬に入る  
西行の詠みたる桜返り咲く  
寒禽の声のつらぬく大山門  
寒詣の鐘の音タブの森揺する  
声太き漁夫らの読経寒詣  
蕉翁の句碑の地震疵風花す  
菩提寺に渡る海鳴り春兆す

## 奨励賞 父の時計

三種町 三浦 静佳

秋桜いくたびも開け棺窓  
任職の大きなマスク威銃  
水の秋父の享年褒められる  
父見舞うことの叶わず酔芙蓉  
合歡は実に白肅の村の忌中札  
父の名も形見のひとつ小鳥来る  
亡き父の時計息づく星月夜

## 奨励賞 少年

八峰町 浅田 英夫

蝶生る自転車の補助外しけり  
未だ高き少年の声麦青む  
向日葵が咲いて少年声変はり  
白南風や二の腕光る力こぶ  
この町が好きだと尊舟のうへ  
語り部に向くるまなざし青林檎  
駒踊り受け継ぐ意志の玉の汗

## 入選 巡礼彩々

秋田市 和田 仁

祝婚の鐘が鳴るなり薔薇館  
秋天に驛馬いなく巡礼路  
林檎はむアダムとイヴの如く食む  
チャイムいま聖歌を奏で大花野  
身に沁むや多色刷なる殉教図  
ルルドへの山路を急ぐ夕月夜  
洞窟に燦たるマリア秋の虹

入選 円覚寺

秋田市 舟山 つぐみ

北上の空真つ青や梅雨明けける  
千年の竜灯杉や夏怒濤  
ギヤマンの飾り玉あり堂涼し  
奉納の鬻の漆黒油蟬  
船乗りの鬻額を目に扇子かな  
鎮魂の毛髪刺繡夏深し  
夏の日や寺宝ゆたかに円覚寺

入選 蓴舟

五城目町 石井 美智子

一点の沼のひかりや明易し  
菅笠の沼すれすれに蓴採り  
顔のべて沼に傾くぬなは舟  
蓴舟郭公を背に漕ぎ出しぬ  
主の貌主の声してひきがへる  
蓴舟舳ふ沼辺の下枝かな  
ひかり合ふ蓴の花や峡の沼

入選 影

湯沢市 加瀬谷 敏子

見つめ合ふ棚のこけしの影おぼろ  
踊子の影ゆつくりと雁化かな  
満月を乗せて夜汽車の影走る  
影たたむはぐる蜻蛉の仕草かな  
幾千の雑兵の影露しぐれ  
桐一葉影にも重さありさうな  
一村の面影凍るダムの底

入選 ふる里に生きる

にかほ市 宮本 秀峰

恙なき老いの目覚めや今朝の秋  
朝顔を数へて一と日始まり  
ふる里にこんなにも濃き二重虹  
文机に肘を預けて暑に耐へり  
難聴の耳が捕らへし遠郭公  
鼻に鳴かれ八十路の早寝かな  
寝そびれの身に銀漢の流れ出す

入選 鱧祭り

にかほ市 齋藤 みどり

糶の鱧三頭身の巨体かな  
助手席に人より重き鱧一本  
鱧捧ぐ漁夫にもありし恵比須顔  
神妙な顔して担ぐ鱧祭り  
一丁の大姐板や鱧の反り  
古希なれどまだある力鱧捌く  
人として傲らず鱧を捌きけり

入選 またぎの里

秋田市 田口 穂心

神棚を拡ぐ頭領しかりに雪残る  
火造りの「フクロナガサ」に玉の汗  
番楽を口伝根子の夜長かな  
山神へ供ふ慣ひの虎魚かな  
熊鍋もまたぎ勘定てふ慣ひ  
遠巻きに月の輪欠けし熊を追ふ  
卷狩の追ひ詰めてゆく勢子の声

入選 象潟路

湯沢市 山田 草人

薰風や海をそびらに羅漢像  
見事なる植田となりて海跡地  
整松の島々囲み青田海  
旅疲れ癒す足湯や合歡の花  
芭蕉像杖さす先の松露かな  
鳥海山の水が育む稲田かな  
餌無くも釣るる鮎防波堤

入選 獅子ヶ鼻湿原

にかほ市 須田 亜希子

根開きに犇めき合つてゐるいのち  
身じろがぬ鹿の影より澄む瀬音  
万緑や獅子ヶ鼻へと抜ける道  
新聞に茸のほてり解きにけり  
湿原の霧は妖精モリウの誘ひかも  
行く秋を惜しむ鳥海マリモかな  
凍星に抱かれあがりこ語りかく

入選 卒業

秋田市 若井 未緒

春時雨フタコブラクダの瞬きぬ  
まだ皮の硬きローファー卒業す  
川底の石みな角張りて蝮逃ぐ  
料亭の多き湖畔や額の花  
深き息吐きて踏み入る大雪溪  
藪漕ぎの腕に刺さりし夏薊  
河鹿鳴き田に囲まれし祖母の墓

川

柳

# 川柳

最優秀賞 大志を拓く

大仙市 佐藤 啓子

羽織い違う景色を見たくなり  
頂きへ翔る未踏だとしても  
凜として青天を射る夢泥棒  
闘うと決めた命に水をやる  
充電に放電今日を生き尽くす  
ささやかな追肥自信を積むように  
念ずれば拓く大志という扉

奨励賞 幸せの住処

秋田市 山崎 如酔

ふる里のやさしい風が出迎える  
見つめれば虹と変わっていく笑顔  
明日は晴れ今日という日が辛くとも  
時として龍のうろこを楯とする  
お日さまも間借りしている水溜まり  
母さんが見つけてくれた僕の幸  
本当の幸せ住んでいる 心

奨励賞 凡人

大仙市 大嶋 久利

割るときに命を思う卵やき  
若い日の自分に意見できたなら  
カタカナ語ない民謡に癒やされる  
平凡で目立たないのも個性です  
やりたいことまだまだあって万歩計  
端っこで保護色になり飲んでいる  
墓地決まり元気になった老二人

奨励賞 蛍草

秋田市 佐藤 明子

夢を見に露の世にきてまだお邪魔  
目に映る花は心の彩で咲く  
そっと咲く露の命の蛍草  
娑羅ばとりぼとりと土に還る音  
背を伸せと凜と父なる冬木立  
わくわくと後期青春日日多忙  
輪廻輪生花の命に囲まれて

入選 つれづれに

潟上市 遊 佐 おさむ

プライドの異臭をふさぐ蓋がない  
ワンマンの陰に日向に木偶が群れ  
出る杭になろう私の正義感  
子の色に融けて余生を永らえる  
目の高さ合わすと通う血の絆  
好き嫌い意固地と歳を押し通す  
光線が薄い頭皮を突き刺さる

入選 巢立ち

秋田市 三浦千両

砂場から駆けだしていく童話の絵

一文字結んだ口で自我を彫る

迷い泣き悩んで君の精一杯

未知数の期待に獅子の父となる

少年の視野のはるかに雲の峰

思うまま翔べ人生は君のもの

巢立ちゆく無限の空に見る北斗

入選 明日の光

大館市 近藤桃春

悶々と悩む終わりのないドリル

少年の頃に迷った回り道

痩せ我慢裏に狡さが見え隠れ

さまよった道は凸凹道ばかり

モヤモヤを吹っ飛ばしたい胸の刺

聞く耳は平らかであれ片寄らず

天空に明日の光を 掴みとる

入選 追憶

五城目町 佐藤ちずる

少年の追憶にある深い蒼

菜種梅雨また古傷を語りだす

振りあげた父の拳がふと迷う

胸底を探ればふるさとの言葉

しがらみの風の重さよ彼岸花

過ぎてから気付く迷路の忘れ物

幻聴に忘れた過去が膨れだす



エ  
ツ  
セ  
イ

# エッセイ

## 最優秀賞 北海道生まれの

### パング豆

大仙市 小松 紀子

豆は五穀といわれる日本の重要な穀物の一つで、おそらくは米の栽培を始めた古代から日本人の体を養ってきたのだろう。大豆は味噌や醤油、豆腐や油揚げ、と加工され、小豆はあんこや赤飯など、日本の食文化になくはならないものに違いない。

昔から、地域の大人たちが「まめでらが」「まめでな」と挨拶をするのを耳にしてきた。まめまめしい、は健康で元気なこと。健康で元気な体と心を例えて表現するのに、豆はぴったりだなと思う。

二年前に、北海道十勝地方の本別町ほんべつちやうを旅する機会があった。北海道では気象条件から米作が困難だったため、開拓時代に本州から北海道に移り住んだ人々は寒さに強い豆の栽培を生活の支えとしてきた。広大に広がる緑の中にある、

道の駅「ステラほんべつ」の農産物直売所には多くの種類の豆が陳列、販売されていた。初めて見る豆が幾種類もあって、さながら、豆の博物館だと目を見張ったことだった。

中でも目が釘付けになったのはパング豆と表示された一・三センチメートル程の豆だった。色が黒と白半分ずつの豆は、インゲン豆種で、北海道の在来種であるそうだ。正確にはシャチ豆というらしい。海にいる鯨の仲間の鯨くじらは背面が黒で腹面は白色であり、鯨を知っていた人が、この豆にシャチ豆と命名したのだろうか。のちに幸福と平和の象徴のようなパングが日本で飼育されるようになり、その色と可愛らしさにあやかっけてパング豆という愛称をもつたと推測する。また、パング豆は所が違えば鞍掛豆のことだったりする。鞍掛豆は大豆種で、馬の背中に鞍を載せたような色味であり、パング豆の通称をもつようだ。

ここでいうパング豆は北海道のシャチ豆のこと、とにかくめんこい。黒い面にゴマ粒より小さい白の斑紋が付いているものもある。黒いお顔の「一つ目小僧」に見えなくもない。半面の白い方を顔に見立てたら、昔絵本で見た「のっぺらぼう」みたいだ。

売店の人が言うには、北海道でも栽培する人が減少し、市場にはめったに出回ることのない貴重な豆だそうだ。初対面のパング豆が、気になってたまらず、五百グラム入り一袋を求めた。

あまりに可愛い豆なので、食べてしまうのは忍びなく一握りの豆を植えてみることにした。北海道の在来種なのに、気候風土が異なる秋田で、うまく育つのだろうか。

「八重桜が散る頃には何を植えてもいいよ」友の言葉を思い出して、昨年（令和二年）六月に播種トレイに寝せた豆は一週間程で発芽し、双葉から本葉になり、茎もしっかりしてきたので、まもなく家庭菜園用の畑に定植した。畑の耕起やマルチ掛け、ネットの設置などは、農業者の夫がしてくれた。茎葉は意志をもつように成長し、蔓を伸ばしネットに絡み這い上がっていく。子供の頃読んだ『ジャックと豆の木』の絵本を思い出す。

八月になり、茎葉や蔓が、二メートルの高さのネットのテッペンを超えた。今度は互いの蔓どうしを縁すだとして、絡み合っていく。しかしなかなか花が咲かない。北海道とは土壌、気温や雨量の自然条件が異なるのだ。何より彼の地の

生産者の愛情と技術が私にはない。「蔓性の豆は晩生おくてだから」の夫の言葉に安心しているうちに、白い可憐な花が一つ二つと咲き出してそれが萎れた先から莢を結んでいく。萎れた花が莢を作らずに落ちて土に伏してしまうのも多い。

青いままの若い莢を収穫して食べたい気持ちでぐっと我慢して、完熟しさらに枯れるのを待つ。朝な夕なに、花を見つけ、莢を確認するのが楽しみで、いそいそと畑に向いた。

こうして、山に初雪の便りがある頃に、私は自らの手でいとしいパンダ豆を収穫できたのだ。からからに乾いた莢を一つずつ弾けば、一列に行儀よく並ぶ豆の可愛いらしさ。濁りのない黒い背中、陶磁器のように白のお腹、どんな物語があつて二色になったのだらうと、また植物の不思議を思う。

わくわくしながら、煮豆に取り掛かる。ざつと洗ってから充分な量の水に一晚浸す。翌朝にはふっくらと膨らんでいる。火に掛けて四十分ほどで柔らかくなった。豆の半分位の量の砂糖を入れて少し煮てから、塩少々を入れて一呼吸おいて完成。煮豆になったパンダ豆は黒い部分が濃い茶色になり、白いところも淡く色づき、全体的に淡い茶色になっている。赤ちゃんパン

ダ、老熟、といったところか。ねっとり柔らかく、とてもおいしい。

浄土の義母は甘いものが大好きだった。命日に供える赤いお膳に、煮豆の小鉢をそつと乗せる。

「婆ちゃん、今日の煮豆は不思議な色あいでしょう、パンダ豆という豆だよ」

在来種という昔ながらの野菜は売るための品種改良はしない。農業者の高齢化と後継者不足という問題もあり、北海道では栽培する人が減っているそうだ。でも今は情報の時代、このパンダ豆はきっと全国のあちらこちらで栽培され、愛されるに違いない。

北海道で出会った豆を自家栽培して二年目の今（令和三年）八月は、白にピンク色が乗った小さい花が増えるのを楽しんでるところ。栽培過程を楽しんで、大事な人たちと味わって、他に種豆として保存しておく、翌年も蒔く。古希を過ぎて残り少ない私の四季の暮らしの彩りとなってくれるだろう。

## 奨励賞 父のこと

秋田市 撰 津 肇

父が昨年十二月初旬の夕刻、入院していたK病院で亡くなった。大正十一年生まれの満九十八歳、太平洋戦争で横須賀第一海兵団に所属しラバウル島に従軍し、生き残った戦中派と呼ばれる世代である。同じ部隊の戦友達は乗っていた艦船が空爆を受け全員亡くなったという。その頃、父はマリアリアにかかってしまい、上官の計らいで早めに所属する部隊を離れ無事に本土に戻った。

父は戦後の混乱期を経て、今日の令和までの四時代を生き抜いた。現在の男性平均寿命が八十一歳、それに比べ父は長寿であった。

父が亡くなる二日前の入院当日、私と妻と姉の三人が医師から父の病状を告げられた。父は肺炎で病巣が全体に広がっており回復の見込みはなく、いつ急変するか予断を許さないということであった。

説明を受けた翌日の朝、早速病院から父の病状がおもわしくないので、早めに家族面会をし

たほうが良いとの連絡が入った。

急いで連絡を取り、その日の午前中のうちに私と妻、長男夫婦と二人の孫、それから男鹿に嫁いでいた姉の七名で父を見舞った。

ベッドの父はコロナ禍の影響で三カ月も逢わないうちに顔のほおは痩せ、眼も窪んでしまっていた。それでも眠っているのか、穏やかな表情で目を閉じていた。

私たちが病室に入り父のベッドを取り囲むように集まった時、ざわつきで父の意識が戻ったようで顔と身体を少し動かそうとした。父は私達家族の訪問を感じ取ったようだが眼は閉じられたままであった。

姉が父の耳もとで、「とうさん、聞こえるか」と、続いて二人のひ孫が「ちっちゃいじいちゃん！大丈夫？」と声をかけた。父のあごが少し動いた。それから姉が「わかるか」と、話しかけながら掛け布団の下に手を差し入れて父の右手をぎゅっと握りしめた。

父はもう話せないようであった。しかし、その時、驚いたことに父は差し伸べた姉の手を何度も繰り返し強く握り返したのだ。それは明らかに父からの姉に対する言葉のないメッセージであった。

続いて私も姉と同じように父の手を握りしめた。ところが私に対しての父の手はだらりとしたままで無力であった。父の右手は私の握る力に対しては無反応であった。「なぜ私には握り返してくれないのだろうか？」。私に対する父のメッセージはなかった。

私にはこの父の無反応さが三十年近く同じ屋根の下で一緒に暮らしてきた家族に対する父の人生最後の抗いの姿に思えた。私はその時、数か月前までに自宅で繰り返し返された父との介護の日々を思い出していた。

晩年の父は日を追って認知症が進行していた。風呂場での失禁、食事が済んでからの再度の食事要求や深夜の独りでの間食などが続いたこと。私と妻がやさしくたしなめると黙ったこと。自分の失敗を素直に私達に知らせず隠そうとする父の行動などが思い出された。

久しぶりに家族が揃った病室での時間が静かに流れた。

穏やかに目をつぶって眠る年老いた父の顔が「自分はまだ大丈夫だから」と告げているように、私達を安堵させた。私達は顔を見合わせて「当分は大丈夫だな！」と、小さな声で言い交わして病院を後にした。

父が息をひきとったのはその日の夕刻で、私と長男が駆けつけて、すぐであった。

父が亡くなってから長男の私は年末年始を挟んで、数か月にわたり経験のない相続手続きや父の遺品の確認、整理に追われた。

雪が解け五月になったころ、事務的な処理に概ねめどがついたものの、私には気持ちの中にまだもやもや感が残っていた。父との意志疎通のない最後の別れ方が、何か落し物をしたようで私の心に引っかかっていた。それは父が自分の死をどう受け入れて逝ったのか？という私の知りたい疑問に重なっていた。

そんな気持ちを引きずりながら、少しづつ父の遺品に目を通していたある日、ずいぶん表紙が傷んだ一冊の文庫本が目にとまった。この小さな本が私の気持ちのもやもやを和らげてくれたのである。

『氷川清話』という勝海舟語録であった。

父はその本の中ほどページまで何度も繰り返し読んだであろう。手で押し付けられ、折れ目のくせがついていて、本を開くとすぐそのページが現れた。鉛筆で数か所にアンダーラインがされている。

『危機に際会して逃げられぬ場合と見たら、

死後半年も過ぎたころであった。

まず身命を捨ててかかった。しかして不思議にも一度も死ななかつた。ここに精神上の一大作用が存在するのだ。……おれもこの人間精神上の作用を悟りして、いつもまず勝敗の念を度外に置き、虚心坦懐、事変に処した。それで……難局に処して、綽々として余裕をもった」とある。

勝海舟が自身の波乱万丈の人生で、主観や客観を超えたさらに大きい深い境地（明鏡止水）を求めていたことが読み取れた。

父はこの『氷川清話』を日々読み続け、心の支えにしていたのであろう。

確かに父は晩年になってから幾度となく病氣と闘い、その都度乗り越えてきた。八十八歳で直腸癌のため二か月間の入院手術。九十二歳から九十六歳までの五年間、膀胱癌で八回の入院手術。この時は全身麻酔をされた。

そんな父が最後のベッドで私にみせた無反応な姿はこれまで幾度もあった死との戦い同様、今回も乗り越えてみせるという無言の気概の姿そのものだったと今の私には思える。

父は「世話になったと家族に伝えてほしい」との伝言を最後の入院で施設を出るときに残してくれていた。そのことを私が知ったのは父の

## 奨励賞 じいさんばあさん

仙北市 渡 辺 澄 子

ある秋の夜、台所の片づけを終え、そろそろ休もうかと寝室に向かった矢先に、窓ガラスが震えるほどの電話の響きが聞こえた。今頃誰だろう？ と受話器を取るといきなり、叫ぶような女の声飛び込んできた。

何を言っているのか解らない。とっさに間違え電話か詐欺かと疑ったが、丸出しの秋田弁で女の声だから詐欺ではないようだ。やはり間違え電話だろうと切ろうとしたら、

「なべさんの家だべ？」とようやく聞き取れた。

「主人は夜勤で……」と言うと「うんでねくと、どうやら私にかけてきたようだ。」

電話の主はMさんの奥さんだった。奥さんが何故私に？ と不思議に思ったのは、この奥さんとはあまり面識がなかったからだ。

Mさんは私たち夫婦がいた劇団を、若い頃に青年団で主催してくれた人で、劇団が秋田に定着した頃を良く知っていた。ここ神代地区に

引越してきた時、Mさんの家がすぐ近くにあることがわかり、馴染みのないご近所の中で、唯一お付き合いの出来る仲だった。

そのMさんが喉頭癌で入院してしまった。夫の代わりに病院に見舞いに行ったが、コロナ禍では家族一人以外の見舞いは出来ません、と言われてすぐごと帰ってきた。その時は、せめても夫と二人で手紙を書いて届けた。

Mさんが入院している留守に、今度は奥さんが転倒して松葉杖状態になってしまった。

夫は奥さんの食事を心配して得意の「肉じゃが」を作り、私が届けてあげた。その時初めて奥さんに会った。足が悪ければMさんの見舞いにも、買い物にも行けないだろうと思い、

「私は暇だから、いつでも病院行きや買い物の手伝いをするから、遠慮なく言ってくださいね」とそれだけ言って、その場を離れた。

それから数日後の電話だったのだ。何事が起ったのかと思わせるような電話だったが、奥さんはしばらく黙っていた。

「どうしたの？」と聞いても返事がない。沈黙は長く、電話の奥から微かな息づかいだけが聞こえてきた。

そのとき私は「助けて！」という奥さんの声

を聞いたような気がした。とっさに何でもいいから話そうと決め、

「Mさんって優しいね、母さんにも優しいでしょう」と問いかけた。「んだ！」それから亭主の自慢話のはじまった。

夜、一緒に見るテレビは演歌が多い。Mさんはそれに合わせて歌い、踊り出す。その振りがおかしくて笑っているとますます踊る。

「お父は病院から、早く帰りたい、帰りたいとそればかり言っている。よほどおれと居たいんだなあ」とのろける。

気が付くと一時間半がとうに過ぎていた。私は何時間でも付き合おうと決め、椅子を持ってきて座り直して話を聞いた。

Mさんは結婚直後から出稼ぎだった。東京、神奈川、鳥取、北海道、樺太近くまで行ったらしい。高度成長期の出稼ぎで仕事はいくらでもあった。少しでも日当の高い働き口を選んで転々と仕事場を変え夜勤も請け負った。

道路工事、鉄道の高架線工事、新駅のホーム造成工事。夜勤が一月も続く太陽に当たらず、顔が青白くなる。船の錆取りでは、ワイヤブラシが目当たり、手術をしたこともある。三代から七十年代後半までほとんど家には帰らず働

き通した。

七十歳を過ぎ、ようやく夫婦二人でゆっくり過ごせる日々が来た。その矢先のMさんの入院だ。奥さんは余程寂しかったのだろう。

長い、長い電話での会話が途切れると、満足したのか、

「だばな」と言つて奥さんからの電話は切れた。

Mさんが退院したある日、

「枝豆を収穫した。鞘をもうでくれたら、その分やるから来ないか」とMさんからの呼び出しがあった。

枝豆大好きな私は喜んでMさん宅に行き、三人で枝豆もぎをやった。するといきなり奥さんが、

「お父が病院から手紙をよこしてよ、『今度帰ったらお前を抱きしめる』と書いてあるんだもの」とカラカラと笑った。

私はふと、森鷗外の短編小説「ちいさんばあさん」を思い出した。

——江戸時代大番役の美濃部伊織という侍が、奥殿女中、るん、と結婚した。伊織は文武両道に優れ、将来を囑望されていた。るん、は良妻賢母の女性で二人の仲は頗るよかった。

ある日ひよんなことで伊織は人を殺め、役を解かれ、お預けの身となった。新婚四年目のことである。二人は別々の人生を歩むが、伊織七十二歳の時、「永のお役御免」になり二人は三十七年ぶりに再会した。るん、七十一歳の時である。

二人は小さな家を建て、ままごつのようなつましい生活を始める。散歩も寺参りも片時も離れない仲睦まじい様子は、近所の評判で、まるで新婚はやはやのようだと噂された——。

出稼ぎ続きで離れ離れだったMさん夫婦にとって、伊織夫婦のように、これからが新婚生活のようなものだ。

仲良くやってくれ！

私は二人の邪魔にならないように、摘んだ枝豆を抱きかかえて急いで家に帰った。

あの夜の電話は夢だったのか……夢にしておこう。

## 奨励賞 銀杏並木の画廊

横手市 春野昌和

青田の田んぼ道を通ると、白鷺や青鷺に出逢うことがある。一羽のときも番いのときもある。車を止めると直ぐ飛び立ってしまう。けれど、また近くの畦に舞い降りる。私はかつて、能舞台で観た演目「鷺舞」を思い出す。鷺は逃げるのではなく、眺めている私に舞姿を披露しているのでは、と思ってしまう。

一方で、川の浅瀬で何時間も立ち尽くして獲物を待ち続ける姿も見かける。川岸に近づいても飛び立つ様子を見せない。多分、私の気配には疾うに気付いているはずだ。川の中は身の安全なことを知っているのか、微動だにしないその立ち姿に私は影法師を思う。

鷺は路と鳥と綴る。古来、人間の環境に馴染んできた鳥なのだろう。紙ヒコーキのような細い体も美しいが、頭の毛立ちに野生の息吹きを感じる。あの毛立ちが舞い降りる田んぼや川面を選ぶアンテナであるかのような。それゆえ、鷺にとって舞い降りる地点は特別な意味を持つ

のかも、と私は思ったりする。

穂ばらみ前の稲田に一羽の白鷺が舞い降りたのを私は久しぶりに目にした。国道三四二号線は横手市十文字町が起点で、JR奥羽本線の跨線橋から県境の山々と山峽が広く見渡せる。橋を下ると直ぐ道の両側の銀杏並木に入る。二〇〇メートル足らずであつという間に通過する。白鷺が舞い降りた稲田は道の西側の銀杏並木の近くにあつた。白鷺が並木の近くに降りたために私は銀杏並木に関心を抱くようになった。以前は秋の黄金色に目を奪われても、あとは眼中に無かつた。跨線橋の景色の雄大さで銀杏並木はかすんでいたのだ。

白鷺を目にしたその日、私は国道の東側の銀杏並木に沿うコンビニでアイスコーヒーを飲んでた。銀杏の木陰に西向きに駐車していた。陽は照りつけて蒸し暑く、近くの里山は霧がかつていた。

車のフロントガラス越しに白く動くものが見えた。白鷺だった。西側の並木に見え隠れしながら稲田の中に舞い降りて姿を消した。

再び飛び立つかと、白鷺が舞い降りた地点を注視していて、私ははっとした。その稲田の手

前の背丈ほどに生えた雑草地の中に、朽ちた木像や白い石像が立っているのが垣間見えるではないか。

私は思い出した。と同時に、忘れっぽくて散漫な注意力、そして、熱して冷め易い、そんな自分の性を恥じ入った。

その雑草地は農民彫刻家の皆川嘉左エ門さんが減反田に彫刻作品を展示した場所だった。

何年前のことだったか。展示した当初、私は作品のそれぞれを間近で鑑賞したことはなかったが、皆川さんの斬新な作品展示に感服した。

その頃は減反制度が厳しかった。皆川さんは減反田に稲以外の作物を植える代りに、彫像を配置したのだった。

顧みると、車窓から眺める彫像の建つ減反田には季節ごとの花が咲き誇っていて、その花園の西の彼方に鳥海山が望まれたかと思う。見えた記憶があるのに不確かなのは、今、鳥海山が霧がかつて見えないからなのだ。私は当時の彫像が展示された花園を心の中で絵に再現してみたかった。そのためには鳥海山が欠かせないのだ。こんな心境になったのは、白鷺が減反田の近くに舞い降りたためである。明日、西空が晴天ならば鳥海山は多分、見える。しかし、今の

今、絵が欲しい。私はコンビニの女店員さんに尋ねて、彼女の回答で心の中の絵を描くことにした。女店員さんなら毎日、西の空も見遣っているはずだから。

「あそこの減反画廊の向こうに鳥海山は聳えていますよ」

私の記憶は生きていた。減反画廊と聞いて現場を見たい衝動にも駆られてしまった。国道を横切つて雑草に覆われた減反田に近づくと、タン板にペンキで書かれた案内板が立っていた。

『減反田を利用した、景観作物としてレンゲ草、菜の花、コスモス、ヒマワリなど植えております。その中に年間をとうして有効利用するため、減反画廊として彫刻を展示しております。ご自由に御観覧、御鑑賞ください。（入場無料）農民彫刻家・日彫会会員・皆川嘉左エ門』

力強い書体だった。皆川さん御自身が書いたのだろう。（入場無料）、に皆川さんの笑顔を思い浮かべた。私もにんまりした。

私は背丈ほどの雑草の減反画廊の中を彫像を探し歩いた。九割方が石像で、びくともしない置き方だった。皆川さんの彫刻の真価は木彫像

に表われていると私は思う。あえて石像を配置したのは、勿論、朽ちる心配のない配慮だろうが、稲を育てる水田に石像を置いたという意志が、減反制度に対する農民としての怒りそのものだったのではなからうか。

銀杏並木は東側は高くて太い。減反画廊側の並木は低くて細い。減反画廊が出現した当時は画廊側には並木は無かった気がする。画廊が出来てから植えたのだろう。さらに、銀杏並木が尽きた国道の先には、東側だけに背の低い桂並木が続く。何故、画廊の近くにだけ短い距離の銀杏並木があるのか。銀杏の若木は成長が早いと聞く。あるいは、東西の銀杏並木とも画廊が出現してから植生されたのではないだろうか。

その銀杏並木の謎は、国道維持事務所に尋ねると直ぐ分かることだ。しかし、問うのは止めよう。私の心の中の絵には銀杏並木は無いのだから。皆川さんが御逝去されて減反画廊は叢木化したのが、再び花園に蘇るはずだ。今度は銀杏並木のプロムナードの画廊として。

先日、横手市の平鹿総合病院のロビーの椅子で休憩するために窓際に行った。ふと脇見をして、一瞬ギョツとした。木彫りの爺様像が微動だにしないで私を凝視していた。皆川さんの木

彫像だった。動かないのに生きている。何ということだ。椅子で思いに耽った。その気配は土の匂い、減反田の風のような。私は川の中に立つ鷺の姿に思いを馳せた。

# 最優秀賞受賞のしとじば

## 記憶の底から

短歌部門 加藤 一 弥

平成二十九年（二〇一七）七月に雄物川流域にもたらした豪雨の被害は、私が五歳まで過ごした川端の小さな細長い集落にも大きな爪痕を残し、集団移転を一気に加速させた。

昭和十九年に父がトラック島で戦死、母は二十四歳の若さで三人の子供を抱え隣村の生家に戻った時の事や、高校通学の為に三年間通った集落に複雑な思いもありました。

廃墟と化した跡地を眺めるたびに、どうしても心に留めておきたい気持ちが強くなると共に、移転先のコミュニティや永年にわたって育んできた絆の行方にも気にかかることがあります。

師を持たない初心者の臆面もない投句に大きな賞をいただき大変光栄に存じております。

三年前に九十八歳の人生を閉じた母に捧げ思いを共有したいと思います。

## 受賞に当たって

俳句部門 石郷岡 由 紀

俳句部門最優秀賞受賞という身に余る光栄に、大変驚いております。

私は現在、俳誌「石路」に所属して学んでおり、荻原都美子先生のご指導を受けております。受賞は、先生のご指導の賜物です。

宝蔵寺のことは「秋田県の歴史散歩」という本で知りました。神宮寺にある曹洞宗の古刹で、境内には樹齢六百年以上といわれる大欒と、天保の飢饉の供養碑があります。

以前、盛岡で飢饉供養仏を目にした折、纏まとわるものを表現したい思いがありました。そのこともあり、今回の主題といたしました。

厳しい時代があったことを、大欒と供養碑が語りかけてくるようです。

最後になりましたが、この度選にあたってくださいました先生方に、心より感謝申し上げます。

## 再起動へ

川柳部門 佐藤 啓 子

学生時代はソフトテニス部の練習に明け暮れていた自分でしたが、元々はインドア派。30歳を目前にひよいとしたきっかけて川柳という文芸の創作活動に魅せられ、今では生活の一部に五七五があります。

多読多作を目標に掲げつつも、なかなか殻を破った佳句を詠めない日々が折れる時もあります。志だけはぶれずに前を向いてきました。

この度の最優秀賞の栄誉の重みにこれから堪えていけるか心配ですが、還暦の節目の年にまた再起動へのエールをいただいたと受け止め、人としても精進し続けたいと思います。推していただきました先生方には、心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

## ペンと紙、そして辞書

エッセイ部門 小松紀子

この度私の拙い作文が、思い掛け無い賞を頂戴し、感激に浸っております。

「詩の国秋田」と歌われる美しい里での暮らしの中で、ふと短歌を詠みたくなり、修飾を削ぎ落として川柳に表現するのも好きです。そして短詩文芸では言い尽くせない思いが膨らむときは、詩や散文を書きたくありません。

エッセイも文芸なので、日本語の豊富な語彙を駆使して豊かな文章にしたいのですが、我が老いの頭からは言葉がどんどん失せてゆき、辞書を傍らに置いての創作活動です。美しい自然と愛する人々の人間模様に触れたとき、私はペンと紙でひとり遊びを続けることでしょう。

県文化振興課の担当の皆様、選者の先生方の御尽力に感謝致します。そしてこの夏、それぞれの思いを抱いて原稿用紙に向かった同好同志の皆様、また文芸に親しみましょう。

## 選評

### 小説・評論



#### 小説の「面白」

渡辺 修

今回の応募は十四作品(すべて小説)と、審査を担当したこの三年間で最も多く、また力作が多かった。

小説にとって何が大切か——さまざまな意見があるだろうが、私は「読んで面白いこと」だと考えている。

「何を当たり前のことを」と言われそうだが、書き手にとってはそれこそが難題なのだ。読者を置き去りにして自分だけが面白がっている、誰も読んでくれないからだ。

奨励賞の「東禍流」は、面白さもさることな

がら、語り口の心地よさに感心させられた。

農家の若い嫁の素直でのんびりとした性格が人間から滲み出ており、平和な農村の日常が目に浮かぶようだ。さらにお茶目な「ばばちゃん」の可愛らしさが、安治のやや暗い物語から読者の心を救っている。

約百年前と現代を巧みに繋げながら、変わったものと変わらないものを描き、コロナ禍に着地させた構成も見事であった。

細かなところまでよく調べていることも指摘しておきたい。

入賞の「雪ん子」ノート」は、小説としての面白さでは「東禍流」に勝ると感じた。

主人公は環境破壊に関心を示しつつも農業を礼賛して憚らない。厳しい農業の現実を示しながら、地に足のついた農民の強さやしたたかさ、誇りがしっかりと描かれている。

物語は田舎の農協の理事選挙をめぐる騒動が中心となるが、コップの中の争いの醜さを自嘲しつつ、主人公もまた買収に走る。狭い社会の呪縛から脱しきれないのが面白い。

彼は最後に意地を見せ、その結果が追伸として語られるが、読後感は爽やかであった。

子が独立した熟年夫婦の交流も上手く描かれ

ており、妻の可愛らしさが印象に残った。

「進路は北方へ」「虹の名残り」→大文字の見えるまちに」の二作は、事前の審査では「雪ん子」ノート」と同点であった。

「進路は北方へ」は、作者の体験が反映しているのだろうか、昭和四十年前後の時代感がとてもよく描けていることを評価したい。

「虹の名残り」は、高齢化で静かに崩壊していく地域社会が切なく心にしみた。作品の柱となる物語性が弱いのが残念である。

「詐欺泥棒」「瘡蓋」「温故くまこちゃん叔母さんのこと」の三作も一定の水準に達していた。次回の作品に期待したい。

「忍者猫ボルシェ・チーコ・カムイ ファンタジー第一話」「モンスター・ショック」「初夏」「心に太陽を持って」「心の山『安達太良山』」「君が残してくれた大切なもの」の六作は、作者の描きたいことに、まだ文章力が追いついていない。

読みやすい文章、適切な表現力をつけるには、できるだけ多くの作品を書き、批評を受けるしかない。地道な活動をしている文芸サークルはいくつも存在するので、そのような場で勉強してみてもどうだろうか。

最後に、グリーン賞の「星のない夜空」について触れたい。

中学時代に憧れていた同級生と再会し、告白をして付き合うことになる女子大生の物語だ。

憧れの相手はつまらない男であることが明確に示されているが、主人公はそこから目を背けてしまう。それは女友達に対する意地や焦りに過ぎない。それだけのために大切なものを簡単に投げ打ってしまう主人公の行動に、読んでいる側はどうにもやるせなくなる。

生々しいリアリティがあるが、正直に言って読後感が悪い。毒（心の闇）に執着したまま終わらせるのではなく、前を向いていくような展開にしたなら、全く違った作品になったのではないかと感じた。



## 語りの おもしろさ

大原 かおり

今年度の応募作品はバリエーション豊富で読み応えのある作品が多く、興味深く楽しく読ませてもらった。入賞作品数に限りがあるのが残念に思うほどだった。

念に思うほどだった。

奨励賞受賞作品の「東禍流」は、作品の所々にその地に生きる人々の知恵や習俗が語られるが、わざとらしくなく、語りの中に自然と溶け込んでいた。それは語り手がその年に嫁入りしたばかりの孫の嫁で、鳥海山の麓に住む人々の生活を興味関心をもって語っているからだろう。これが額縁となつて、物語の中心となる「ツカルさま」の伝承と「安治」を巡る逸話を「ばばちゃん」が語るという構造をとる。まるで自分が「見てきたよう」に語るというこの老女は、喜々として伝承を語る。嫁が素直に聞き入ってくれるのをいいことに話を脚色しているかもしれない、そのような疑いが、かえってツカルさまの伝承に虚構としての安定性をもたらしているように思えた。最後の総括では、ばばちゃんの語る虚構に現在を照らし合わせて昇華させる嫁の語り手としての優秀さに感心させられた。

入選作品「『雪ん子』ノート」は、横手が舞台。イーハトーブのそばならではの妖精の息吹が感じられる始まりだった。自称「小説家もどき」の主人公が一念発起して農協理事に立候補するも徒労に終わる話だ。妖怪もどきの役員や

候補者が跋扈するなかで人間らしさを地でいく主人公の奮闘を雪ん子は見守ってくれただろうか、そう思わせる読後感だった。

グリーン賞受賞作品「星のない夜空」は、温めてきた初恋が現実ほど遠いものになっていることに気づきながらも、あえて貫徹させようとする女子大学生が主人公。学生生活の一方で、地元に住む認知症が進む祖母、パートで家計を支え、自分に苦勞を分かたず家族としての役割を期待する母の存在が重くのしかかる。ままたらない現実から目を背けたい気持ちだが、初恋への執着により拍車をかけ、冴えない男に成長した幹太のことを冷静に捉える目を曇らせる。初恋とはそのようなものと思いながら、娘が背負いがちな母の呪縛（母親にそのつもりはないだろうが）を描くリアルに共感させられた。

東京オリンピックや疫病が話題に登場する話者が何作かあったのは今年度ならではといえる。作者の世代によるのだが、前回の東京オリンピックに向かう賑わいのもとに繰り広げられる物語は若者が主人公、コロナ禍の今は高齢者が中心となる。ただ、国を挙げてのお祭りも貧しい青年にとってはどこか遠いところにあり、世界的な疫病の脅威よりも目の前で進行している

高齢化の方が身に迫るのも秋田らしさの表れではないだろうか。

ご当地の味覚が登場するのならではだ。香りや味の見事な描写は、こちらの思い出も蘇らせる。共有する喜びもまたふるさとの文芸の楽しみの一つだ。

語り手が多弁に過ぎると物語の理解が阻まれる。とっておきのモチーフをよい塩梅で語ってもらえるとより驚きをもって楽しく作品を味わうことができる。

特に若い作者による「君が残してくれた大切なもの」は対話形式を取っていても、自問自答の域を出ない感が否めなかった。思い悩み、きつかけを得て立ち直ったり、折り合いをつける境地にたどり着いたりする姿を描く物語はたくさんある。特に十代のヤングアダルト世代に向けた児童文学作品は丁寧に寄り添うように語ってくれる。それから表記表現の基礎をはじめ、心の中に渦巻くものの表現方法を学んで、ぜひ今向き合うそのモヤモヤを他者と共有する術を身につけてほしい。

単純におもしろいと思わせてくれる作品は、設定の違和感や語りの不自然さで現世に引き戻すことなく最後まで作品世界に浸らせてくれる

ものだと〇〇もどきの読者は改めて思う。



## 「読ませる」 作品の創造

山崎 義光

今年度は一〇代から八〇代までの方々から応募がありました。応募が二回目以上という方が多くいらっしやるということです。いずれの応募作からも、書くことが楽しいのだろうと感じました。経験したこと聞いたことに題材を求め、場面や状況のなかに、登場人物がその時感じた、感じるであろうことを言葉にすること。あるいは、全くの想像で創り出した特徴的な人物、キャラクターが、どんなふうに見えるかという点。どの作品も、想像が言葉による創造に結びついていく、書くことの楽しさを感じながら書かれているように思いました。これからも続けて応募してもらいたいと思います。

ただ作品であるからには「読ませる」だけの表現たりえているかということが求められず。読み手に共感や興味をもたらすばかりでな

く、人物像や相互関係、場所や出来事との関係を表現することが、読み手にハッとさせるユニークな創造にまで届くかどうか、難しいけれども「読ませる」ポイントです。

受賞作「東禍流（つかる）」は、鳥海山の見える町に嫁いだ女性の「私」が、夫の祖母「ばちゃん」や家族から「ツカルさま」の習俗を聞くことから始まります。風土や歴史と結びついた習俗にまつわる物語が、現在と過去を往還して緊密につながって物語られています。「ツカルさま」がやってくる日には、日没後は外へ出てはならないという習俗。この習俗の由来となったこの地の風土と暮らしの結びつき。そして、この習俗を利用して起こった事件と、ばちゃんのお父の話へと物語られます。最後には、お寺に残された記録から一〇〇年前に亡くなった人たちが多かった歴史とも結びついていきます。風土と人、家族や集落、集落と習俗のつながり。そして変化する社会との関わりの中で生きた人々の姿を、ばちゃんが「私」に語り、「私」がこの地の、家族の歴史に目を開かれていく成り行きがとても緊密に描かれていると思いました。おそらく、書くにあたって、描こうとした地域のことや歴史などをよく調べて準備

されたと思います。しかも、そうした知識を「ばばちゃん」の語りの中に折り込みながら書けたことで活きた物語になったと思います。

入賞からは洩れましたが、「進路は北方へ」も、一九六〇年代の東京オリンピックの頃を舞台に、主人公が、東京の郊外で新聞少年として暮らす様子と、自分の進路を考え劇団に身を投じることを決断していく姿を、生き生きと描いていました。

受賞作「「雪ん子」ノート」は、横手盆地で農業を営んできた「私」が、農協理事選挙に出るエピソードを通じて、組織集団の中の人物たちとの関係で描かれていました。「私」は、出世欲もあれば、公明さも持っています。ただの悪人でも善人でもなく、清濁あわせのんで農業と向き合い、溜息をつきながらも日々を暮らす固有の「私」がよく描けていると思いました。「心に太陽を持って」「詐欺泥棒」なども、人物の固有性特異性を描いていました。主となる人物の固有性を、背景や出来事、他の登場人物との関係でどう浮き彫りにするか。単にキャラクターを特徴づけるだけではなく、周囲の世界や人物たちとの展開の中でどう描くかという点が大事だと思います。「私」を中心に描く場合

でも、「私」と関係する他者を、「私」との異質性を含めて描き分けること、「私」を多角的に描くことに難しさがあると思います。「初夏」「君が残してくれた大切なもの」そしてグリーン賞の「星のない夜空」などは、恋愛を題材に「私」と「君」や「彼女」との関係を描いていました。「私」がどう思っているかについてだけでなく、「私」とは異質な他者の固有性を、ロマンチックな定型におちいらずに、どこまで書けるかが工夫のしどころだと思います。

## 詩



### 言葉と闘う、 言葉で闘う

堀江 沙オリ

この災厄下で、私たち日本人はあくまでも従順だ。言われた事を黙々と行い、疑問を持たず、もやもやしても大きな流れに逆らわない。あちこちに開いた穴を埋めもせず、掘り下げも

せずに生きている。

そんな現在の中では、言葉の力など小さいかもしれない。それでも言葉を使って考え、産み出し、闘わねばならない。邪魔にされても言葉こそがもやもやを突き抜け、壊し、再び何かを作り出せるからだ。地球規模の災厄の中では、言葉はどうしてもこじんまりとまとまりがちになる。それではいけないと、詩作に苦しみ自分に向けて、そして全ての表現者に向けて強く言いたい。

さて、今回は突き抜けた作品も、苛立たせる作品も少なかった。大きな状況の中で戸惑い続けている表現者の苦しみが見ええた。それでもエネルギーを感じる若い作品と、客観的に今を見据える大人の作品が存在した。言葉は武器になり、糧になる。現代詩という扱いにくい分野を武器に、糧に出来れば達成感も大きい。毎年選評に同じことを記す様だが、書き続けて欲しいと切に願っている。

最優秀賞は無し。奨励賞、入選、グリーン賞いずれも順不同。

〔奨励賞〕 『種を蒔く』 言葉の無駄がない。種蒔きの表現に静かな緊迫感。書き続けている人の円熟を見た。

『夜明け前』 傷ついた人にとって励ましは残酷にもなる。若い人はそれを知っている。素直だがとても深い。

『ノー・タイトル』 詩作に対する思いの深さが嬉しい。言葉の選び方が的確で構成員もある。詩を書く事に行き詰まった時、ここに立ち返らなければならないと思う。

『フィクションが救い得る世界について』 コロナ禍という単語を使わずに、見事に現代の状況と、その中に生きる作者の心情を表現した。

独自性が際立つ。この2・5次元の世界を観てみたい。前半の語句の繋がり方にもう一步の推敲を。

『人生の栄養』 リズム感があり、どう展開して行くのかを楽しめる。終連のまとめ方が巧み。

〈入選〉 『秋を奏でる』 冒頭の比喻から、書き続けて来た円熟の言葉の技術の高さが伺える。構成員も高い。「東京に上京」は惜しい。

『ホテルの最上階で』 良質の短編小説を読むような作品。硬質な言語は持ち味であろう。終連が巧い。展開が変わる前の一行空け、思い切りの良い削除も必要。欲を言えば「K君」像の具

体性が欲しかった。

『リヤカー』 素直、素朴な中に光景と人柄が見える。細かい言葉の用い方、少々ありがちな表現は、書き続け、推敲して行く毎に研ぎ澄まされると信じていたい。

〈グリーン賞〉 『僕の生きる世界で』 瑞々しい感情が世界や地球への思いにまで広がって行く。若く深い思念と、構成員。句読点は無くて良い。

『思いつく』 「たくさんのおちづけなもの」が鮮やかに立ち上がる。切り取った情景が息づいている。確かにそうだと大人の自分が言っている。

『聖火の音』 リズムと躍動感がある。聖火の「音」という注目が新鮮。

『待つ者』 もどかしい愛情は想像か体験か。敢えて「待つ」でなく「待つ」にした理由が知りたい。

『お気に入り』 愛らしい想像の詩。終連の先の一步の思いと表現を期待する。

めりはりの無い世の流れは、「無常」で「無情」かも知れないが、そこに留まってはいけない。そんな願いからか、上位選考作品には若い詩が多かった。この先どんな世の中になって

も、それだからこそ詩から離れず、しぶとく闘ってほしいものである。

（「北五星」「左庭」所属）



### 選考寸感

佐々木 久春

残念ながら本年も最優秀の該当作品は無かった。奨励賞は五篇、入選三篇という結果であった。

奨励賞「種を蒔く」は、まず播種の様子を描きその心理を「人生」にたとえていく。愛憎、悲哀の種は態度も時に荒く、時に性急になる。結びの六行が良い。「はんせいしなくともよい、もしいまわの際にできれば幸せか」というのである。人生の諸相、生に徹した作者の姿が印象的に映し出されている。

同じく奨励賞「夜明け前」は「わたし」と「あのこ」の究極の態度と情感が細やかに描かれている。

奨励賞「ノー・タイトル」作者の詩作の意義

をいろいろな角度から捉えて読者に考えさせ  
る。

奨励賞「フィクションが救い得る世界について」も詩作の意義をうたうが、作中の「ヒーロー」という言葉にメディアの影がちらつく。

奨励賞「人生の栄養」は生きてゆく人間の感情をいろいろな「雨」にたとえて面白い。

次いで入賞の三作品「秋を奏でる」は、故郷の山河に季節を見つめ、「ホテルの最上階で」は、ホテルの最上階から今身動きできず故郷を思っている。「リヤカー」は、母のリヤカーをひく姿を通して故郷をしのんでいる。いずれも豊かな描写力が見られる。

グリーン賞受賞者の生き生きした描写には大いにひかれた。ただ最近の若い人々の作品に散見するJ・ポップ風なリテラシーがうかがわれるのは僂見だろうか。

\* \*

これは去年の選評でも書いた事だが、われわれ人間はなぜ詩を書き、どうしてその行為を必要とするのか。書きたいから書くのだという答えはしばらくおいて、やはり行為を自覚することは現代詩にとって必須のことだろう。自分一人だけで酔ってはおれない。まとまったつもり

で乾杯するのは滑稽だ。むしろまとまりを避けたい、なにか破天荒なことを自身に呼び込みたい。軽妙さを否定するわけではないが、何かずっしりした重さが欲しい。それを来年の応募作品の中に求めつつ、自らも精進してゆきたいと願っている。

詩同人「北五星」主宰、秋田県現代詩人協会・日本現代詩人会会員、日本詩人クラブ名誉会員、秋田大学名誉教授



## 尊い文学

成田豊人

平林敏彦という今年九十七歳になる超高齢詩人がいる。最近もエッセイ集『言葉たちに』を刊行している。その中で「私は戦争を体験したが、その時代を忘れない為に詩を書くのだ」という旨を書いている。けだし卓見だと思う。またある雑誌に誰かが、詩はビジネスから最も遠い文学である故に尊いのだと書いてあった。至言である。そういう詩に真摯に取り組み応募された皆様に敬意を表したい。

奨励賞 種を蒔く

前半二連は種蒔きと土壌の維持・管理の様子が小気味よく描かれる。三連目では種蒔きの如く人生をゆっくり送り、反省を必要としない時を希求する、という真摯な人生観。「そういう」が三度も使用され再考の要がある。

奨励賞 夜明け前

一連〜三連まで構成がほぼ同じパターンなので、相手の苦しみや悲しみを和らげる「だじょうぶ」と「ここにいるね（よ）」が説得力を帯びる。その言葉は自分が寂しい時にも救ってくれる。最終連がやや凡庸で残念。

奨励賞 ノー・タイトル

詩を書く意義を真摯に突き詰め、その答えを自ら出している事は評価したい。同じ内容の連が散見し説明的過ぎる箇所も見られ、全体的にもう少しスリムであっても良かったのではないか。題名ももう一工夫が必要。

奨励賞 フィクションが救い得る世界について

一〜二連目で大人になり切れない苛立ちの日々を描き、それを救ってくれるのが映画のヒーローだと展開する。実在ではない偶像が救いであるという現実認識は、いかにも現代の反映かもしれないが真の解決なのだろうか。

## 奨励賞 人生の栄養

五連構成で各連の一行目に「天気雨」「積雨」「風雨」「時雨」「甘雨」をそれぞれ配し、それに対応した内容となっているのは見事。日常生活における喜怒哀楽を含む経験を、最終連で「確かな栄養」とまとめたが少し説明的。

入選 秋を奏でる

秋に成田為三の記念館を訪れ「浜辺の歌変奏曲」を堪能する。三連目の曲から受けるイメーヂの表現は、前向きで力強さを感じさせる。一連目の比喩はもう少し推敲の必要がある。

入選 ホテルの最上階で

コロナ禍をモチーフにとてもリズム良く情景が描かれる。さらに青春時代の思い出も手際良く客観的に描写され、人生の儂さを強調する。最後の二連が説明に終わったのが残念。

入選 リヤカー

リヤカーで野菜の行商をしながら生活を支えた母への賛歌であるが、情に溺れず方言も交えた暖か味を加えながら、母の労苦を描いている。町の奥様の描き方が少し図式的である。

グリーン賞 聖火の音

聖火の炎でも煙でもなく音に注目した点が独

創的。一〜二連の各語尾の「た」の繰り返しで、聖火を迎えた喜びや興奮が力強く伝わって来る。最終連はもう一工夫欲しい。

グリーン賞 僕の生きる世界で

人間の営みとは無関係に地球は回り続けるという現実は無常感も感じているが、明日への希望も失っていない点に好感が持てる。後半は同じ内容の繰り返しもあり整理が必要。

グリーン賞 待ツ者

どういう理由で「待ツ者」となったのか色々推測できる。「今日も貴方を待ツ」の繰り返しによって、欠落感が強く伝わって来る。なぜ「待ツ」ではなく「待ツ」なのだろうか。

グリーン賞 お気に入り

最終連の「みんな」を印象付ける為に、一連から六連までの各主語をそれぞれ、「私は」「ぼくは」「あたしは」「おいらは」「わしは」「我々は」と書き分けた点が印象的である。

グリーン賞 思い出

様々な思い出があるにもかかわらず、いざ思いう出すとなると「ちっぽけなことばかりだ」と悩む。大人になる時に取るに足らない事を多く抱えているのでは、という不安が伝わる。

\*詩誌「komayumi」同人

\*秋田県現代詩人協会会員・日本現代詩人会員

## 短歌

### 選歌寸評



打矢京子

最優秀賞 「集団移転」

○水漬く田をはいずり廻る母ありて戦死公報受けし集落

○盤石の土台を残す屋敷跡一つ一つに父祖の魂あり

いく度も洪水にあったふるさと。ついに高台へ集団移転をせざるを得なくなったふるさとへの思いが非常によく表現されている。水漬く田をはいずり廻るようにして農作業をした母上が肉親の戦死公報を受けたのだろう。最初の歌は強く心に残る作品であった。次の作品は洪水にあい敵しい農業を強いられた父祖たちへの労り

と尊敬の念がある。

奨励賞 「赤の他人」

○その小指わたしにちょうだい赤い糸結んでわたしと繋ぐからほら

ゆれ動く恋愛感情のなかでこの一首は積極的な部分が詠われた。しかし他の作品は迷いの部分もよく詠われている。題の「赤の他人」はあえて客観的な見方をしたのだろうか。アイロニーのある言葉である。

奨励賞 「農にいそしむ」

○われの身と共に老いゆくトラクター心をこめて泥を洗えり

作者は高齢のようである。日頃使用しているトラクターへも労りの心がありその生きる姿勢に共感した。作品全体を見ても作物の生きる力を直に感じつつ汗を流して働く様子が感動的である。

奨励賞 「おかげに生かさる」

○奇跡にも必死の救助を被りておかげに生きるさる雪の底より

落雪の山の中から九死に一生を得た生々しい体験の作品である。作者にとって本当に奇跡の出来事であつたらう。「おかげに生かさる」感謝の思いが集約された。

入選 「背戸の栗の木」

○年輪を百余り数へ腰下ろし栗の取り持つ絆を思ふ

年輪百余りの栗は作者の親の代からのものであろう。下句「栗の取り持つ絆」はどういうものか想像がひろがる。きつとおすそ分けなど暖かい人の交流があつたのであろう。

入選 「忘れえぬシーン」

○ベッドから海想ふ子は人魚姫に生れ変はりの夢を託せり

重い病になつてしまつた子供が詠われている。ベッドから離れることの出来ない子供が生まれ変わったら人魚姫になりたいという。せつない夢に胸がしめつけられるようだ。

入選 「母の引越し」

○おしゃれめの服を選びて施設での暮らし楽しむ母頼もしき

一人暮らしをしていた高齢の母上が施設に入所し、その様子がよく活写された。作者のいろいろな心配に反して、おしゃれをしていた母上への安堵感がほほえましい。

入選 「集落の山 大丹波」

○こう茸とう高価な茸の生える場所我が老いたれば子に教えたり

こう茸は香茸とも表記され、乾くと香りがよく食用として珍重される。集落の山大丹波の四季の恵みに感謝しながら生きる作者。下句には老いの実感が滲む。

入選 「父祖の地に生き傳り継ぎ、本海獅子舞番楽の伝統を伝える、13 郷村を訪ねて——」

○鳥海の『夜明かし番楽祭り』の夜の東嶺に光る丸ごとの月

鳥海には夜明かし番楽祭りがあるという。東嶺は鳥海山の東嶺なのだろうか。月夜の番楽祭りを見てみたいと思った。

短歌の清書は原稿用紙の一番上から書き一行目が終わったら二行目の一番上から書くことが基本。まずは基本に添って清書した方が良いと選考委員全員の意見であつた。誤字脱字も完成度が欠けるので残念であつた。ただ応募作品には心打つものも多かつたと思う。

(「運河」同人・日本歌人クラブ会員)

秋田県歌人懇話会会員)

## 選歌短評



福岡 勢子

最優秀賞 「集団移転」

○水漬く田をはいずり廻る母ありて戦死公報受けし集落

○死に代り生れ代りを重ねつつしがみつきたる田畑見渡す

○高台に集団移転の二十余戸うぶすながみに心託して

洪水にたびたび襲われ、集団移転を余儀なくされた集落の歴史を見つめながら、主観を入れず詠んでいる。昨今自然災害が多発しており今日的な詠草であった。一首目、戦中の母たちの姿が浮かぶ。二首目父祖伝来の田畑を守り切れなかつた苦さが出ている。三首目無事高台に移転を終え諸々への感謝の念を滲ませている。

奨励賞1 赤の他人

○今回の応募作の中で異色の作で、魅力的。待ち合わせしていないのに待っているみたいな恋だよいっそ笑って

○その小指わたしにちょうだい赤い糸結んでわ

たしと繋ぐからほら

○関係に名前はなくてきつとそれを望めば切るほどのつながり

片思いと見受けられる恋を口語で、大胆に詠んでいる。三首目の関係から「赤の他人」という題を採ったのだろう。切なさを歯切れのよいテンポで詠いとても引き付けられた。若い人の作品であろう。これからも辞めずに短歌を続けて欲しい。このような感性を秋田の短歌会に欲しい。

奨励賞2 農にいそむ

全体的に自分の目で見、体で感じたことを自分の言葉で詠っていて引きつけられた。

○トラクターゆっくり耕土ほり返し小鳥さえずる春も呑みゆく

○われの身と共に老いゆくトラクター心をこめて泥を洗えり

○汗に濡れ泥田の雑草ぬきとればほころぶ稲の輝きの見ゆ

三首とも結句の具象が、作品を光らせている。

奨励賞3 おかげに生かさる

屋根雪の落下で生理めになり「九死に一生」を得た人の作品である。今年秋田県は県南が豪

雪であった。例年除雪や屋根の雪下ろしなどで死者の出る県でもある。

○助けてと叫ぶわが声雪に埋れ帰る子判るやわれの立つ位置

日頃の息子さんとの絆の強さの感じられる作品である。

○落雪の山に誰もがわれの死を確信せしませろくれしか

○奇跡にも必死の救助を被りておかげに生かされる雪の底より

救助に奔走してくれた地域の皆さんへの感謝が出ています。

入選1 背戸の栗の木

○遠く住む息子にさらり告げ終活の始めに背戸の栗の木を伐る

後顧に憂いを残さず一生を終えたいという思いに栗の伐採を決めた心情が出ている。

入選2 忘れえぬシーン

○背にすがる少女のいのち支へつつ水平線に目を凝らす医師

少女のまま亡くなった娘さんを思う作品であった。詩として昇華していた。

入選3 母の引越し

○おしゃれめの服を選びて施設での暮らし楽し

む母頼もしき

施設入所時の親子の気持ちを明るく詠んでいる。

入選4 集落の山 大丹波

○老いたなあミズ採りに行きつまずきて転げ瘦せももしたたかに打つ

地域の山の恵みを満喫している作品である。

入選5 父祖の地に生き傳り継ぎ、本海獅子舞番楽の伝統を伝える、13郷村を訪ねて――

長い題名であった。家族で番楽の伝統を守っている様子が伝わってくる。

短歌結社「好日」編集委員。日本歌人クラブ会員。県歌人懇話会理事



伊藤 寛雄

## 短歌は今の「証」

「暑いぜ」とグダグダしていた九月初旬。ドサツと届いた五十五連の短歌を読み始めました。一人一人の詠う故郷・家族・伝統行事などの「思い」に圧倒され汗もひきます。しかし阿呆な自分が「一首だといけれど七首のつながり

がないなあ」「誤字があるぞ」「語順を変えたら良くなるかもしれないね」などツツコミを入れて読むのです。何をやってんだ。これでは短歌は楽しくないと自己嫌悪になります。応募作品の豊かな世界を読み取らなくてはいかんなんと二回三回四回と「読み込み」に没入。

そして秋のある日、審査委員三人が集い入賞者を決めました。入賞者の方々の歌や選評は『秋田の文芸集』に紹介されるはずなのでここには紹介されない歌を何首か取り上げて鑑賞しましょう。詠み人の想いと鑑賞人との違いが短歌の深さだと思います。

○倒れたる夫をベッドに運ぶとき子は大声で「おやぢ」と叫ぶ

癌に罹患し他界された父上の看護を詠った一連。家族の関係の濃密さが伝わります。

○広き田をあつというまに刈り終えしコンバインゆく干拓大地

半世紀以上前、八郎潟は干拓されました。その後の干拓大地の生活を詠う短歌に共感。

○手を引きて鮎玉買って分けあってカギツ子二人のまあるき日々よ

ギターを愛した弟さんは若くして逝去。彼との思い出を今につなげる歌にウルッと。

○コロナ禍に面会叶はぬふるさとの母の訃報がにはかに届く

コロナ禍は家族の「普通」を奪い故郷は遙か遠くへ。コロナ禍の現実を詠い残す意義。

○わが子らに農継ぐべきを語らずに後継不足を今に嘆きぬ

深刻な農業の問題と家族の葛藤などの内容は秋田の抱える悩みを共有できる一連です。

○わが背より伸びたる蓮を揺らしつつ三味の音かそかに風にのりくる

街の中に杜や池をもつ千秋公園。静けさの中に幽かな音が聞こえる豊かさに酔いたい。

○海よりの風にひたすら稼働する発電の風車意志あるごとし

再生エネルギーの寵児とも言える風車。しかし、その建設には賛否の声があふれます。

○面接官今後のビジョンは何ですか六十五歳しばし絶句す

七十歳までは現役と言われる今。就活面接で「将来のビジョン」とは笑止千万かな？

私はいつも短歌はおもしろいと考えています。「おもしろい」などと言えば不謹慎だと言われるかもしれませんが……。でも、おもしろいのです。

三十一文字（音）の短い詩形に人々の思い、景色などが詠われる「器」がちよど良いと感じるからです。歌を詠みあるいは読んで「そうなんだあ」とハタと膝を打つ「瞬間」が至福の時なのです。

そして私は短歌を自分の日記と捉えています。かつて三日坊主でしたが日記をつけていました。ところが後日、日記を開くと読むに堪えない恥ずかしい内容にガツクリ。内緒ですが日記帳を捨てたことも度々。

ところがなんとと言うことでしょう。十年前に作った拙い（今もまずいのですが）短歌を読み返すと、その時の情景と気持ちが目の前に鮮やかに甦ってくるのです。短歌は書き込まれる言葉が少ない「思いや情景」がギュッと凝縮されるからなのかもしれません。そして、古い短歌に手を加えると過去を修正できて？かつてのさえない自分が輝きを取り戻したりもします。本質は変わりませんがネ。

結論。日々短歌を楽しみながら詠み続けて欲しいのです。継続は力です。そして温めた歌を次回も応募してくれたらいいなあと願っています。短歌の巧拙？関係ありません。短歌は自分が「そこ」にいる証なのですから。

初秋に届きし短歌五十五編

イイネ読み込め綿雲高く

伊藤寛雄

## 俳句

選後に

感じたこと



斎藤 淳子

「秋田の文芸」の俳句の賞の対象は七句での競いである。その中に佳句が何句あるのかも大切な要点であるが、このたびは全体の作品を通して、統一感があることを重視した。テーマに添ったものでなくても、作者の視点、息遣いが伝わってくる工夫があるか、そのことも加味して選ばせて頂いた。

最優秀賞『宝蔵寺にて』

禅寺に揃ふ閑伽桶さるすべり

炎昼や飢渴知りたる大櫓

供養碑の彫りの深さや蟬のこゑ

涼風や霊獣彫られたる柱

禅宗の由緒のある大寺であろう。禅寺の佇まいが彷彿としてくる句群である。一句一句がしっかりしており歴史の重みを感じる。最優秀賞にふさわしい瑕瑾のない作品である。

奨励賞『菩提寺』

寒詣の鐘の音タブの森揺する

蕉翁の句碑の地震疵風花す

菩提寺に渡る海鳴り春兆す

歌枕の風土色の濃い象潟の地を、作者独自の正攻法で詠み下し、安定感がある。櫛の森を揺する鐘の音。地震疵のある句碑への風花。海鳴りに春の兆しを感じる抒情性に共鳴した。

奨励賞『父の時計』

秋桜いくたびも開け棺窓

父見舞うことの叶わず酔芙蓉

亡き父の時計息づく星月夜

肉親の死という悲しみの極みの中で、情を抑え俳句に昇華できる作者の力量に感服した。お父上の形見の時計だけが、星月夜の下で生前と同じく時を刻み、悲しさを際立てる。

奨励賞『少年』

向日葵が咲いて少年声変はり

白南風や二の腕光る力こぶ

駒踊り受け継ぐ意志の玉の汗

テーマに添った句は、少年の未来を暗示させるかのようだ。三句目の伝統芸能を受け継ぐ決意の汗は、頼もしくもあり、神々しい。

入選『巡礼彩々』

ルルドへの山路を急ぐ夕月夜

フランスのピレネー山脈の地にあるルルド。

奇跡が起きるといふ泉があり有名な巡礼地だ。

夕月が巡礼者を急かしているかのようだ。

入選『円覚寺』

奉納の鬚の漆黒油蟬

木立に囲まれた寺域には油蟬がしきりに鳴

き、寺院の厳かな佇まいが見えてくる。

入選『尊舟』

尊舟舳ふ沼辺の下枝かな

尊舟が下枝に繋がれている峽の小さな沼。

木々を縫って聞こえてくる郭公の鳴き声が、至

福の時間を紡いでいる。

入選『影』

桐一葉影にも重さありさうな

秋の到来を告げるかのように、桐一葉がふわ

りと落ちる。想像力を「影」に働かせたところ

に詩情があり手柄。

入選『ふる里に生きる』

文机に肘を預けて暑に耐へり

日常の些事から俳味を切り取ることに長けている作者。その才能を大事にして欲しい。

入選『鱧祭り』

人として傲らず鱧を捌きけり

鱧祭で奉納した大鱧を見事に捌いている。作者の謙虚に生きている姿勢が実に潔い。

入選『またぎの里』

遠巻きに月の輪欠けし熊を追ふ

またぎ特有の言葉が随所に鏤められ、臨場感

を醸し出している。

入選『象潟路』

薰風や海をそびらに羅漢像

季語が効果的で、羅漢像を活写。

入選『卒業』

まだ皮の硬きローファー卒業す

若さが横溢し、構成力も巧みな作品。

入選『獅子ヶ鼻湿原』

新聞に茸のほてり解きにけり

中七の措辞が秀抜。詩情が投影されている。

（俳誌「海」「草笛」同人。公益社団法人俳人

協会会員）

## 選を終えて

片倉俊秀



平明でしかも奥深い俳句。日常を描きながら日常をこえていく俳句。どんなに小さくても自分の発見があり感動がある俳句。季語が生きている俳句。そして一片の詩として輝いている俳句。そんな俳句を目指して！。

最優秀賞「宝蔵寺にて」

・禅寺に揃ふ閑伽桶さるすべり

・奥つ城につづく小径や草茂る

・炎昼や飢渴知りたる大樫

・供養碑の彫りの深さや蟬のこゑ

日常を諦観した姿勢から古刹宝蔵寺をよく観察している。着眼が自然で無理が無く、寺の雰囲気や様子などの確に捉えている。一句一句が詩として練り上げられており洗練されている。感動した。

奨励賞「菩提寺」

・島一つ占めて菩提寺冬に入る

・声太き漁夫らの読経寒詣

・菩提寺に渡る海鳴り春兆す

菩提寺を背景にした風土が広がり目にみえるようだ。厳しい冬との戦いが終わろうとすることに春の兆しが見える。

#### 奨励賞「父の時計」

- ・秋桜いくたびも開け棺窓
- ・水の秋父の享年褒められる
- ・合歓は実に自肅の村の忌中札

「棺窓」を何度も開ける作者。父への深い悲しみを表出。しかもコロナ禍の中、「自肅の村」の忌中でもあるのだ。「享年褒められる」に父の人柄も読み取れる。父への思いは尽きない。

#### 奨励賞「少年」

- ・蝶生る自転車補助外しけり
- ・白南風や二の腕光る力こぶ
- ・駒踊り受け継ぐ意志の玉の汗

「蝶生る」から「玉の汗」までの句群は、少年の成長と産土を守る力強い姿を表出している。季語との取り合わせが絶妙であり、詠む者の想像力と感動を呼び起こす。

#### 入選「巡礼彩々」

- ・ルルドへの山路を急ぐ夕月夜
- ・カトリックの巡礼地。聖水を頂くための山路を急ぐ。「夕月夜」が効いている。

#### 入選「円覚寺」

- ・鎮魂の毛髪刺繡夏深し
- ・観音図だろうか、季語がよく効いている。

#### 入選「尊舟」

- ・顔のべて沿に傾くぬなは舟
- ・尊舟を乗りこなすのは難しい。今にも落ちそうになるほどのリアル感がある。

#### 入選「影」

- ・満月を乗せて夜汽車の影走る
- ・「満月を乗せて」が発見。夜汽車から灯が漏れて影をつくりながら走る情景を見事に表出。

#### 入選「ふる里に生きる」

- ・難聴の耳が捕らえし遠郭公
- ・ふるさとに生きる姿を表出。ふるさとの声が聴こえる。

#### 入選「鱈祭り」

- ・糶の鱈三頭身の巨体かな
- ・三頭身が発見。巨体に、どこか怖さと愛くるしさを感じる。

#### 入選「またぎの里」

- ・番楽を口伝根子の夜長かな
- ・伝承はすべて口伝か。勇壮な根子番楽を伝承する意気込みが伝わってくる。

#### 入選「象潟路」

- ・薰風や海をそびらに羅漢像
- ・びったりと額にはまった映像。「薰風」の季語が嬉しそうだ。

#### 入選「卒業」

- ・まだ皮の硬きローファー卒業す
- ・卒業という別れと出発。「硬きローファー」と「卒業」の取り合わせが絶妙。

#### 入選「獅子ヶ鼻湿原」

- ・根開きに袴めき合っているのち
- ・雪解がすすみ根元が開き、命の芽が袴めき合っている。湿原の命を切り取った。

#### 秋田県現代俳句協会副会長兼幹事長

#### 俳誌「合歓」同人



#### 選評

佐々木 公平

応募作品を作る場合、当然一句一句の出来、完成度を重視することは勿論である。しかし同時に一編の作品としての流れ、全体としての情緒、雰囲気があるかどうかということが大事です。このようなことを心におきながら選ばせて

もらいました。

最優秀賞「宝蔵寺にて」

禅寺に揃ふ閑伽桶さるすべり

奥つ城につづく小径や草茂る

炎昼や飢渴知りたる大櫓

涼風や靈獸彫られたる柱

一句一句がしつかりと立っており、景が見え表現も自然で、描写に実感がある。

奨励賞「菩提寺」

島一つ占めて菩提寺冬に入る

蕉翁の句碑の地震疵風花す

菩提寺に渡る海鳴り春兆す

単なる報告や説明でない、荒涼とした冬の景であるが、句の背後にその人となりを感じさせる。

奨励賞「父の時計」

水の秋父の享年褒められる

父見舞うことの叶わず酔芙蓉

亡き父の時計息づく星月夜

コロナ禍の中、父に対し温りのある心が伝わってくる。

奨励賞「少年」

未だ高き少年の声麦青む

白南風や二の腕光る力こぶ

駒踊り受け継ぐ意志の玉の汗

気負わず淡々と身辺を素直に表現、季語も生きている。

入選「巡礼彩々」

ルルドへの山路を急ぐ夕月夜

入選「円覚寺」

奉納の鬻の漆黒油蟬

入選「尊舟」

一点の沼のひかりや明易し

入選「影」

一村の面影凍るダム底

入選「ふる里に生きる」

恙なき老いの目覚めや今朝の秋

入選「鱒祭り」

鱒捧ぐ漁夫にもありし恵比須顔

入選「またぎの里」

山神へ供ふ慣ひの虎魚かな

入選「象潟路」

整松の島々囲み青田海

入選「卒業」

まだ皮の硬きローファー卒業す

入選「獅子ヶ鼻湿原」

根開きに犄めき合ってるいのち

秋田県俳句懇話会副会長

(兼) 会計幹事

俳誌「青嶺」同人

秋田市広面住

川柳



されど川柳

高橋 三鳩枝

今回の応募は昨年より九篇少ない四十五篇という結果であった。今年の特徴的傾向として、上位入賞作品はいずれも力作揃いであり特に最優秀賞作品と奨励賞一位の作品は僅差であり、最終的には選者三名の合議により決定。

また、それ以下の作品については、選者の好みに違いはあるものの、比較的すんなりと決まった。

グリーン賞候補作品は、今年も該当者がなく来年に期待したい。

選考に当たったポイントは文芸性や新鮮味

の有無、作品全体の安定性、題名との整合性を重点とする。

最優秀賞 大志を拓く

羽繕い違う景色を見たくなり

頂きへ翔る未踏だとしても

充電に放電今日を生き尽くす

念ずれば拓く大志という扉

評 いずれの選者が上位に推した作品である。具象句と抽象句を程よく混在させてドラマ風に仕上げてる。余韻の広がりもあり、実力のある女性作家を思わせる。

奨励賞 幸せの住処

明日は晴れ今日という日が辛くとも

時として龍のうろこを楯とする

お日さまも間借りしている水溜まり

評 これも全員の選者が上位に推した作品である。心象句を配置しながらも明るく前向きな作品群であり、あっさり感のある作風がいい雰囲気醸している。

奨励賞 凡人

割るときに命を思う卵やき

若い日の自分に意見できたなら

端っこで保護色になり飲んで

評 日常生活の中から句材を拾い集めて、

具象句中心の納得できる作品群である。自らの生き方を衒いなく詠んでおり好感を呼ぶ。

奨励賞 蛍草

目に映る花は心の彩で咲く

そっと咲く露の命の蛍草

背を伸せと凜と父なる冬木立

評 一連の心象句中心の作品からは、ドラマ性を感じさせ、いい雰囲気作品群である。

句の配置に一考したい。

入選 つれづれに

出る杭になろう私の正義感

子の色に融けて余生を永らえる

目の高さ合わすと通う血の絆

評 人生上の不条理を題材にして、説得力のある作品群にまとめたが、視線の更なる広がり考える。

入選 巢立ち

砂場から駆けだしていく童話の絵

巢立ちゆく無限の空に見る北斗

評 親としての子への思いを素直に詠んでいる。全体的に雰囲気の良い作品群だが題名に新しさがほしい。

入選 追憶

少年の追憶にある深い蒼

過ぎてから気付く迷路の忘れ物

評 並な事象を詠んでいる七句。全体的に新鮮味が乏しいが手慣れた作風であり、経験豊かな作家かな。

かな作家かな。

入選 明日の光

悶々と悩む終わりのないドリル

モヤモヤを吹っ飛ばしたい胸の刺

評 素朴でありきたりの句群は納得させるに充分と思う。句意の更なる奥を深めたい。

入選とはならなかったが、再起動、目指す、

夫婦川、愛しき日々、愛ア・ラ・カルト、明日

は晴れ、瞬間の行方、風の蹉跎、などが注目される、次回に期待する。

秋田県川柳懇話会副会長

川柳花清水、川柳葱坊主、代表

穿ちと詩性

宮 腰 流 木



文芸川柳は、サラ川などとは峻別されるものである。川柳の楽しみ方は色々あります。

宮 腰 流 木

単作の競吟とは趣が違うのが連作です。

昨年に続いて皆様の力作にお会いすることができました。

高齢化社会は川柳界においても顕著で、今回の参加者は七十代と八十代で七十%でした。

内容は「健康と老い」「家族との絆」「回想と願望」などがありました。コロナ関連の作品は時事吟として取り上げやすいのですが、体験を共有しているだけに類句類想になりやすいので少なかった。時事吟は一過性の多さから作品としては一考を要すると思います。

作品全般の感想

連作には題があります。題と句の意味合いもなく、切り取ってついたり、題と句に整合性のない作品では連作になりません。

また、言葉を手につくったり、若者言葉のように切ったり縮んだりすると、独りよがりの句になり楽屋句になってしまいます。

事実をそのまま述べてしまうと観光案内になってしまい説明句となります。

四文字熟語や格言をストレートに使うことは、自分の言葉で自分を詠う川柳では領けないものがあります。慣用語となっているか吟味する必要があります。パロデーとして表現するの

も方法です。

川柳は領きの文芸でもあります。自分の領きが読み手にも領けるような表現が求められます。また、川柳には謎解きの面白さもあります。ストレートに表現してもよいが比喻で読み手に想像させるのも川柳です。連作と限らず大事なのは、人情の機微にふれているか。本質を見抜いて突いているか。嫌みのないアイロニーを効かせているか。すなわち穿ちです。

余韻と省略が秀句を生む詩性が大切です。

○大志を拓く

大上段な題にして詠むほどに領かせるうま味があり六句の比喻が効いています。

また、止め句の構成が連作の妙。

○幸せの住処

連作として句のバランスがよい。二、三句五、六句を四句でアクセントをつけているのは、なるほどと思わせるものがあります。

○凡人

領き方が句全体をとおして読み手に「そんなんだよね」と共感をよびます。

分かりやすいことが大事です。

○蛭草

蛭草は露草の異名、題をあえて蛭草として

一、三句で詠い、沙羅から平家物語が浮かんで文学的な味わいと詩性のある作品。

○つれづれに

一句の切り込みが鋭い。自分を詠い過ぎていように見えるが裏を返せば相手の事。ベテランらしい句調構成です。

四、五句に人情の機微を感じます。

○巢立ち

一、四、六句に躍動を感じさせます。

川柳はわかりやすいことです。

○追憶

この連作の良さは下五の座り（座の五）の良さであり。句全体のリズムにもつながる。一、四、五、六句の体言止めです。

○明日の光

追憶の句はとかく暗くなりがちです。さりげなく読み領かせることで共感を呼んでいます。

今回の作品の中には一句としては佳句がありました。連作としても次の方々には期待します。

○再起動 ○愛しき日々 ○夏の厨

○風の蹉跎 ○明日は晴れ

川柳あきた主幹



## 琴線に触れて

柴田政幸

私が「川柳を作る時の心構え」は、次の十箇条です。①一日一句、そして推敲を。②平易な言葉で表現を。③適切な漢字を使用して。④口語体で記述を。⑤誤字・脱字・当て字は厳禁。⑥五・七・五の十七文字で表現を。⑦上の句が六になっても、中の句七と下の句五は厳守する。⑧自分の句風は変えない。⑨人間が躍動している十七文字を。⑩自分の心で見たり感じたことを表現する十七文字を。

機会があつて私が選者になった時は、前記の十箇条を基本にし、さらに自分の琴線に触れ、強く感性を揺さぶった句を選する事を心掛けています。

かつて私もあきたの文芸に応募した時、粒選りの川柳七句を選ぶ作業が一番厳しい作業でした。「たかが七句、然れど七句」でした。応募作品数四十五（三百十五句）を選しながら、その時の心境が思い出されました。また、今後の青少年の文芸活動を応援することを目的として

いる「グリーン賞」に該当する川柳に触れることが出来なかったことは非常に残念です。

最優秀賞 大志を拓く

・頂きへ翔る未踏だとしても

・凜として青天を射る夢泥棒

・闘うと決めた命に水をやる

・念ずれば拓く大志という扉

粒ぞろいの七句の川柳が揃っています。そして最後の七句目で、自分の力強い意気込みを

十七文字で見事に表現しています。

奨励賞 幸せの住処

・お日さまも間借りしている水溜まり

・本当の幸せ住んでいる心

私が最高位に推した作品です。作者の心で感じた色々な幸せを見事に詠っています。コロナ

禍の中で、ほっとする温かさを感じさせてくれる作品でした。

奨励賞 凡人

・割るときに命を思ふ卵やき

・カタカナ語ない民謡に癒やされる

日常生活で見落とされそうな事象に、鋭い視

点を向け、インパクトのある句をさり気なく

詠っています。ただ、安易な句が少々見られる

のが残念です。

奨励賞 蛍草

・目に映る花は心の彩で咲く

・そっと咲く露の命の蛍草

畑や道端などに自生する一年草の蛍草に作者自身を重ねて表現しています。多くの別名のある「つゆくさ」から、蛍草を題名に選んだセンスには感服します。

入選 つれづれに

・目の高さ合わすと通う血の絆

日常を題材に、作者の優しさがにじみ出ています。

入選 巣立ち

・思うまま翔べ人生は君のもの

子と思う親の心が見事に表現されています。そして、子への期待感も随所に見られます。

入選 追憶

・少年の追憶にある深い蒼

句がなめらかで言葉の使い方が巧みです。七句とも手慣れた作品です。

入選 明日の光

・天空に明日の光を 掴みとる

「一字空け」の技法でまとめた最後の句が、

全体を力強く締め括っています。

結びに、入選に今一步の方の作品から心に

残った句を紹介します。次回を期待して  
ます。

目指す

・何時か往く道はきれいに付けておく

夫婦川

・淀みなく流れる筈の夫婦川

いつもの場所

・いつもの場所いつもの椅子がある安堵

再起動

・泥臭く生きる家族の後ろ楯

少子化 日本

・少子化の日本それでも陽は昇る

ふあうすと川柳社同人

ふるしろ川柳会主宰

仙北市角館町在住

## エッセイ

### 選考を終えて



澤井 範夫

昨年の選評の冒頭で、私はコロナ禍について「いまだ先行きが見通せない状態が続いている」と書いた。一年経ってもその状況は変わらず、社会は不安に包まれたままである。こうした中で、昨年同様二五篇の応募があったことは喜ばしいことであった。

選考は、入賞作品四篇についてはスムーズに決まったが、最優秀賞をその中からの作品にするかでは意見が分かれた。時間をかけて話し合った結果、最優秀賞を「北海道生まれのパンダ豆」に決め、他の三作品を奨励賞とした。

最優秀賞の「北海道生まれのパンダ豆」は、内容、構成、表現どれもよく、バランスのとれた清涼感と気品に満ちた作品であった。作家吉村昭は、「エッセイとは、人間を描くことである」と云っている。この作品の作者はパンダ豆

を通して、自分という人間がどういふ人間なのかを均整のとれた文体で描いた。そこに私はこの作品の魅力を感じた。上質なエッセイとして心地よく読めた作品だったが、私としてはもう少しストーリー性や感動が欲しかった。

奨励賞の「父のこと」は、「人生二〇〇年代」を背景に父の死を素材にした作品であった。死を迎えた九八歳の父を家族で見舞った時、姉の手は何度も握り返したのにもかかわらず、何故自分の手は握り返さなかったのか。その疑問を解く道筋が、推理小説を読むように読み手をうまく引き付けた。結末に余韻があり印象深い作品であったが、「氷川清話」の引用に工夫があればと、私は思った。

奨励賞の「じいさんばあさん」は、Mさん夫婦の有り様を通して生きることの歓びと哀しみを描いた作品であった。緊張感のある出だしが秀逸だった。緊迫した電話の遣り取りは視覚的に表現されていて、読み手がその場にいるかのように思わせた。森鷗外の「ぢいさんばあさん」の話はMさん夫婦にうまく合致し、作者の文学的素養の深さを感じた。最後の一行は落語の「さげ」を思わせ工夫を感じたが、なくてもよいように思われた。

奨励賞の「銀杏並木の画廊」は、移ろいゆく時の流れが減反画廊の姿から読み手に伝わってくる作品であった。鷺の話から減反画廊に導く筋立ては巧みな構成だった。今は叢化（くさむけ）した減反画廊が花園に蘇る日は来るのか。作者はそう強く願っているが、読み手の気持ちは複雑だ。この作品の要は結末にあり、最後の一文がうまく余情を醸し出していた。

次に、私の心に残った何編かの作品について、一言触れておきたい。

「千秋楽をもう少し先に延ばそう」は、エッセイとして形が整っていて感心したが、感心を超える「何か」が不足していた。

「サモワール」は、興味の引くストーリーを構成よくまとめていたが、読み手の心を揺さぶるまでには至らなかった。

「ニャン太郎」の陰謀」は、軽妙でユーモアもあり面白く読めたが、その線で止まっているのが残念であった。

「泉外旭川駅」は、出だしが温かくこれとは思わせたが、読み進むにつれて平板になっていったのが惜しかった。

「薪ストーブ」は、平明で、読みやすい作品だったが、物語性に欠けているせいか平凡な印

象を拭いきれなかった。

「詩歌つれづれ 桜はうたう」は、作者の確かな知識と豊かな経験から生まれた作品だったが、歌が多すぎて読み手は困惑した。

「金勇さん」は、ここで働く作者の人柄がよく伝わってきた作品だったが、構成、結末が弱く、一歩抜けきることが出来なかった。

「方言の行方」は、方言と地方文化について語ったもので伝えたいことは分かるが、そこを突き抜けてエッセイになると私は思った。

最後に、「あきたの文芸」のエッセイ部門を盛り上げていくために、今回賞を得た方も、逸した方も、来年もまた応募してくださいことを期待して、私の三年の任を終える。



## 選評

中尾 信一

今年度の最優秀賞「北海道生まれのパンダ豆」は、旅先で出会った通称「パンダ豆」を秋田に持ち帰った後、丁寧に栽培して収穫し、煮豆にして食べるまでの話。その白と黒の豆の色

合いから、「パンダ」「シャチ」「鞍掛」といずれも動物にまつわる別名があるという説明が面白い。その豆をまるでペットのように「めんこい」と感じる作者の心情に自然に寄り添えてしまう。後半では、栽培の過程やその苦労が、的確で冷静な筆致によって綴られる。豆を「濁りのない黒い背中」とか「陶磁器のように白のお腹」と描写する比喩が使えるのは、客観的な観察眼に詩的な情緒を滲ませる言葉遣いを知っているからだろう。「植物の不思議」を思う作者は、「言葉の不思議」にもまた習熟している。壮大なドラマが起こっているわけでもないのに、出来事とそれに付随する心情が淡々と滑らかに書き進められ、最後まで飽きさせない。読み終わった後に、あらためて作者の力量に気づかされる。

奨励賞「父のこと」の作者は、父が死ぬ間際の出来事が引き起こした「もやもや感」に何とか決着をつけようとしている。「私」がベッドに横たわる父の手を握りしめた時、姉の場合と違って、父は自分の手を握り返してはくれなかった。そこにどういう意味があったのか、知りたいと思う。妻とともに認知症の父の介護にたずさわった月日のことが、頭を離れない。父

が「私」に対して示す無反応は、そうした時間を経た上での「人生最後の抗い」だと思えてしまふ。そうした「何か落し物をしたような」心情が切実に誠実に語られる。遺品の中にあつた勝海舟の本から、父が自分の死をどう受け入れていたのかという疑問への解答を見出したというのが結末だが、そうした着地点が本当に作者の「もやもや感」を完全に解消させたのだろうか。むしろ読後に残るのは、葛藤とその解決の間を依然として揺れ動き続ける作者の気持ちの方だ。

同じく奨励賞の「じいさんばあさん」というタイトルは、森鷗外の短編小説に由来する。理由あつて四十年近くも離れていた夫婦が、再会後も新婚のように仲睦まじく暮らし続けるという物語だが、それは作者が敬意にしているMさんとその奥さんとの関係に重ね合わせられる。出稼ぎのため長い間家を留守にし続け、やっと一緒に暮らせるようになったかと思うと癌で入院したMさん。家で一人きりの妻は、寂しさのあまりそれほど親しくもない作者に夜の電話をかけてきて、夫とののろけ話をする。辛抱強く聞き手になる作者の思いやりにも感心するが、何と言つても「Mさんの奥さん」の内気でもあ

り率直でもあるキャラクターに興味を惹かれる。夫婦の愛情を憚ることなく訴える態度に見られる裏表のなさが、読者の胸に素直に届け込んでくる。比較的短い文章にも関わらず、「Mさんの奥さん」のユニークさを見事に描ききっている。

もう一つの奨励賞「銀杏並木の画廊」は、減反によって雑草地化していた場所に、ある農民彫刻家による作品群を偶然に発見した時の話。その石像を中心とした彫刻を予期せぬ場所で見つけた驚きが、文章を勢いよく前進させる。銀杏並木をはじめ、秋田らしい田園風景の描写が正確で、言葉によって一つの絵を作り出そうとする作者の意図が成功している。特に、石像群を見つめるきつかけとなった、稲田に舞い降りてきた美しい白鷺に目を奪われている場面が強く印象に残つた。おそらくこの白鷺の姿を追い続けるだけでも、立派なエッセイとして成立していただろう。

今回の入賞作全体を通して感じたのは、エッセイの面白さは、出来事を物語る構成の巧みさ、言葉が持つ力を使うとおり操る能力、さらにそれらを両立させるバランス感覚にある、ということだった。



柴山芳隆

完成度を高める

最優秀賞に輝いたのは「北海道生まれのパンダ豆」である。最初から最後まで対象のパンダ豆にきちんと焦点を当てた構成がしっかりしており、全体的なまとまりのよい作品になっていて好感がもてる。落ちついた穏やかな筆致と相まって、すなおに読者のこころに入ってくるところがよかった。

三編が奨励賞を受賞した。「じいさんばあさん」は、森鷗外の名作『ぢいさんばあさん』の利用の仕方が巧みで感心した。書き出しの部分に秋田弁にまつわるエピソードをもってきたのも成功している。少しばかり表現や表記上の問題があるので、そこを改善して完成度を高めてほしい。「銀杏並木の画廊」は、農民彫刻家皆川嘉左エ門とその作品について紹介したものである。彫刻作品の中に、減反に反対した皆川の魂をしっかりと見ている点は評価できる。冒頭部分の、鷺に関わる描写は長すぎる。もっと早

めに本題に入った方がよかった。「父のこと」は、父親の死と父の愛読した『氷川清話』にまつわる一編である。情に流されず淡々と描写している点が良い。父に対する作者の思いがもう少し出ていてもよかったのではないか。

惜しくも賞は逸したが、気になる作品も少なくなかった。「泉外旭川駅」は、先ごろ開業したばかりの泉外旭川駅の近くに住む作者が、駅建設の過程を日々観察し、竣工後は実際にその駅を利用して秋田駅周辺に向いている様子を綴った一作。筆の赴くままに書き流していく、いかにも随筆風の作品である。素材をもう少し絞れば、深めるべきところをもっと深められたに違いない。「シンデレラごっこ」は、ツイッターという新しいツールを使って夢を見ると同時に、現実の自分をきちんと見詰め直してもいる。軽薄短小とか言われる現代にあつて、表面はそう見えるかもしれないが実際はきちんとした生活を送っている若者の姿がしのばれて安心した。「あきたの文芸」のエッセイ部門に新風を持ち込んだ点も評価したい。次作に期待する。

「薪ストーブ」は、薪ストーブのすばらしさを訴えていて共感を呼ぶ。ただ、「ですます」

調は、この作品では成功しているとは言えない。「物語との出会い」は、全体的に整った作品でこれといった瑕疵は見当たらないものの、読み手を引き付ける魅力にも欠ける。何かひとつパンチがほしい。「方言の行方」は、現代における方言の位置づけや価値について論じた意見文である。趣旨には賛同できるが文芸作品になり切れていない憾みが遺る。「サモワール」は、ロシアの湯沸かし器サモワールを店の名にした喫茶店にまつわるお話である。作者はあまり意図していないようだが小説仕立てになっている。最初から小説にした方がおもしろかったと思う。

「詩歌つれづれ 桜はうたう」には、自作と思われる短歌が一〇首以上挿入されているが、それらがすべてこの作品のエッセイとしての質を高めているようには思えない。「対蹠なこ」とはなぜこの文題になったのかよく分からない。文題は文題、中身は中身といった印象である。「DNA 凶と出るか吉と出るか」は、漱石の「坊ちゃん」と関連させながら、自分から受け継いだDNAについての感慨を述べたもの。題材はおもしろいが表現や表記にやや難があるのは残念。「黄昏の誘い」は、赤レンガ

郷土館で行われた舞踏とトークを娘と一緒に鑑賞した折の様子を綴ったもの。一行一文のところが何か所があるが、特別表現効果を挙げているとは思えない。「一緒に歩こう」は、犬についてよく分かっても、作者の姿がおぼろげにしか見えてこないのは欠点。「鉄路の思い出」は、作者個人の単なる思い出話に終わってしまっている。

他にも触れたい作品はあるが、残念ながらここで紙数が尽きた。

# 「あきたの文芸」第54集応募状況

## 1 部門別（応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
R3年度	14	38	55	78	45	25	255
R2年度	10	41	63	91	54	25	284
R元年度	10	40	60	77	47	21	255
H30年度	12	36	51	98	47	23	267
H29年度	13	52	67	88	55	33	308

## 2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳		エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
R3年度	9	5	13	25	20	35	44	34	31	14	13	12	130	125
R2年度	7	3	10	31	23	40	51	40	37	17	16	9	144	140
R元年度	6	4	14	26	26	34	42	35	30	17	13	8	131	124
H30年度	7	5	14	22	23	28	57	41	27	20	9	14	137	130
H29年度	7	6	15	37	31	36	50	38	37	18	15	18	155	153

## 3 年代別

	総数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
R3年度	255	11	6	3	10	21	51	77	68	7	1
R2年度	284	22	6	3	10	18	51	98	69	7	0
R元年度	255	20	4	1	10	23	49	89	55	4	0
H30年度	267	10	4	7	8	21	49	91	74	3	0
H29年度	308	20	6	7	10	28	52	105	75	5	0

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
小説・評論	1	1	1	1	1	6	1	2	0	0
詩	6	3	1	2	6	9	6	5	0	0
短歌	0	1	0	2	3	8	17	22	2	0
俳句	4	0	1	1	6	13	28	22	3	0
川柳	0	0	0	1	4	8	20	11	1	0
エッセイ	0	1	0	3	1	7	5	6	1	1

## 4 新旧割合（作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	11	27	46	57	37	19	197
新	3	11	9	21	8	6	58
計	14	38	55	78	45	25	255

再…以前にも応募したことがある方  
 新…今回初めて応募された方

## 5 月別応募数

6月	7月	8月	計
29	29	197	255

# あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第五十三集（令和二年度）応募二百八十四作品

・小説・評論部門

・詩部門

・短歌部門

・俳句部門

・川柳部門

・エッセイ部門

奨励賞	雨宮 かつら	「大文字の見える街から」
奨励賞	菅原 健三郎	「あの世に本は持っていけない」
奨励賞	いしざとゆうき	「学寮」
奨励賞	鈴木 仁	「ありがとう」
最優秀賞	長澤 妙子	「秋田城趾」
奨励賞	加賀谷 育	「津軽」
奨励賞	熊谷 すが子	「花の風」
奨励賞	森野 奈津	「夏の大地から」
最優秀賞	池田 郷太郎	「米作り」
奨励賞	佐々木 成	「山陰の村」
奨励賞	土谷 敏雄	「廃鉱の跡」
奨励賞	岸部 吟遊	「羽後抒情」
最優秀賞	佐藤 ちずる	「揺れる想い」
奨励賞	菅原 浩洋	「風の言葉」
奨励賞	佐藤 啓子	「日日新た」
奨励賞	澤田 幸代	「薔薇の唇」
最優秀賞	佐藤 清助	「ゆずり葉とおしゃべり男」
奨励賞	岸部 ハマ子	「平気で生きている」
奨励賞	小松 紀子	「お地藏様のお祭りとアゲメダレ」
奨励賞	春野 昌和	「雑木林の道の歌」

## 編集後記

◎令和三年度あきた県民文化芸術祭2021  
「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸  
第五十四集』を刊行しました。

この作品集は、十六歳から九十五歳までの応募作品二百五十五編より、最優秀賞四編、奨励賞十八編、入選二十三編、二十五歳以下の文芸活動を応援するグリーン賞六編、計五十一編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2021の一環として実施しております。応募いただいた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をしてくださった各市町村、報道機関、図書館などの文化施設、さらには、事前審査から選考・校正まで多大なる御協力をいただいた選考委員の皆様には深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今後もより読みやすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、一層充実させていきたいと思っております。

## あきたの文芸第五十四集

あきた県民文化芸術祭2021

「あきたの文芸」入賞作品集

令和三年十一月十五日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話 〇一八―八六〇―一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

印刷・製本 株式会社三森印刷





# たくさんのご応募 ありがとうございます！

応募総数 255 作品

入賞 45 作品

小説・評論	2 編
詩	8 編
短歌	9 作品 63 首
俳句	14 作品 98 句
川柳	8 作品 56 句
エッセイ	4 編

グリーン賞 6 作品

小説・評論 詩



ブンカ DE ゲンキ  
はこちから！



あきた県民  
文化芸術祭  
2021

あきたの文芸 第54集  
入賞作品集  
令和3年11月  
発行・秋田県(非売品)

photo:「蓬莱峡の秋」2015 Fukai Fumiko